斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

古志本郷遺跡Ⅰ

1999・3

雲工事事務所
教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

古志本郷遺跡Ⅰ

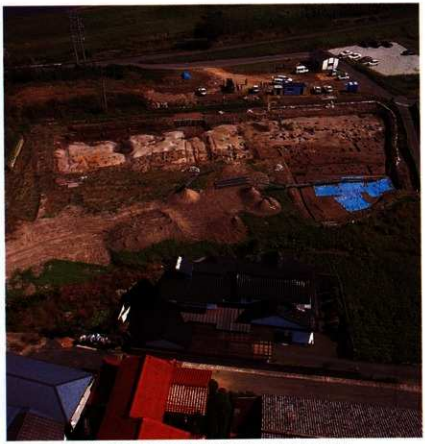
1999・3

建設省出雲工事事務所
島根県教育委員会

古志本郷遺跡SD16・17出土の土器

カラー図版2

古志本郷遺跡から神戸川下流方面を望む（C区を調査中）



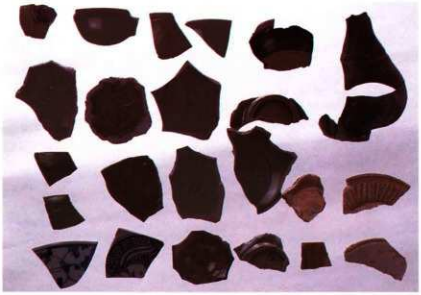
古志本郷遺跡から神戸川を望む（A区を調査中）

古志本郷遺跡
C区SD16
EE'
(写真は裏焼き)

古志本郷遺跡
C区SD17
CC'

古志本郷遺跡
C区SD18
第1土層図

カラー図版4



古志本郷遺跡
出土貿易陶磁器
及び瀬戸・美濃焼

古志本郷遺跡
D区出土
肥前系磁器

古志本郷遺跡
実測図非掲載
の陶磁器

序

建設省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成3年度から島根県教育委員会のご協力のもとに調査を行っています。古志地区周辺には数多くの遺跡があり、今回調査箇所においても、弥生時代の竪穴住居跡や、それをとりまくように大溝がみつかっており、古くから人々の生活が営まれていたことがわかりました。

建設省出雲工事事務所といたしましては、今後も同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存のため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が埋蔵文化財に対するより一層の関心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し、心から厚くお礼申しあげます。

平成11年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所

所長　鈴木　篤

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成３年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の発掘調査を行っています。本書は平成７年度から平成９年度に発掘を実施した遺跡のうち、古志本郷遺跡について、その調査をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲西部の出雲市周辺地域は、島根県内でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産が眠っているところです。今回は、斐伊川放水路拡幅部のうち、古志町内の調査を行いました。この調査により、弥生時代の大溝をはじめとした数々の遺構・遺物が検出され、近世に至るまでの複合集落であることが判明したことは、この地域での歴史を解明していく上での貴重な資料となりうるものです。

本書が多少なりとも地域の埋蔵文化財に関する理解や歴史学習に役立てば幸いです。

なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては建設省中国地方建設局出雲工事事務所を始め、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対して心から厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

島根県教育委員会

教育長　江口博晴

例　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成７・８・９年度に実施した、斐伊川放水路予定地内古志本郷遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査組織は次の通りである。

調査主体 島根県教育委員会

○平成７年度

事務局　勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、森山洋光（課長補佐）、佐伯善治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　平石　充（埋蔵文化財調査センター主事）、渡辺　裕（同教諭兼主事）、黒谷達典（臨時職員）、柴崎香織（臨時職員）

○平成８年度

事務局　勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、森山洋光（課長補佐）、古崎蔵治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　平石　充（埋蔵文化財調査センター主事）、三代貴史（同教諭兼主事）、阿部智子（臨時職員）、江角ひろみ（臨時職員）

○平成9年度

事務局　勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、島路徳郎（課長補佐）、古崎蔵治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　平石　充（埋蔵文化財調査センター主事）、三代貴史（同教諭兼主事）、阿部智子（臨時職員）

○平成10年度

事務局　勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、島路徳郎（課長補佐）、秋山　実（課長補佐）、川崎　崇（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　平石　充（埋蔵文化財調査センター主事）、三代貴史（同教諭兼文化財保護主事）、内出直美（臨時職員）

遺物整理　来海順子、広田和子、鉄尾愛子、石川真由美、松野美小恵、須山啓子、阿部春枝、田村尚子、加藤麻子、中島直美、槇野喜久恵、藤田民江、石川とみ子、糸賀五月

3．発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、(社)中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所長）、原　博明、中村弘己、竹田光男、北川恵樹、小村敏行、岡田篤史、高橋恵生、倉橋博之（以上技術員）、板倉律子、原　洋子、渡辺美智子（以上事務員）

3．発掘調査作業員

麻学登志美、足立今栄、安達治幸、安達幸雄、石川　徳、石崎茂義、石田　純、石田亨夫、石飛すみえ、石橋清美、伊藤ゆき江、糸賀エミ子、宇越トラエ、内田益美、太田幸一、岡真一郎、岡田　聡、小原喜美子、景山朋子、梶谷幹子、片寄亮子、勝部清美、勝部久江、勝部虎雄、金本武夫、金本マス子、栗原　力、川上　顕、川上登志子、神田千歳、桐原　彬、雲島賢二、幸田チヨコ、小坂賢史、小谷四郎、斉藤淳一、向村房子、佐々本明美、佐藤幸作、佐藤フミ子、塩野啓子、下島純子、瀬島宗子、関山悦子、園山正一、高瀬稔夫、高橋浩則、高原洋子、高見和子、高見トヨ子、高見正己、多久和毅、武田顕慶、武田清子、田中二三、玉木美恵子、珍部美江子、中尾成樹、長岡公子、永井宏子、永瀬廣吉、新田幸男、畑　豊美、原　博信、原ミチ子、樋野豊美、日野美穂子、平尾文子、比留木美津子、深田保宏、福庭正、藤井雄志、藤原恒治、舟木　昇、松浦克郎、棟石倉七、村上裕子、矢田千也子、矢田広利、山毛永行、山崎佐代子、山根信枝、吉田十四子、吉田良美、和久利吉猶、渡辺愛子

4．遺物の実測および写真撮影は調査員で行ったが、写真撮影の一部については牛島茂氏（奈良国立文化財研究所専門職員）に依頼した。

5．発掘調査、ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）

田中義昭（島根大学法文学部教授）、中村唯史、村上　勇（広島県立美術館）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、三浦一美（柿木村教育委員会）、水津浩信（六日市町教育委員会）、次山　淳（奈良国立文化財研究所）、松村冬樹（名古屋市見晴台郷土博物館）、秋山浩三（財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、川上稔・岸　道三・松山智宏・三原一将・米田美恵子（出雲市教育委員会）、榊原博英（浜田市教育委員会）

6．挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

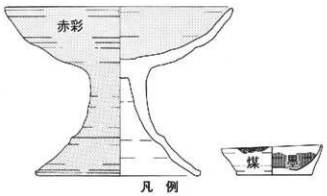
7．挿図中の縮尺は図中に示した。

8．本書に掲載した「第２図」は建設省国土地理院発行の地形図、「第４図」は出雲市作成の出雲市都市計画図、「第５図」は建設省出雲工事事務所作成図を一部改変して作成した。

9．本書で使用した遺構記号は以下の通りである。

ＳＩ（竪穴建物跡）、ＳＢ（掘立柱建物跡）、ＳＡ（柵）、ＳＥ（井戸）、ＳＤ（溝）、ＳＫ（土壙）、ＳＸ（その他の遺構）

10．土器の彩色等については、右のように表現する。



11．本書の執筆・編集は平石と三代が協議してこれを行った（文責は目次に明記）。

12．出土遺物および実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯（二代）…… 1
Ⅱ　古志本郷遺跡の位置と環境（二代）…… 5
Ⅲ　古志本郷遺跡の調査（平石）…… 11
第１章　調査の経過と概要…… 12
第１節　調査前の状況…… 12
第２節　調査の経過と概要…… 12
第２章　調査の結果（平石）…… 18
第１節　Ａ区の調査…… 18
第２節　Ｂ区の調査…… 72
第３節　Ｃ区の調査…… 84
第４節　Ｄ区の調査…… 212
第５節　Ｅ区の調査…… 250
第３章　まとめ（平石）…… 295
第１節　弥生時代中期後半～後期前半の様相…… 296
第２節　弥生時代終末～古墳時代前期の様相…… 299
第３節　古墳時代後期の様相…… 303
第４節　奈良・平安時代の様相…… 305
第５節　中・近世の様相…… 308
Ⅳ　自然科学的分析…… 321
古志本郷遺跡ＳＫ２１・２２埋納甕の土壌分析
（中野益男・中野寛子・長田正宏）…… 323
古志本郷遺跡発掘調査に伴う花粉分析（渡邊正巳）…… 332

挿図目次

第１図　調査対象位置図…… 7
第２図　周辺の遺跡…… 8
第３図　明治６年の土地利用状況図…… 12
第４図　古志本郷遺跡の発掘調査区域位置図…… 13
第５図　古志本郷遺跡調査区配置図…… 14
第６図　古志本郷遺跡遺構図…… 15･16
第７図　古志本郷遺跡Ａ区遺構図…… 19･20
第８図　古志本郷遺跡Ａ区調査区土層図…… 21
第９図　古志本郷遺跡ＳＢ０１・出土遺物実測図…… 22
第10図　古志本郷遺跡ＳＢ０２実測図…… 23
第11図　古志本郷遺跡ＳＢ０３・出土遺物実測図…… 24
第12図　古志本郷遺跡ＳＢ０４実測図…… 25
第13図　古志本郷遺跡ＳＢ０５・出土遺物実測図…… 27
第14図　古志本郷遺跡ＳＢ０６実測図…… 28
第15図　古志本郷遺跡ＳＢ０７実測図…… 29
第16図　古志本郷遺跡ＳＢ０８・出土遺物実測図…… 30
第17図　古志本郷遺跡ＳＢ０９・１０、出土遺物実測図…… 31
第18図　古志本郷遺跡ＳＡ０１実測図…… 32
第19図　古志本郷遺跡ＳＸ０１実測図…… 33
第20図　古志本郷遺跡ＳＸ０１出土遺物実測図…… 34
第21図　古志本郷遺跡ＳＥ０１実測図…… 36
第22図　古志本郷遺跡ＳＥ０１出土遺物実測図…… 37
第23図　古志本郷遺跡ＳＥ０２実測図…… 38
第24図　古志本郷遺跡ＳＥ０２井筒実測図…… 39
第25図　古志本郷遺跡ＳＫ０１実測図…… 40
第26図　古志本郷遺跡ＳＫ０１出土遺物実測図…… 41
第27図　古志本郷遺跡ＳＫ０２・出土遺物実測図…… 42
第28図　古志本郷遺跡ＳＫ０３～１４実測図１…… 43
第29図　古志本郷遺跡ＳＫ０３～１４実測図２…… 44
第30図　古志本郷遺跡ＳＫ０３～１４出土遺物実測図１…… 45
第31図　古志本郷遺跡ＳＫ０３～１４出土遺物実測図２…… 46
第32図　古志本郷遺跡ＳＤ０１実測図…… 47
第33図　古志本郷遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図１…… 48
第34図　古志本郷遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図２…… 49
第35図　古志本郷遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図３…… 50

第36図　古志本郷遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図４……52
第37図　古志本郷遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図５……53
第38図　古志本郷遺跡ＳＤ０１出土遺物実測図６……54
第39図　古志本郷遺跡ＳＤ０２実測図……55
第40図　古志本郷遺跡ＳＤ０２出土遺物実測図１……56
第41図　古志本郷遺跡ＳＤ０２出土遺物実測図２……57
第42図　古志本郷遺跡ＳＤ０３～１４土層図・出土遺物実測図１……58
第43図　古志本郷遺跡ＳＤ０３～１４出土遺物実測図２……60
第44図　古志本郷遺跡ＳＤ０３～１４出土遺物実測図３……61
第45図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図１……62
第46図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図２……65
第47図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図３……66
第48図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図４……67
第49図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図５……68
第50図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図６……70
第51図　古志本郷遺跡Ａ区調査区出土遺物実測図７……71
第52図　古志本郷遺跡Ｂ区遺構図……72
第53図　古志本郷遺跡Ｂ区調査区土層図……73
第54図　古志本郷遺跡ＳＥ０３実測図……74
第55図　古志本郷遺跡ＳＥ０４実測図……75
第56図　古志本郷遺跡ＳＥ０４出土遺物、ＳＫ１５～１９実測図１……76
第57図　古志本郷遺跡ＳＫ１５～１９実測図２・出土遺物実測図１……77
第58図　古志本郷遺跡ＳＤ１５土層図……78
第59図　古志本郷遺跡ＳＤ１５出土遺物実測図……79
第60図　古志本郷遺跡Ｂ区調査区出土遺物実測図１……80
第61図　古志本郷遺跡Ｂ区調査区出土遺物実測図２……82
第62図　古志本郷遺跡Ｃ区遺構図……85・86
第63図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区土層図……87
第64図　古志本郷遺跡Ｃ区上層遺構図・溝群土層図・出土遺物実測図……88
第65図　古志本郷遺跡敷石遺構１実測図……89
第66図　古志本郷遺跡敷石遺構２実測図……90
第67図　Ｃ区出土曲物に伴う貨幣……90
第68図　古志本郷遺跡ＳＢ１１・１６実測図……91
第69図　古志本郷遺跡ＳＢ１２実測図……92
第70図　古志本郷遺跡ＳＢ１３実測図……93
第71図　古志本郷遺跡ＳＢ１４・１７実測図……94
第72図　古志本郷遺跡ＳＢ１５実測図……96
第73図　古志本郷遺跡ＳＢ１８実測図……97

第74図　古志本郷遺跡ＳＢ１９実測図・出土遺物実測図……98
第75図　古志本郷遺跡ＳＢ２０実測図・出土遺物実測図……99
第76図　古志本郷遺跡ＳＡ０２・０３実測図……100
第77図　古志本郷遺跡ＳＸ０２・出土遺物実測図……101
第78図　古志本郷遺跡ＳＸ０３・出土遺物実測図１……102
第79図　古志本郷遺跡ＳＸ０３出土遺物実測図２……104
第80図　古志本郷遺跡ＳＸ０３出土遺物実測図３……105
第81図　古志本郷遺跡ＳＥ０５実測図・出土遺物実測図１……106
第82図　古志本郷遺跡ＳＥ０５出土遺物実測図２……107
第83図　古志本郷遺跡ＳＥ０６・出土遺物実測図……108
第84図　古志本郷遺跡ＳＥ０７・出土遺物実測図……109
第85図　古志本郷遺跡ＳＥ０８実測図、出土遺物実測図１……110
第86図　古志本郷遺跡ＳＥ０８出土遺物実測図２……111
第87図　古志本郷遺跡ＳＫ２０実測図……113
第88図　古志本郷遺跡ＳＫ２１実測図……114
第89図　古志本郷遺跡ＳＫ２２・出土遺物実測図……115
第90図　古志本郷遺跡ＳＫ２３実測図・出土遺物実測図１……116
第91図　古志本郷遺跡ＳＫ２３出土遺物実測図２……117
第92図　古志本郷遺跡ＳＫ２４実測図・出土遺物実測図１……119
第93図　古志本郷遺跡ＳＫ２４出土遺物実測図２……120
第94図　古志本郷遺跡ＳＫ２４出土遺物実測図３……121
第95図　古志本郷遺跡ＳＫ２５～３４実測…１……122
第96図　古志本郷遺跡ＳＫ２５～３４実測…２・出土遺物実測図……123
第97図　古志本郷遺跡ＳＫ３５実測図……124
第98図　古志本郷遺跡ＳＤ１６土層図１……127・128
第99図　古志本郷遺跡ＳＤ１６土層図２……129
第100図　古志本郷遺跡ＳＤ１６遺物出土状況図１……131
第101図　古志本郷遺跡ＳＤ１６遺物出土状況図２……132
第102図　古志本郷遺跡ＳＤ１６遺物出土状況図３……133
第103図　古志本郷遺跡ＳＤ１６遺物出土状況図４……134
第104図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１……135
第105図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図２……136
第106図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図３……137
第107図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図４……138
第108図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図５……139
第109図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図６……141
第110図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図７……142
第111図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図８……143

第112図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図９……144
第113図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１０……146
第114図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１１……147
第115図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１２……148
第116図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１３……149
第117図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１４……151
第118図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１５……152
第119図　古志本郷遺跡ＳＤ１６出土遺物実測図１６……153
第120図　古志本郷遺跡ＳＤ１７土層図１……155・156
第121図　古志本郷遺跡ＳＤ１７土層図２……157
第122図　古志本郷遺跡ＳＤ１７遺物出土状況図１……158
第123図　古志本郷遺跡ＳＤ１７遺物出土状況図２……160
第124図　古志本郷遺跡ＳＤ１７遺物出土状況図３……161
第125図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図１……162
第126図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図２……163
第127図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図３……164
第128図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図４……165
第129図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図５……166
第130図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図６……168
第131図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図７……169
第132図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図８……170
第133図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図９……171
第134図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図１０……172
第135図　古志本郷遺跡ＳＤ１７出土遺物実測図１１……173
第136図　古志本郷遺跡ＳＤ１８土層図……175
第137図　古志本郷遺跡ＳＤ１８遺物出土状況図１……176
第138図　古志本郷遺跡ＳＤ１８遺物出土状況図２……177
第139図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図１……178
第140図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図２……179
第141図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図３……180
第142図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図４……182
第143図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図５……183
第144図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図６……184
第145図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図７……185
第146図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図８……186
第147図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図９……188
第148図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図１０……189
第149図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図１１……190

第150図　古志本郷遺跡ＳＤ１８出土遺物実測図１２……192
第151図　古志本郷遺跡ＳＤ１９遺物出土状況・出土遺物実測図１……193
第152図　古志本郷遺跡ＳＤ１９出土遺物実測図２……194
第153図　古志本郷遺跡ＳＤ２０～３９土層図・出土遺物実測図１……197
第154図　古志本郷遺跡ＳＤ２０～３９出土遺物実測図２……198
第155図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図１……202
第156図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図２……203
第157図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図３……204
第158図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図４……206
第159図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図５……207
第160図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図６……208
第161図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図７……209
第162図　古志本郷遺跡Ｃ区調査区出土遺物実測図８……210
第163図　古志本郷遺跡Ｄ区遺構図……212
第164図　古志本郷遺跡Ｄ区土層図……213
第165図　古志本郷遺跡ＳＩ０１実測図……214
第166図　古志本郷遺跡ＳＩ０１出土遺物実測図……215
第167図　古志本郷遺跡ＳＩ０２実測図……216
第168図　古志本郷遺跡ＳＩ０２遺物出土状況図……217
第169図　古志本郷遺跡ＳＩ０２出土遺物実測図……218
第170図　古志本郷遺跡ＳＢ２１実測図……219
第171図　古志本郷遺跡ＳＸ０４実測図……220
第172図　古志本郷遺跡ＳＸ０４出土遺物実測図……221
第173図　古志本郷遺跡ＳＥ０９実測図・出土遺物実測図……222
第174図　古志本郷遺跡ＳＥ１０実測図１……223
第175図　古志本郷遺跡ＳＥ１０実測図２……224
第176図　古志本郷遺跡ＳＥ１０実測図３・出土遺物実測図１……225
第177図　古志本郷遺跡ＳＥ１０出土遺物実測図２……226
第178図　古志本郷遺跡ＳＥ１０出土遺物実測図３……227
第179図　古志本郷遺跡ＳＥ１１実測図・出土遺物実測図……228
第180図　古志本郷遺跡ＳＥ１２実測図……229
第181図　古志本郷遺跡ＳＫ３６実測図……230
第182図　古志本郷遺跡ＳＫ３６出土遺物実測図１……232
第183図　古志本郷遺跡ＳＫ３６出土遺物実測図２……233
第184図　古志本郷遺跡ＳＫ３７～５５実測図１……234
第185図　古志本郷遺跡ＳＫ３７～５５実測図２……237
第186図　古志本郷遺跡ＳＫ３７～５５実測図３……238
第187図　古志本郷遺跡ＳＫ３７～５５出土遺物実測図１……240

第188図　古志本郷遺跡ＳＫ３７～５５出土遺物実測図２……241
第189図　古志本郷遺跡ＳＫ５６・５７実測図・出土遺物実測図……242
第190図　古志本郷遺跡ＳＤ４０・４１土層図・出土遺物実測図……243
第191図　古志本郷遺跡Ｄ区調査区出土遺物実測図１……244
第192図　古志本郷遺跡Ｄ区調査区出土遺物実測図２……245
第193図　古志本郷遺跡Ｄ区調査区出土遺物実測図３……246
第194図　古志本郷遺跡Ｄ区調査区出土遺物実測図４……247
第195図　古志本郷遺跡Ｄ区調査区出土遺物実測図５……248
第196図　古志本郷遺跡Ｅ区遺構図……251・252
第197図　古志本郷遺跡Ｅ区土層図……253
第198図　古志本郷遺跡ＳＩ０３実測図・出土遺物実測図……254
第199図　古志本郷遺跡ＳＩ０４・ＳＫ６２実測図……255
第200図　古志本郷遺跡ＳＩ０４遺物出土状況図……256
第201図　古志本郷遺跡ＳＩ０４出土遺物実測図……257
第202図　古志本郷遺跡ＳＩ０５実測図・出土遺物実測図……258
第203図　古志本郷遺跡ＳＩ０６実測図……260
第204図　古志本郷遺跡ＳＩ０６遺物出土状況図……261
第205図　古志本郷遺跡ＳＩ０６出土遺物実測図１……262
第206図　古志本郷遺跡ＳＩ０６出土遺物実測図２……263
第207図　古志本郷遺跡ＳＩ０７実測図……254
第208図　古志本郷遺跡ＳＩ０７遺物出土状況図……265
第209図　古志本郷遺跡出土遺物ＳＩ０７出土物実測図……266
第210図　古志本郷遺跡ＳＢ２２実測図……267
第211図　古志本郷遺跡ＳＢ２３実測図・出土遺物実測図……268
第212図　古志本郷遺跡ＳＢ２４・２５実測図１……270
第213図　古志本郷遺跡ＳＢ２４・２５実測図２……271
第214図　古志本郷遺跡ＳＢ２４・２５出土遺物実測図……272
第215図　古志本郷遺跡ＳＢ２６・２７実測図……273
第216図　古志本郷遺跡ＳＡ０４実測図・出土遺物実測図……274
第217図　古志本郷遺跡ＳＥ１３実測図……275
第218図　古志本郷遺跡ＳＫ５８実測図……276
第219図　古志本郷遺跡ＳＫ５９実測図・出土遺物実測図……277
第220図　古志本郷遺跡ＳＫ６０実測図・出土遺物実測図１……278
第221図　古志本郷遺跡ＳＫ６０出土遺物実測図２……279
第222図　古志本郷遺跡ＳＫ６１・６２実測図・出土遺物実測図……280
第223図　古志本郷遺跡ＳＫ６３～７９実測図１……282
第224図　古志本郷遺跡ＳＫ６３～７９実測図２……283
第225図　古志本郷遺跡ＳＫ６３～７９実測図３・出土遺物実測図１……284

第226図　古志本郷遺跡ＳＫ６３～７９出土遺物実測図２・Ｚ地点出土遺物実測図…286
第227図　古志本郷遺跡ＳＤ４２～４４土層図・出土遺物実測図……287
第228図　古志本郷遺跡Ｅ区調査区出土遺物実測図……288
第229図　古志本郷遺跡Ｅ区調査区出土遺物実測図……289
第230図　古志本郷遺跡Ｅ区調査区出土遺物実測図……290
第231図　古志本郷遺跡Ｅ区調査区出土遺物実測図……291
第232図　古志本郷遺跡　弥生中期後半～後期前半遺構配置図……297
第233図　古志本郷遺跡　Ｄ・Ｅ区周辺遺構配置図……298
第234図　古志本郷遺跡　弥生時代終末～古墳時代前期遺構配置図……300
第235図　古志本郷遺跡　複合口縁甕の計測部位……303
第236図　古志本郷遺跡　脚部有段高坏実測図……305
第237図　古志本郷遺跡　古墳時代後期遺構配置図……306
第238図　古志本郷遺跡　奈良・平安時代遺構配置図……307
第239図　古志本郷遺跡　中・近世遺構配置図……309
第240図　古志本郷遺跡　土師質土器坏・皿形態分類表……310
第241図　古志本郷遺跡　土師質土器編年表……312
第242図　中世の出雲平野……316

表 目 次

表1　周辺の遺跡……9
表2　土錘孔径・縦横比表……210
表3　竪穴建物床面高度表……299
表4　出雲平野における弥生～古墳時代前期の大溝……302
表5　ＳＤ１６出土甕複合口縁部幅分布表……304
表6　ＳＤ１６出土甕Ｂ／Ｃ値表……304
表7　ＳＤ１７出土甕複合口縁部幅分布表……304
表8　ＳＤ１７出土甕Ｂ／Ｃ値表……304
表9　土師質土器（坏）法量分布表……313
表10　土師質土器（皿）法量分布表……313
表11　土師質土器の供伴関係……314

I 調査に至る経緯

Ⅰ　調査に至る経緯

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量をあわせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川の流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省が同51年に確定したものである。ルートの最終決定は同54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年３月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめ報告した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩冶町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年３月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課及び島根県教育長文化課の三者で協議が進められ、平成３年１月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成３年４月より発掘調査事業がスタートした。

Ⅱ 古志本郷遺跡の位置と環境

Ⅱ　古志本郷遺跡の位置と環境

古志本郷遺跡は、ＪＲ出雲市駅から南西に２kmほど離れた神戸川左岸の自然堤防上およびその後背湿地帯の標高８～10mの地点に分布する複合集落遺跡である。

神戸川は中国山地に源を発し、丘陵地帯を貫流しながら出雲平野南西部に達する。川が開けた土地に出てから1.5km下ったところに当遺跡があり、さらに10kmほど流れて日本海に注いでいる。出雲平野はこの神戸川と、平野東縁の宍道湖に流入する斐伊川の堆積作用で形成されたものであるが、約7000年前の完新世前期頃におこる縄文海進と、その後の海退で基本的な形ができあがっている。また、出雲平野の景観が現在のようなものになったのは、それまで西流中心であった斐伊川がその流路を東流固定化して宍道湖へ注ぐようになってからであり、斐伊川の平野部左岸に連続堤が構築されはじめた1641年以降の事になる。当遺跡をはじめとして出雲平野の集落遺跡が形成されたのは、弥生時代中期頃が最も盛んであるが、平野北縁の北山山地および南縁の丘陵地帯の山麓には縄文時代から発達した遺跡も存在し、古くから生活を営んでいたことを伺わせる。以下では、出雲平野とその周辺の遺跡を時代をおって概観したい。

縄文時代

前期の遺跡として、繊維土器が発見された西北部の菱根遺跡がある。また西側の海岸線には早期末～前期の石器や土器が出土した上長浜貝塚が存在する。中期の遺跡は見あたらず、気候や地形の変化に伴う移住が考えられる。後期・晩期になると、北縁には九州や山陽と共通する土器の出土する大社境内遺跡、南縁には土偶、丸木舟や堅果の貯蔵穴が出土した三田谷Ⅰ遺跡、さらに平野中央部に矢野遺跡がでてくるなど、平野への居住もみられるようになった。

弥生時代

縄文時代晩期に始まった海退がすすみ、また、神戸川や斐伊川によって出雲平野が陸化した時代である。前期の遺跡は縄文時代晩期から続く遺跡が多く、矢野遺跡や、石剣・配石墓などを検出した原山遺跡などが有名である。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』神門郡の条には現・神西湖のもととされる神戸水海の記載として「郡家の真西４里50歩なり。めぐり35里74歩あり」とあるので、弥生中期頃には再び海水準の上昇があったことと考えられる。神戸川の河口に近い自然堤防上に、古志本郷遺跡・天神遺跡・四絡遺跡群など、環濠と思われる大溝を持つ大規模集落が形成されたほか、３本の木橋を検出した渡橋遺跡、琴板や各種容器などの木製品が出土した姫原西遺跡などが登場している。この時代、他地域との盛んな交流が図られたのか、白枝荒神遺跡・下古志遺跡・矢野遺跡などでは吉備系の土器が出土している。また、この頃の大社町命主神社や斐川町神庭荒神谷遺跡などの丘陵部の遺跡からは、青銅器も発見されている。後期には山持川川岸遺跡、石土手遺跡・斐伊川鉄橋遺跡など遺跡も増加し、平野部の開発がかなり進んでいることを示している。これらの状況のもとに、首長による地域統合を推測させる四隅突出型墳丘墓を中心とした西谷墳墓群が登場する。また三田谷Ⅰ遺跡では後期中頃のものと思われる方形周溝墓が県内唯一の事例として報告されている。

古墳時代

前期古墳としては、全長52mの前方後円墳である大寺古墳や、円墳で筒型銅器や鏡を持つ山地古墳が存在するだけで、最古級の古墳はまだ見つかっていない。この点では同時期に大規模な方墳を多数築造している出雲地方東部の荒島古墳群とは大きく様相を異にする。中期も全長65mの北光寺古墳の他に、北山や仏教山周辺に小古墳がみられるだけである。後期になると北山南麓に上島古墳が築造された後は大型古墳は神戸川流域の丘陵地帯に限られるようになる。神戸川右岸には全長92mの前方後円墳で、巨大な石棺を有する今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳、地蔵山古墳が造営される。これらの古墳は7世紀前後に真えをみせ、横穴墓が台頭するようになる。上塩冶横穴墓群は凝灰岩に掘られたものが多く、精美で、石棺を内蔵するものや装飾大刀・金糸を副葬する事から、かなりの身分の人物が葬られていたと考えられる。神戸川左岸にも右岸に比べて小規模ではあるが、妙蓮寺山古墳・宝塚古墳・放れ山古墳・大梶古墳などがあり、地蔵堂横穴墓群・井上横穴墓群・神戸横穴墓群などの大規模な横穴墓群が形成されていて、右岸と同じ様相を呈する。

奈良・平安時代

『出雲国風土記』の中に、「古志郷、すなはち郡家につけり。イザナミ命の時、日淵河を以て、池をつくりたまひき。その時、古志の國人等、来りて堤をつくりて、やがてやどれりしところなり。故、古志と云ふ」という一文がある。神戸郡家が古志郷内に存在したことと、越の国から人が移住してきたために古志という地名ができたという伝承が記載されている。当時の官衙跡と思われるものとしては、和銅開珎・「高岸神門」などの木簡・緑釉陶器・墨書土器などが出土した三田谷Ⅰ遺跡、緑釉陶器・墨書土器・大型の掘立柱建物跡が検出された天神遺跡、緑釉陶器・大型の掘立柱建物跡が検出された古志本郷遺跡がある。当古志本郷遺跡の平成10年度の調査では、総柱建物を含む掘立柱建物15棟以上、建物群を区画する溝とそれに平行する柵列が検出されている。出土遺物は7～8世紀のものが中心で、墨書土器や刻書土器、円面硯などの文字に関するものや、官人としての身分を表す腰帯金具などが含まれている。建物はいずれも大型で柱穴も大きく、柱間が完数尺で設計され規格性を持つなど、全体として官衙的色彩が強い。このうち2棟は柱間隔が約3mと非常に大型で、2棟の建物は位置とその規模から郡庁の一部である可能性が強い。『出雲国風土記』に記載された神戸郡家との関連など詳しい内容は今後の調査結果を待つしかないが、古代出雲の歴史解明においては重要な発見であると考えられる。集落遺跡としては大寺三蔵遺跡、上長浜貝塚があげられる。古墓としては平野の南側丘陵に石製骨臓器を備える青沢古墓や朝山古墓、小坂古墳の石室内におかれた石櫃、須恵器の骨臓器を使用した西谷墓、一辺75cmの立方体の石櫃が納められた光明寺3号墓などがあり、火葬の風

第1図　調査対象位置図

第2図　周辺の遺跡

習が伝わっていたことを示している

中世

出雲一宮の出雲大社とその別当寺である鰐淵寺の存在や、出雲守護職の佐々木氏が出雲地方東部から出雲平野中央部の塩冶郷に守護所を移すなど、鎌倉時代後半の一時期、出雲の中心となる。この時代の遺跡としてはミニチュア五輪塔が出土した渡橋沖遺跡や、国人領主・朝山氏の館跡と推定される蔵小路西遺跡があげられる。蔵小路西遺跡は幅約４ｍの堀や掘立柱建物跡、12～15世紀の遺物が検出されている。大社町鹿蔵山遺跡も備前焼等の多量の出土物があるため有力者の館跡と考えられる。この他には青磁等を副葬する荻杼古墓がある。戦国時代には尼子氏と毛利氏の争いなどもあり、「尼子十旗」とされる米原氏の高瀬山城跡、神西氏の神西城跡や要害山城跡をはじめ、有力な国衆である「出雲州衆」でありながら尼子氏家臣団である「富田衆」のような位置づけをされた古志氏の浄土寺山城跡や栗栖城跡、十倉城跡の他にも鳶ヶ巣城跡や半分城跡など数多くの山城が平野を見下ろす丘陵に点在している。

近世

安土桃山時代の頃から城塞の取り壊しが活発になり、戦国時代色は一掃されてくる。江戸時代になると、防衛線に使われていた荒れ地や池は生産向上のために開発されるようになってきた。この

時代で特記すべきは大梶七兵衛の活躍である。延宝年間の大社町の荒木浜開拓を手始めとして、斐伊川と神戸川に挟まれた出雲市塩冶町周辺の水運と感慨を充実させた高瀬川の普請、神西湾周辺の開拓を進めた遥海川の普請、出雲市古志・知井宮・神西地区の灌漑のため神戸川左岸で行われた十間川の普請など数々の大事業をやり遂げている。十間川の普請では同時に、風土記にも記載されている宇賀池をはじめ、よしかさこ池、麻柄池など多くの池を埋め立てあるいは縮小し、「郡合八千石之養ひ也」と記載されるほどの新田開発に成功した。当時の俗謡に「娘やるまい古志、知井宮へ、栗やくまごのからはたき」と歌われていたが、十間川開発後「娘やりたや古志、知井宮へ、畑は田にしてこめどころ」と歌われるようになったといわれ、その変貌の大きさを物語っている。農産物の大量生産と特産物栽培の奨励は地場産業の発展を促し、古志の町なかを通っていた風土記の時代から続く山陰道沿いには糀・酒・醤油・油等の製造業者や小売業者が軒を連ねるようになった。七兵衛はその死後、本遺跡内の正法寺に埋葬された。正法寺は僧伝心によって貞治5年に創建されたと伝えられ、大正10年に近くの延命寺と合併して延命寺境内に移転している。

表1　周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	古志本郷遺跡	24	大念寺古墳	47	神門横穴墓群
2	狐廻谷遺跡	25	角田遺跡	48	深田谷横穴墓群
3	上塩冶横穴墓群第7支群	26	塚山古墳	49	地蔵堂横穴墓群
4	大井谷城跡	27	太歳遺跡	50	地蔵堂北横穴墓群
5	上塩冶横穴墓群第22支群	28	荻抒古墓	51	浄土山城跡
6	上塩冶横穴墓群第33支群	29	山持川川岸遺跡	52	放れ山遺跡
7	上沢Ⅱ遺跡	30	里方別所遺跡	53	大梶遺跡
8	光明寺古墳群	31	大前山古墳	54	小坂古墳
9	光明寺3号墓	32	石臼古墳	55	古志遺跡
10	大坊古墳	33	里方八石原遺跡	56	田畑遺跡
11	三山谷1遺跡	34	矢野遺跡	57	正連寺周辺遺跡
12	半分古墳	35	大塚遺跡	58	宝塚古墳
13	地蔵山古墳	36	姫原西遺跡	59	妙連寺山古墳
14	上塩冶築山古墳	37	小山遺跡	60	天神原古墳
15	宥松遺跡	38	白枝荒神遺跡	61	知井宮多門院遺跡
16	下沢遺跡	39	菱根遺跡	62	東原遺跡
17	菅沢古墓	40	修理免本郷遺跡	63	極楽寺付近遺跡
18	権現山横穴墓群	41	鹿蔵山遺跡	64	小原遺跡
19	長廻横穴墓群	42	原山遺跡	65	天神遺跡
20	来原岩桶	43	南原貝塚	66	高西遺跡
21	西谷墳墓群	44	中分貝塚	67	神門寺付近遺跡
22	斐伊川鉄橋遺跡	45	上長浜貝塚	68	橋渡神遺跡
23	石上手遺跡	46	山地古墳	69	神来山古墳群

注（1）…「正蓮寺周辺遺跡」は平成9年度より「下古志遺跡」に改称された。

参考文献

出雲市古志町誌編纂委員会『古志町誌』1990
出雲考古学研究所『天神遺跡の諸問題』1979
出雲考古学研究会『出雲平野の集落遺跡Ⅰ』1983
出雲考古学研究会『荒島墳墓群』1985
出雲考古学研究会『出雲平野の集落遺跡Ⅱ』1986
出雲市教育委員会『出雲市天神遺跡』1972
出雲市教育委員会『塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ』1987
出雲市教育委員会『古志地区遺跡分布調査報告書』1988
出雲市教育委員会『神門地区遺跡群細分布調査報告書』1989
出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書3』1992
出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書4』1994
出雲市教育委員会『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』1994
出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書5』1995
出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書6』1996
出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書7』1997
田中義昭『中海・宍道湖岸西部地区における農耕社会の展開』『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会1996
出雲市教育委員会『白枝荒神遺跡』1997
出雲市教育委員会『天神遺跡第7次発掘調査報告書』1997
出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲』1997
出雲市教育委員会『古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』1998
出雲市教育委員会『小山遺跡第2地点発掘調査報告書』1998
島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980
島根県教育委員会『出雲神庭荒神谷遺跡』1996
島根県教育委員会『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷遺跡・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群』1998
島根県教育委員会『歴史の路調査報告書　山陰道Ⅱ』1996
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅰ』1993
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅱ』1994
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅲ』1995
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅳ』1996
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ』1997
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ』1998
島根大学山陰地域総合研究センター『中海・宍道湖　地形・底質・自然史アトラス』1988
建設省出雲工事事務所『斐伊川誌』1995
田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代の集落分布について」『山陰地域研究4』1988
西尾克己・大国晴雄『出雲平野の古墳』1991

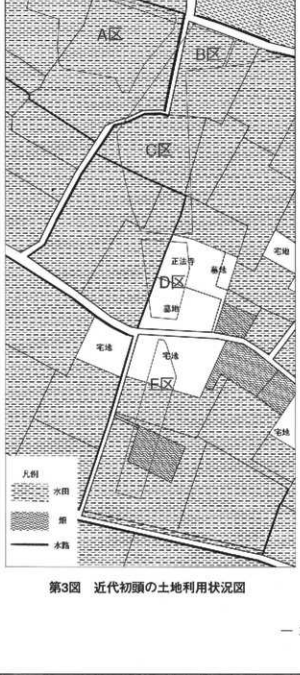
Ⅲ 調査の結果

第1章　調査の経過と概要

第1節　調査前の状況

古志本郷遺跡は神戸川左岸の出雲市古志町・下古志町に所在する。当遺跡は、神戸川左岸の標高８～９ｍ（現地表）を測る微高地上に位置している。神戸川寄りの遺跡の東側が標高８ｍ前後と低く、西にいくに従い次第に高くなり古志公民館と古志幼稚園の間を通る道付近がもっとも標高が高く（９ｍ前後）、古志公民館の西側（下古志遺跡）では標高８.５～９ｍとまた低くなっている。

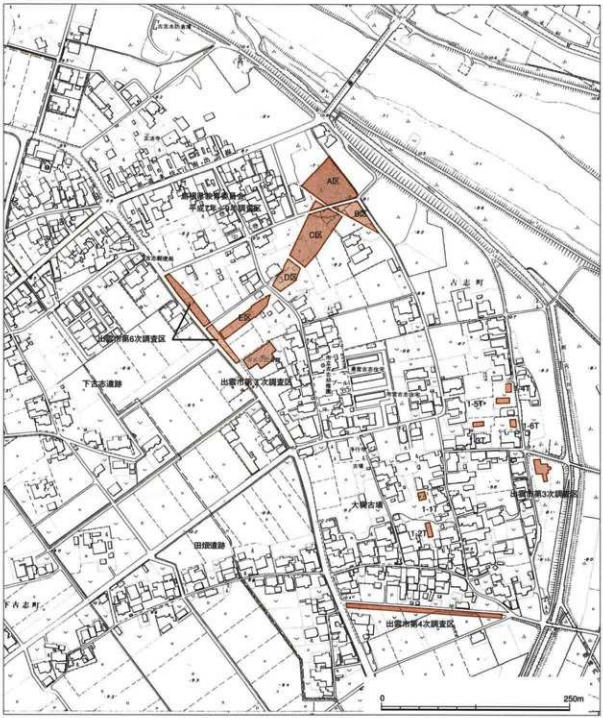
本報告書で扱う平成７～９年度の調査区は、調査前には、Ａ区はゲートボール場と水田・畑、Ｂ区は宅地と水田、Ｃ区は水田、Ｄ区は宅地、Ｅ区は水田と一部宅地に利用されていた。遺跡の遺存状態は、全体としては良好であったが、宅地部分については基礎によって撹乱を受けている部分も見受けられた。なお、これらの地区は「出雲国神門郡上古志村絵図」（広島大学図書館蔵）によれば、Ｄ区に正法寺（大正１０年に移転）が存在し、他の大部分は水田であったことが知られる（図５）。また、近世山除道はＡ区前面で神門川を渡河、北折し現県道多伎江南線を通っていたことが知られてる。



第3図　近代初頭の土地利用状況図

第2節　調査前の状況

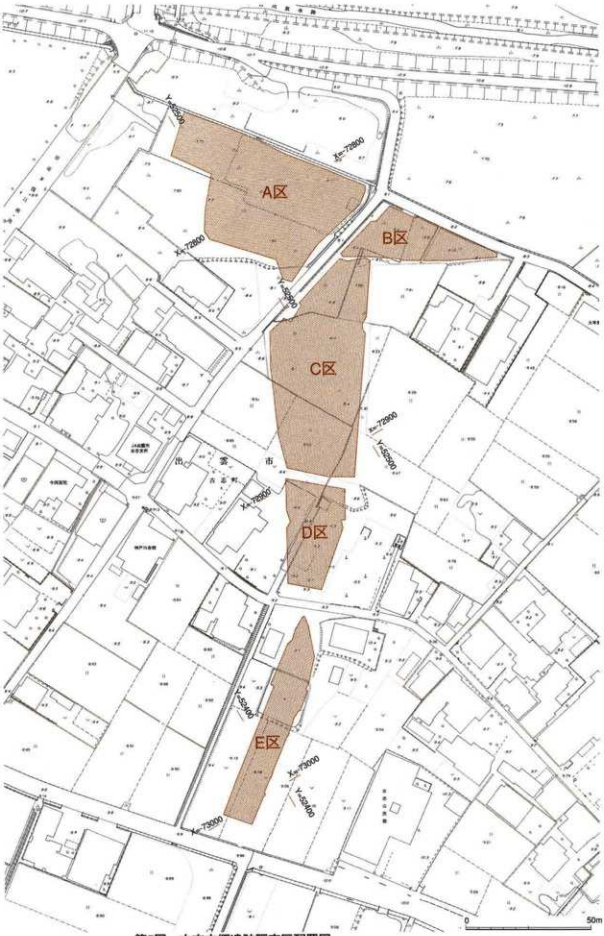
当遺跡は、周知の遺跡であり、平成６年度までに出雲市教育委員会によって５回にわたる調査が行われている（図６）。第１次調査は昭和６２（１９８７）年度に実施された。遺跡の範囲確認のため、合計６カ所でトレンチ調査が行われ、弥生時代中期中葉から後期後葉の遺物が出土した。なかでも第３トレンチでは竪穴住居跡と大量の弥生時代後期の土器が検出されている。第２次調査は古志公民館の建設に伴って平成元（１９９０）年に行われた。本報告書のＥ区のすぐ南側にあたり弥生時代中期後葉の竪穴住居跡３棟が発見され、うちＳＩ０２では玉生産の可能性が指摘されている。第３次調査（平成７年）、第４次調査　（同）は遺跡の東南新宮川側より部分、現古志集落の南端で行われているが、いずれも若干の遺物が検出されたのみである。第６次調査は平成８（１９９６年）年に、市道本郷新宮線改良に伴って行われたもので、本報告書Ｅ区の西側に接して行われたここでは、弥生時代中期後葉から後期後葉までの



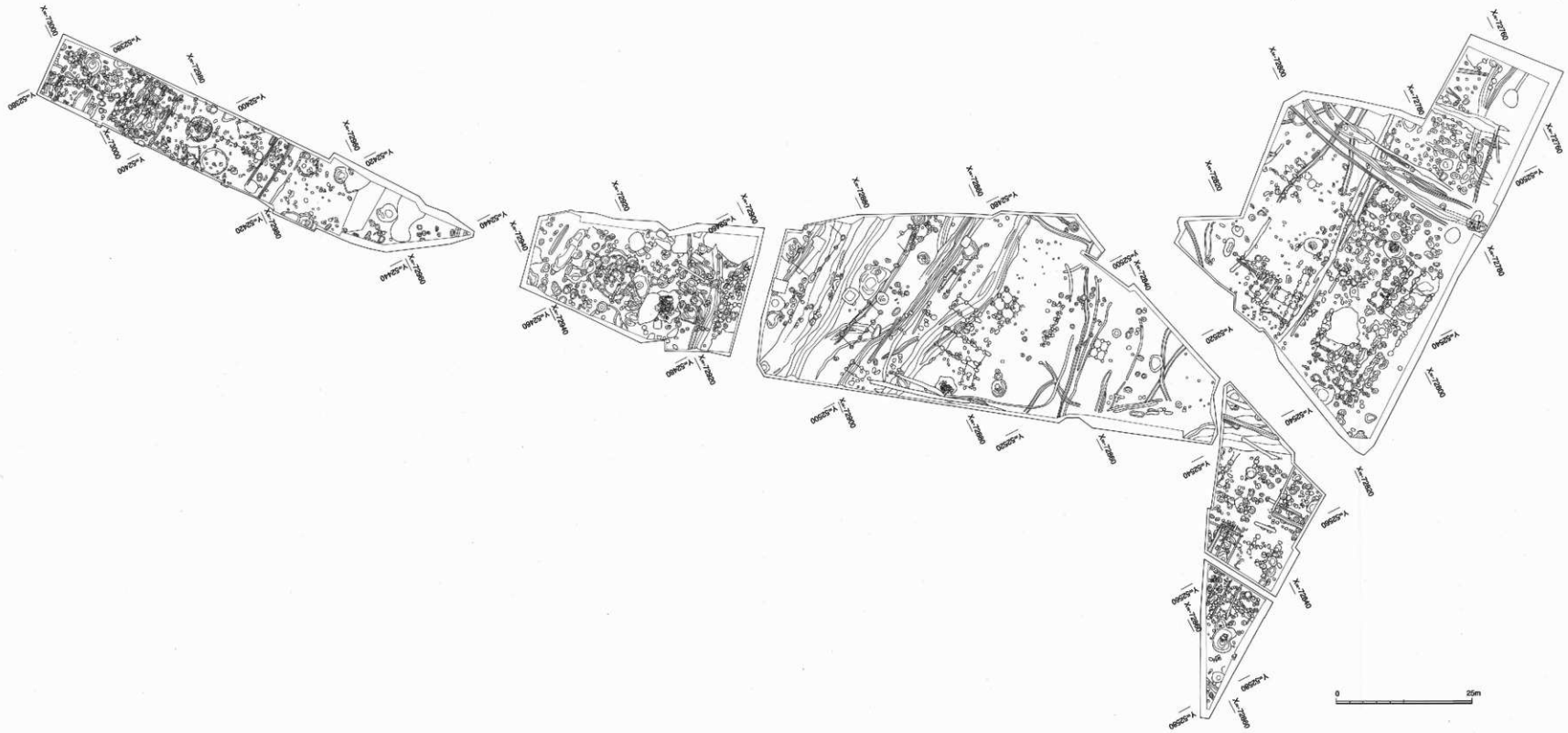
第4図　古志本郷遺跡の発掘調査区域位置図

遺物を含む、幅４ｍ、深さ１.３ｍの大溝が検できされている。

斐伊川放水路事業に伴う島根県教育委員会による調査は、平成６（１９９４）年１２月より開始された。本報告書Ａ・Ｂ区でトレンチ調査が実施され、遺構・遺物が検出された。引き続き、平成７（１９９５）年５月２５日より重機によるＡ区の表土掘削を開始し、６月６日からＡ区北部分（旧Ａ区）の調査を開始した。同年６月の終わりにはＡ区南部分（旧Ｂ区）の調査を開始し、９月にはＡ区西南部分（旧Ｃ区）の調査を開始した。Ａ区の上記の部分については平成８年１月１７日に調査を終了した。Ａ区北西部分（旧Ｄ区）１０月下旬に表土掘削を行ったが、遺構の精査は平成８



第5図　古志本郷遺跡調査区配置図



第6図　古志本郷遺跡遺構図　(S=1／500)

年度に持ち越しとなった。一方、B区（旧E区）については係内から応援を得て１０月中旬に表土剥ぎを行い、同下旬に調査を開始、A区同様平成８年１月１７日に調査を終了した。平成７年度の調査対象となったA・B区では、中世後期～近世の建物跡１０棟、井戸跡４基、近世を中心とする多数のピット・土壙が検出された。B区では中世末に埋没したと考えられる大溝ＳＤ１５も検出された。

平成８年度は４月２４日よりA区の北西部分（旧D区）から調査を開始し、ついでA区西側突出部（旧G区）の調査を経て、７月上旬にC区の東側部分（旧F・H区）調査を開始した。その後、C区の西側３分の１の所を東南－北西に横切る水路の移転を経て１０月中旬にC区の西側３分の１（旧J区、I区は誤記の可能性があるため未設定）の調査を開始し、１２月２５日に調査を終了した。ただし、一部未買収地と多数の遺物が出土すると考えられたＳＤ１８については平成９年度に調査することとなった。この間、C区において掘立柱建物や古墳時代初頭の土器を多数含む溝を検出したため、１１月１６日に、現地説明会を実施、天候にも恵まれ約１２０名ほどの見学者が訪れた。平成８年度の調査では、C区の上層で近世のものと思われる溝・杭列や石敷遺構、下層から古代～中世にかけての掘立柱建物跡８棟、古墳時代初めの土器を含む大溝２条（ＳＤ１６・１７）、井戸跡４基、溝、土壙、ピット等多数を検出した。

平成９年度の調査は平成９（１９９７）年４月１６日にE区（旧L・M区）から開始した。D区（旧K区）は北３分の１を西－東に横切る水路の移転のためE区調査終了後に調査に着手することとなった。E区は表土が浅いため初めから遺構調査となり、７月からはD区の調査を開始した。１０月にはC区の残り部分を調査し、１２月２５日にすべての調査を終了した。E区では、弥生時代の竪穴建物跡が検出され、D区の様相が明確になった８月２４日に現地説明会を実施した。前年同様、天候もよく多くの見学者の来訪を得た。なお、７月上旬・１１月上旬には平成１０年度調査予定地のトレンチ調査のため計３週間ほど本調査を中断した。平成９年度の調査では、D区で弥生時代後期初頭の竪穴建物跡２棟、同時期の断面Ｖ字の溝（ＳＤ４２）、中世末～近世にかけての土壙多数、井戸３基、時期不明の掘立柱建物跡１棟、ピット多数を検出した。E区では弥生時代中期末～後期初頭にかけての竪穴建物跡４棟、古墳時代前期の竪穴建物１棟、中世を主とする掘立柱建物跡６棟、ピット多数を検出した。C区の残り部分では古墳時代を通じて機能したと考えられる大溝ＳＤ１８、掘立柱建物跡２棟、土師質土器焼成関連遺構１基が検出された。

第2章　調査の結果

第1節　A区の調査

調査区の立地

調査区は神戸川の左岸、現流路から１００ｍほど離れた地点で、現地表の標高７.５～８ｍである。

基本層序（第８図）

A区の層序は上層から表土、青灰色土（第１土層図２・４）、Ⅰ暗青灰色土あるいは酸化した茶褐色土（第２土層図２・１０～１２）を基本とし、Ⅱその下層の一部に黒色土・黒褐色土（第１土層図９・１０、第２土層図１３～１５）がみられる。地山は調査区内の部分によってやや様相を異にし、東側で灰褐色砂、中央、及び西側では締まりのある褐色砂質土あるいは灰色粘質土であった。A区西側で標高７.０ｍ前後で安定するが東北部では５.８ｍ程度まで落ち込んでいる、この落ち込み部分の堆積土及びⅠからは多様な遺物が出土しているが、新しいものでは肥前系陶磁器が含まれる。この部分は下層の９・１０層を除くとかなり土層が混乱していること、上層、下層とも遺物に時期差が見られないことから近世に短期間に造成されたものと考えられる。花粉分析における花粉が検出されなかったという指摘も、これを支持するものである。一方、Ⅱからは古墳時代後期以前の遺物が出土している。上述の様に近世を遡るの堆積土にはほとんどなかったため、中世以前の遺構はすべて地山面で検出することとなった。また近世の埋土も分層は容易でなく、一部を除いて地山面で検出を行った。以下、掘立柱建物跡、柵列、石敷遺構、井戸、土壙、溝の順で概要を述べる。

A、掘立柱建物跡

ＳＢ０１（図９）

規模・構造　ＳＢ０１は梁間２間（４.０ｍ）×桁行７間（５.８～６.０ｍ）間の建物で、梁間に対して桁行柱間距離が極端に小さい（０.８５ｍ）ことが特徴である。また建物東北側には内側に桁方向に柱列があるが、南側の２本は検出できず、逆に建物内を東西に区画するような柱列（ＢＢ'）がみられる。一見すると二面庇のようにも思われるが、外側の柱の方が規模も大きく、内部を区画する施設が想定される側柱建物になろう。主軸はＮ－２５°－Ｗを指向する。

柱穴　掘方は長辺６０～８０cm、短辺４０～５０cmの隅丸方形をなし、南側棟持柱のみが掘方１３０cm×７０cmと規模も大きい。発見された柱根は直径１５～２０cmの程度で、掘方はやや大き過ぎる感があるがこれは古志本郷遺跡の掘立柱建物全体についていえることで、地山が砂地で崩れやすいことと関係しているのかもしれない。柱穴の底面レベルは必ずしも一定してはいない。桁行の柱は上部で埋土を共有して布掘り状になっておりすべてが一時期の柱穴と考えられる。埋土はＳＢ０２～０４、０６等と異なり精緻な褐色土であった。

年代・性格　遺物はＰ１から複合口縁の甕片が１点出土している。口縁部に若干内傾する明瞭な面を持つ。やや確証に乏しいが、柱穴埋土等も他の掘立柱建物と異なっていること、ＳＢ１７周辺に弥生時代終末の遺構が比較的まとまって存在すること等から、古墳時代前期（草田7期）の掘立柱建物として大過ないものと思われる。

第7図　古志本郷遺跡A図遺構図　(S=1／300)

ＳＢ０２（第１０図）

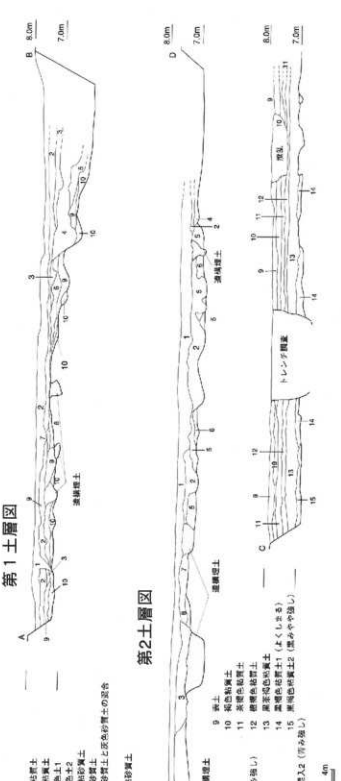
規模・構造　Ａ区中央東寄りに位置する。柱間５間、長さ１０.５ｍの東西柱列（ＡＡ'）を元に、それに平行する柱穴を検出した。北側梁間１間（２.５２～２.８ｍ）×桁行２間（４.５ｍ）と南側梁間１間（１.６ｍ）×桁行１間（３.９ｍ）の２棟を連結したような形となる。北棟東側柱列（ＤＤ'）の南には平行する柱列が認められるが、ＡＡ'と柱間が合わないことから別の建物ＳＢ０３の柱列と一応判断した。ただし、ＳＢ０２がＳＢ０３あるいはＳＢ０４と一体の建物である可能性も否定できない。主軸はＮ－２９°－Ｗ前後を指向する。

柱穴　大きいもので１５０cm×１００cm、小さいもので８０cm×６０cm、深さ３０～４０cmの規模を持つ。北棟東南柱穴のみ小さく、軸がずれておりＳＢ０２と無関係である可能性も否定できない。柱根は南棟東南柱穴より直径２０cm大のものが出土した。

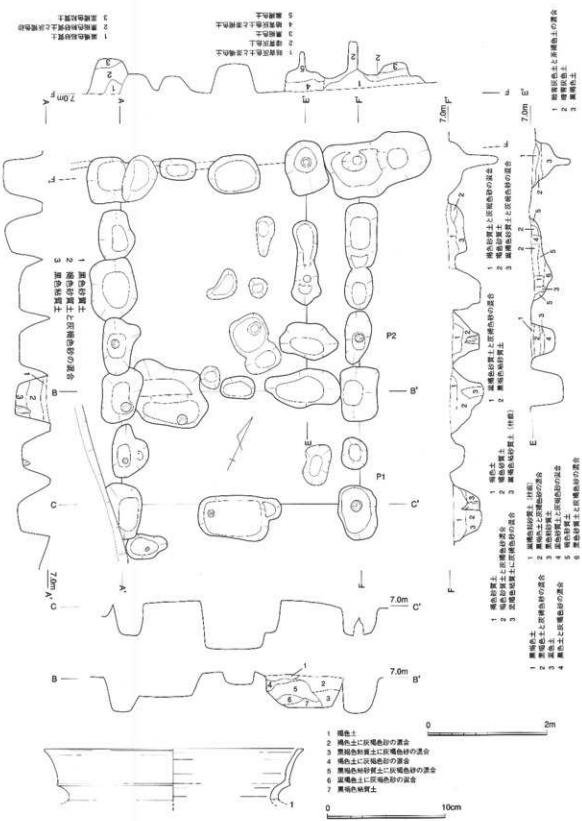
年代・性格　西側柱列がＳＢ０４を切っており、柱穴内より少量の土師質土器、肥前系陶器が出土する。近世のものと考えられる。

ＳＢ０３（第１１図）

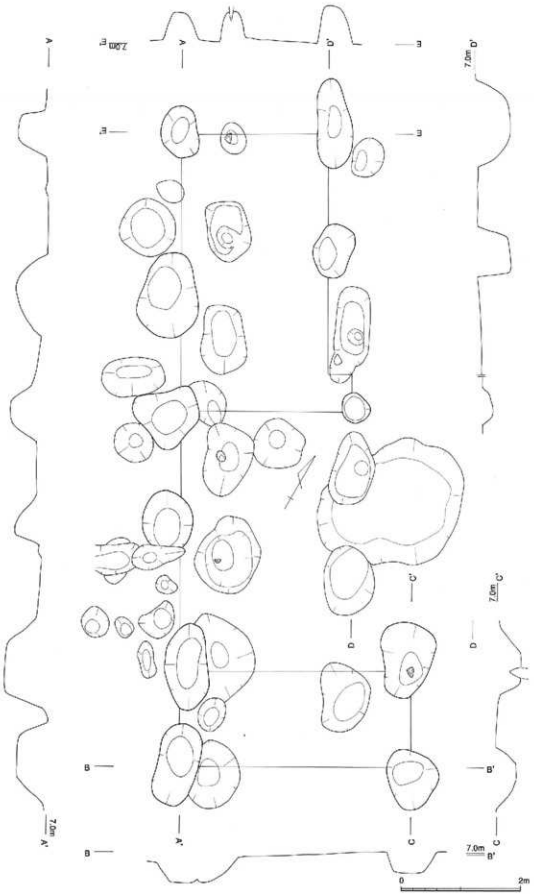
規模・構造　ＳＢ０２に東接し、前述のようにＳＢ０２と一体の建物である可能性も否定できない。梁間１間（３.５ｍ）×桁行４間（７.８ｍ）と東側柱列に連続する柱列２間分（４.０ｍ）を南に持つ。



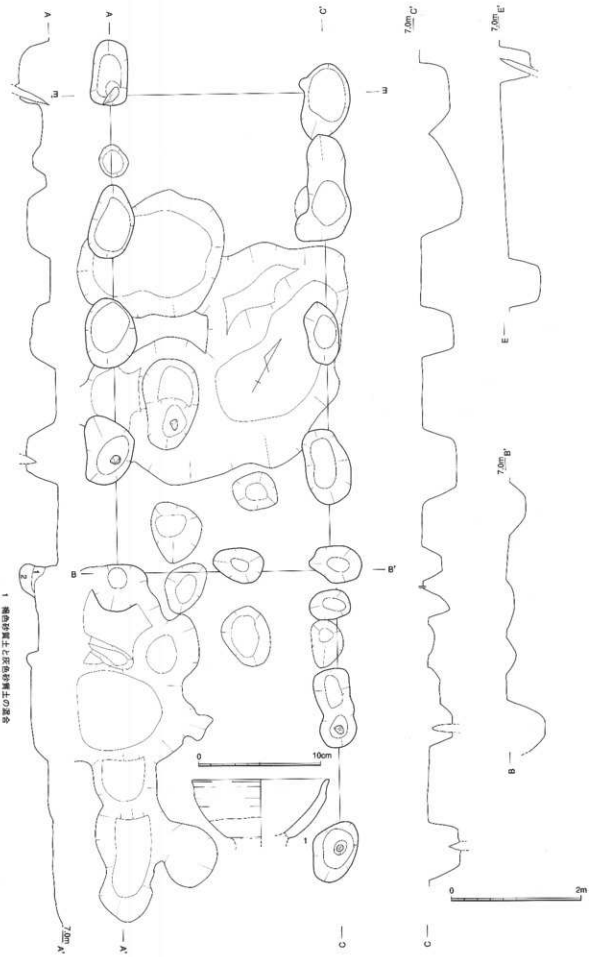
第8図　古志本郷遺跡A区調査区土層図　(S=1/120)



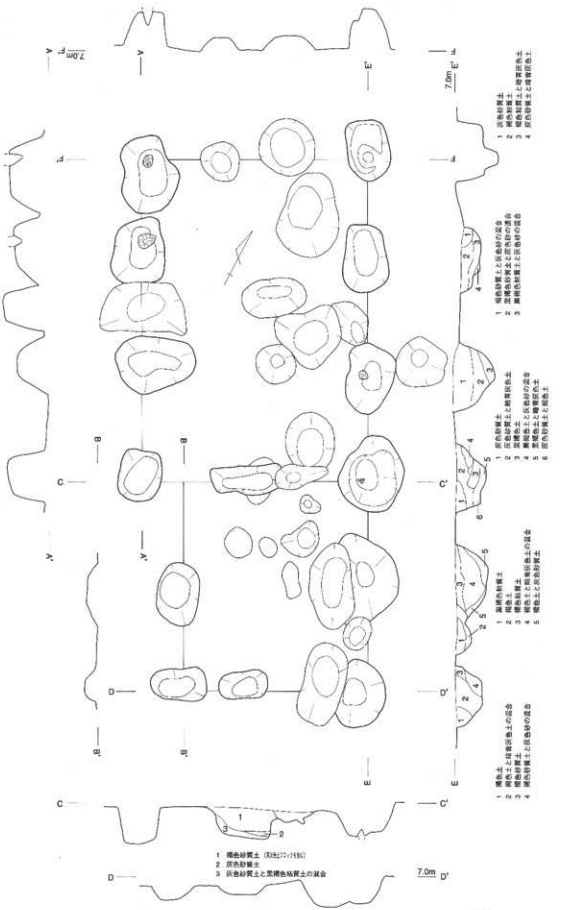
第9図　古志本郷遺跡SB01・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第10図　古志本郷遺跡SB02実測図　(S=1/60)



第11図　古志本郷遺跡SB03・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第12図　古志本郷遺跡SB04実測図　(S=1／60)

南側梁間には一見柱のようピットなもあるが、掘方が小さく、建物の構造を担ったとは考えられない。主軸はＳＢ０２と同じくＮ－２９°－Ｗを指向する。

柱穴　掘方は１００cm×７０cm、深さ５０～６０cm程度で、東南隅を除いて、隅柱の掘方が大きく梁間に柱を持たないことと対応するのかもしれない。柱根は北西隅と、西側柱列の南から２番目の柱穴、東側柱列に２本計４本検出されており、いずれも直径２０cm前後である。

年代・性格　西南隅柱列が１８世紀以降の遺物を持つＳＫ０２に切られている。遺物はＰ１から瀬戸・美濃系の天目茶碗（１）が出土している。１は口縁部はやや外反してくびれ、削り出し輪高台を持つ。釉薬は茶褐色で露胎に化粧がけはない。連房式登窯の天目茶碗と考えられる。以上からＳＢ０３には１７世紀代中葉の年代観が与えられる。

ＳＢ０４（第１２図）

規模・構造　ＳＢ０２の西に接し、一部柱穴を切られる。梁間１間あるいは２間×桁行５間（8.7m）で、梁間は北側３間分が3.7m、南側２間分が3.0mの幅を持つ。梁方向には棟持柱に相当するな柱穴があるが中央ＣＣ'を除いてはいずれも掘方が小さく浅い。ＳＢ０３同様建物の構造を支えることはなかったと思われる。ＳＢ０２・０３同様主軸をＮ－２９°－Ｗに指向しており、これら３棟（あるいはその一部）が一体の建物であった可能性もある。ただし、ＳＢ０２の西側柱列は明らかにこのＳＢ０４の東側柱列を切っていいる。主軸はＮ－２９°－Ｗを指向するが、ＳＢ０２よりやや東にふれている。

柱穴　掘方は１００cm×６０cm、深さ３０～６０cm前後で、底面も比較的揃う。４カ所に直径２０～２５cmの柱根が残っていた。掘方は概して北側３間分が大きく深く、特に隅柱はその傾向が顕著である。ＳＢ０３同様、これらの柱が構造を支えていた可能性がある。埋土は地山の灰褐色砂に一部黒褐色土、暗灰色土を含んでいる。

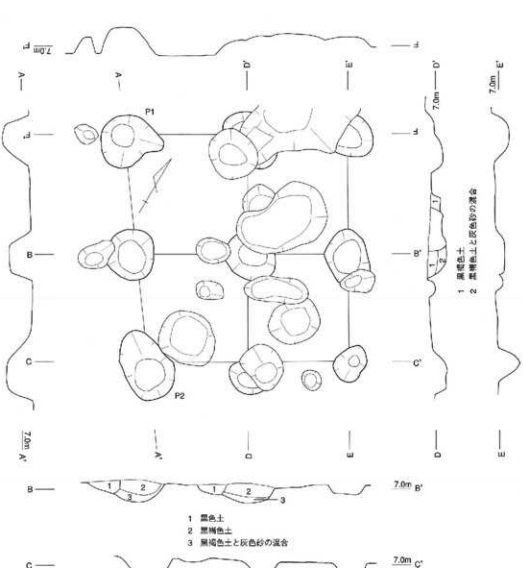
年代・性格　遺物は、土師質土器小片がＰ１から出土している。ＳＢ０４の時期は、ＳＢ０２に先行すること、ＳＢ０２・０３と主軸が同方位であること等から、これらの建物に先行し若干早い１６世紀末～１７世紀前葉と想定される。

ＳＢ０５（第１３図）

規模・構造　Ａ区東南に位置する。東西3.3～4.0m×南北3.5mの２間×２間の総柱建物である。正しい方形はなさず、北西の隅柱はやや外側に突出している。南北柱列を主軸とした場合Ｎ－３０°－Ｅを指向することとなる。

柱穴　多くが別のピットに切られており、全容をうかがい知れるものは少ない。大きさはばらつきが大きく直径５０～１００cmの円形、不正円形をなし、深さは３０cm前後である。埋土は精緻な黒色土でＡ区の他の建物跡とは異なっていた。

年代・性格　遺物はＰ１から１、Ｐ２から２が出土した。１は複合口縁の甕で口縁端部に面を持つ。２は小型の土師器の壺である。ＳＢ０５の時期は２から古墳時代中期と考えられる。同時期の遺構を周辺に見いだし得ないが、柱穴掘方の形状・埋土等が他の掘立柱建物とは異なっている点もこの年代を支持するものである。本建物は総柱であり、かつ中央の柱穴も大きいことから重量物を支える高床建物、倉庫としての性格を考えられる。



第13図　古志本郷遺跡SB05・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

ＳＢ０６（第１４図）

規模・構造　Ａ区南側中央に位置する。現状では梁間１間（２.１ｍ）×桁行３間（６.１ｍ）の主軸をＮ－５０°－Ｅとする東西棟と、梁間１間（０.９ｍ）×桁行３間（５.８ｍ）の主軸をＮ－４０°－Ｗとする東西棟が接する形になっている。しかし、北側は撹乱を受けていること、南北棟は梁が狭く、庇のような状況を呈していることからすると、撹乱を受けている部分を身舎とする、身舎３間×３間２面庇付き以上の大型掘立柱建物であった可能性が高い。なお、東西棟の東側について

第14図　古志本郷遺跡SB06・実測図　(S=1／60)

もなお１間分ほど伸びる可能性があるが、ＢＢ'の延長部分の柱間距離が短くなるのでいちおう３間の建物を想定した。

柱穴　おおむね１００cm×８０cm、深さ３０～６０cmの隅丸方形の掘方を持ち、柱根も１本確認された（直径１５cm）。埋土は地山褐色砂と黒灰色土からなり、一部には柱抜き取り痕も確認された。

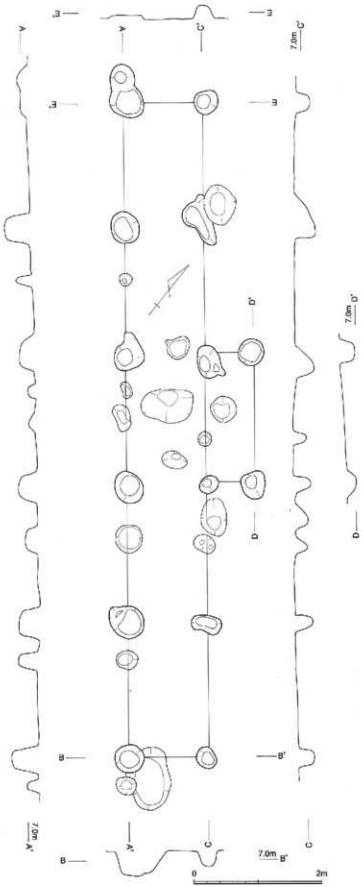
年代・性格　遺物は柱穴から若干の肥前系陶磁器が出土しており、ＳＢ０６の年代は近世とすることができる。本建物が北側の撹乱部分に広がっていたとすれば、本報告書で扱う中では最大規模の掘立柱建物となり、間取りも複雑なものが想定される。近世のある時期におけるＡ区の中心的建物となった可能性が高い。

ＳＢ０７（第１５図）

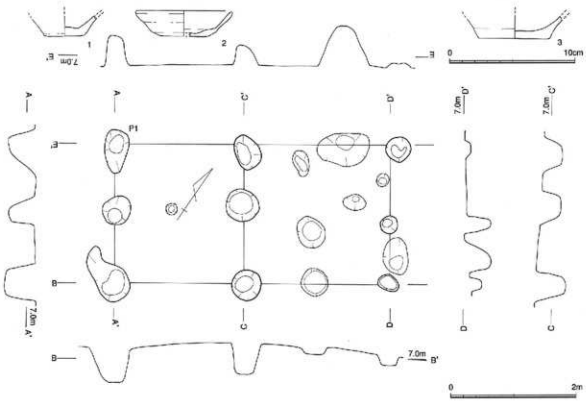
規模・構造　Ａ区南側中央に位置しＳＢ０８と重複する。梁間１間（１.３ｍ）×桁行５間（１０.２ｍ）の規模を持ち、中央東側に幅０.７ｍの張り出し部を持つ。主軸はＮ－４０°－ＷとＳＢ０６の南北棟と同方位である。

柱穴　ＳＢ０７の地山はＳＢ０６までと異なり褐色のシルト層となっており、そのためか掘方は円形で直径４０cm、深さ２５cm程度である。

時期・性格　柱穴から土師質土



第15図　古志本郷遺跡SB07実測図　(S=1/60)



第16図　古志本郷遺跡SB08・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

器を含む遺物が少量が出土している。このことからＳＢ０７の時期はから中世以降であると考えられる。また、ＳＢ０６南北棟と主軸を同じくすることＳＢ０６と同時期、すなわち近世まで降る可能性もある。本建物は梁間が短く桁行の長い長屋状の建物であり、人が居住するような施設ではなかったと思われる。

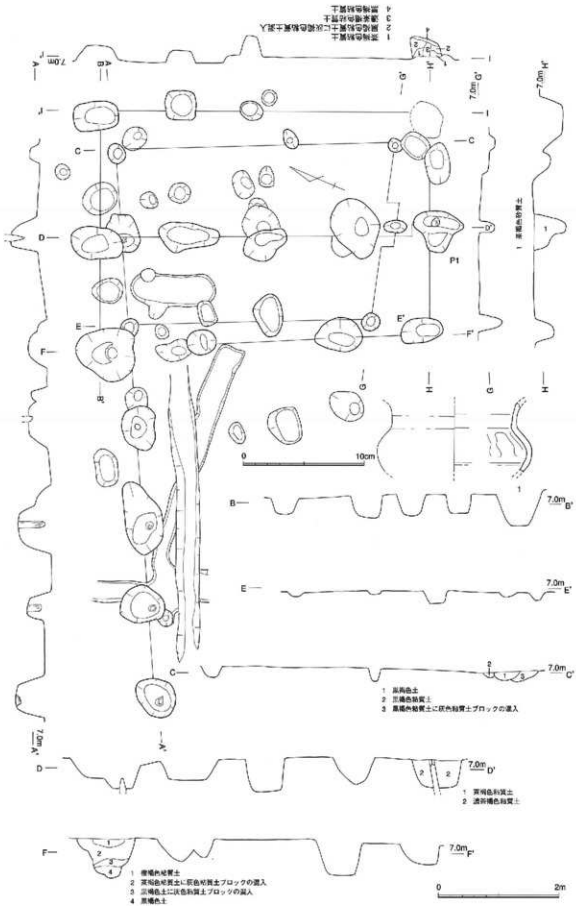
ＳＢ０８（第１６図）

規模・構造　Ａ区南側中央に位置し、ＳＢ０７と重複する。梁間１間（２.２ｍ）×桁行３間（４.４ｍ）の規模を持つ。東側１間分には梁方向中央にも柱穴が見られるが、これは建物と無関係である可能性もある。西側柱列には中央の柱はみられず、いずれにせよ梁間方向に中間の柱のない構造である。主軸はＮ－５５°－Ｗを指向する。

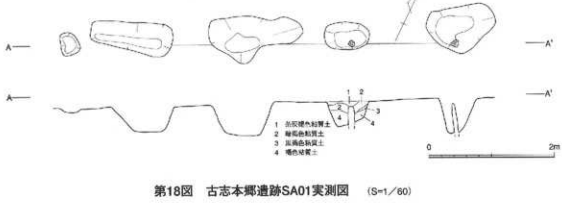
柱穴　ＳＢ０７同様の地山のため、柱穴も直径４０cm、深さ４０cm前後と小さい。底面のレベルもおおよそ揃うが、東北隅の柱穴だけが浅い。東側柱列、中央柱列の中間に位置する柱穴も規模的には一致する。

年代・性格　遺物は北西隅のＰ１から１～３が出土している。１～３はいずれも土師質土器で、１・２は皿、３は坏、胎土は淡茶褐色を底部回転糸切りである。これらの資料からＳＢ０８の時期は（１）土師質土器Ⅳ期に当たる。

ＳＢ０９（第１７図）



第17図　古志本郷遺跡SB09・10出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第18図　古志本郷遺跡SA01実測図　(S=1/60)

規模・構造　A区南側西寄りに位置し、ＳＢ１０と同位置に重複し、ＳＢ１０を切る。規模は梁間２間（3.8ｍ）×桁行３間（5.6ｍ）を測り、ＳＢ１０より一回り大きい。あたかもＳＢ１０を取り囲む庇、軒、櫓列のようでもあるが、中央柱列（ＤＤ'）の柱穴がＳＢ１０の柱穴を切ること、ＳＢ１０の柱穴規模の方が小さいこと等から別の建物と判断した。中央にも桁方向の柱列があり、総柱建物ではあるが、東西方向での柱の並びは良くなく、中央柱列の機能は明確でない。主軸はＮ－２４°－Ｗを指向する。

柱穴　７０cm×５０cm前後の隅丸方形・楕円形をなし、深さは３０～５０cm程度である。底面レベルは6.6ｍ程でほぼ一定している。なお、地山は精緻なシルトで粘性もあり、ＳＢ１０のような小さい柱穴も掘ることができる。堆土は黒褐色土。柱根は直径十五cmほどのものが１本残存していた他、黒色粘質土として痕跡を残すものもあった。

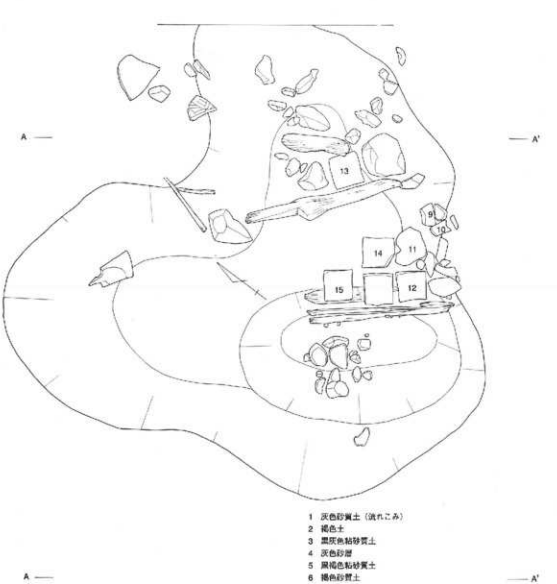
年代・性格　遺物は、土師質土器小片が柱穴から検出された他、Ｐ１からは瀬戸・美濃系の香炉が出土した（1）。１は乳褐色の胎土を持ち、外面及び内面頸部のみ淡緑灰色釉が施され、体部内面は無釉で、古瀬戸後期の袴腰香炉と思われる。ＳＢ１０の年代は１５世紀後葉とすることができる。棟の下に通る柱列ＤＤ'があることが本建物の特徴である。

ＳＢ１０（第１７図）

規模・構造　ＳＢ０９と重複し切られている。梁間２間（2.4ｍ）×桁行２間（4.0～4.6ｍ）であるが、西側柱列は距離が短く平面形は台形を呈している。主軸はＮ－２５°－Ｗである。ＳＢ０９中央柱列ＤＤ'の柱穴はそれぞれ別なピットを切っており、この切られたピット列がＳＢ１０に関係する可能性もある。その場合、ＳＢ０９と１０は中央に桁方向の柱列を持つ類似した構造が想定される。以上の建物部分に、北側柱列に軸を合わせＮ－６３°－Ｅを指向する柱列５間（7.5ｍ）分連続している（西端は第１７図の外側、ＳＫ１３を切る柱。第２９図参照）。この柱列は、ＳＤ０２を切り、南側に浅い溝を伴っている。

柱穴　ＳＢ０９と異なり建物の本体部分の柱穴は直径３０cm程度の丸型で、深さも２０cm～４０cmとばらつきがある。柱根も直径１５cmのものが１本確認された。一方西側に連続する柱列掘方も直径６０cm、深さ５０cm前後と大きく、柱根もやや太いものが見られる。

年代・性格　遺物は柱穴から土師質土器小片が見つかっているのみである。ＳＢ０９とほぼ同じ主軸を持ち、切られる関係にあることから、ＳＢ０９とＳＢ１０には立て替えの関係があると見られ



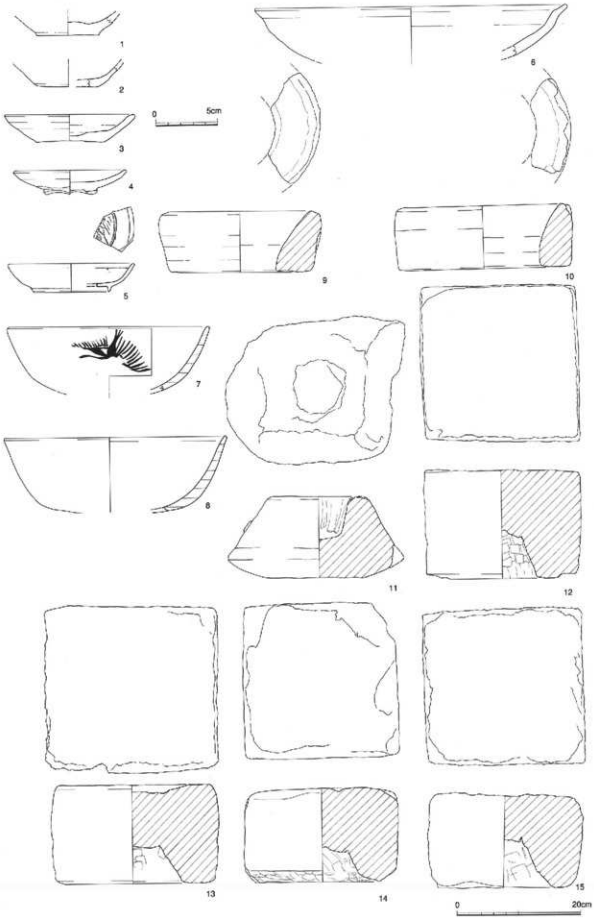
第19図　古志本郷遺跡SX01実測図　(S=1／60)

る。ＳＢ１０の年代は１５世紀後葉に近い時期と想定することができよう。平面規模・柱穴の大きさから、ＳＢ１０からＳＢ０９への立て替えにあたり規模の拡大があったことが伺われる。

Ｂ、柵列

ＳＡ０１（第１８図）

位置と規模　ＳＡ０１はＡ区中央西寄りに位置し、ＳＤ０２を切る。３間分５.０ｍを確認しており



第20図　古志本郷遺跡SX01出土遺物実測図　(1~8、S=1／3　9~15、S=1／6)

柱間距離は約1.6m前後である。柱穴は長辺50～100cm短辺50cm前後の隅丸方形で、深さは50cm前後で底面レベルも揃っている。主軸はN－64°－Eを指向する。南側にはSA01にほぼ平行するピットが見られるが、規模が大きく異なるため、合わせて掘立柱建物と見なすことはしなかった。柱根は直径10～15cmのものが2本残存していた。埋土は黒褐色土系の土である。遺物は西側2番目の柱穴より土師器脚部有段高坏が出土している。SA01の時期は古墳時代後期に当たると考えられる。SD02より後ののこの付近は古墳時代後期の包含層（第8図第2土層図第14層）が残っている部分で、この柱列の周辺からも多数の遺物が出土している。しかし、遺物はSD02に添う形で密に分布していることからそれらはSD02に伴うものとして把握した。

C、石敷遺構

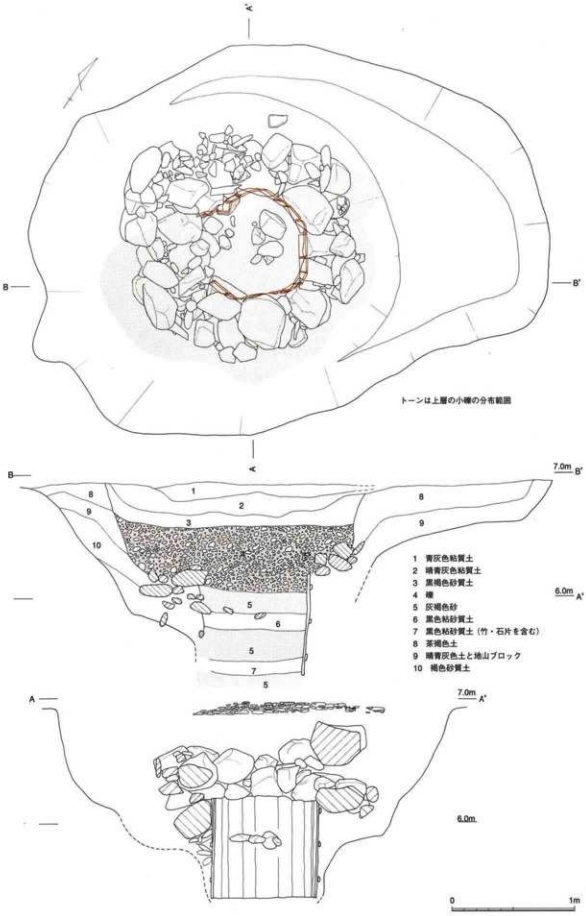
SX01（第19図）

位置と規模　A区中央東端の東側落ち込みの中に位置し、底部のレベルは5.75mと本報告書の中でも最も低い位置にある遺構である。遺構は浅い皿状の土壙の中に自然石・五輪塔の一部等が敷かれ、木で枠がさている。これらの石敷は、大きく西と東に別れる。東側は地輪1個の他は自然石からなり中央に自然木を持つ。この西側の長さ1.2mの木は北側に枝を打ち落とし、面を持たせたような加工を受ける。西側石敷は火輪1地輪4を整然と並べ、西側に横木を渡し杭を打って固定した構造を持つ。南の柒石には第20図9・10の輪状の石が含まれていた。

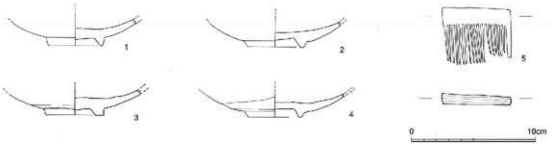
土層堆積状況　SD07の埋土を上層に持ち、1～5層が6～8層を切る形で堆積しており、1回掘り返しがあったと推測される。6～8層はすべて地山灰褐色砂の流入と思われる砂質土で、8層のみがやや黒色土化している。6・7層は遺構外にも続いており、ラミナ状に細分できることから流水による自然堆積であると思われる。前述の石敷は6～8層に含まれる。

出土遺物　SX01は低位置にあるため調査は湧水に悩まされ、層位的な遺物の取りあげができなかった。1～3は土師質土器でともに褐色の胎土を持ち1・2は坏である。3は大皿である。土師質土器Ⅳ－Ⅴ期に該当するか。4は自磁で上層から出土した。抉りのある高台を持つ皿で森田D群のものである。5は中国製青花で、外面に圏線2本、内面は底部に草花文と界線を持つ。16世紀のものと思われる。6は淡褐色の胎土に黒釉を持つ灰褐色釉のかかる陶器皿である。7・8は漆器碗で内外ともに黒漆塗、7は外面に朱漆の鶴を描く。9・10は凝灰岩製の石製品で、リング状をなす。9・10は同一個体の可能性もある。11は凝灰質角礫岩製の五輪塔火輪でかなり摩耗した状況であった。12～15はほぼ同大の五輪塔の地輪で、内面くりこみ部には平刃削痕が残る。12・15は凝灰岩、13は凝灰質角礫岩、14は凝灰岩あるいは安山岩製である。14は側面下端も面取りが行われ、平刃削痕を残る。15～12面にあるのも凝灰角礫岩製の地輪で、取り上げ時に崩壊した。

年代・性格　SX01の年代は、上記遺物に加えて、遺構埋土が17世紀後半の遺物を持つSD07に切られていることから、土師質土器Ⅳ～Ⅴ期にかけてものとすることができる。トレンチ調査によって、東側落ち込み部のさらに東側は神戸川に向かって地山灰色砂質土が深く落ち込んでいることが明らかになっており、SX01は神戸川の崖線上に位置することになる。SX01は神戸川にかかわる何らかの遺構である可能性があろう。



第21図　古志本郷遺跡SE01実測図　(S=1／3)



第22図　古志本郷遺跡SE01出土遺物実測図　(S=1/3)

D、井戸

ＳＥ０１（第２１図）

規模・構造　Ａ区中央に位置する。上面は東西４ｍ、南北3.3ｍの不整形をなし、深さは井筒の底面で1.6ｍを測る。上層は小礫が散布されていた。井側は直径３０cm大の石を中心に石組が組まれているが、上層は破壊され４層に無秩序に投げこまれていた。井筒は幅５～１０cm、長さ８０cmの板材１８枚で構成され、３段の竹たがで締められていたたが、板は全周せず西側には検出されなかった。

土層堆積状況　井戸の掘方埋土は茶褐色土・青灰色土からなる。井筒内部は、粘質土と灰褐色砂が互層状に堆積していた。井側石組は上部を破壊され、破壊後の窪みには青灰色系の土が堆積する。

出土遺物（第２２図）　１～４は肥前系磁器の皿で、いずれも見込釉ハギである。１～３淡青灰色釉、４は黒緑色釉がかかる内野山産のものである。２のみが石組破壊後の上層埋土、他の３点は井戸内から出土した。５は木製櫛である。

年代・性格　ＳＥ０１は１７世紀後半～１８世紀初め頃に井側石組を上層を破壊して廃棄された井戸と考えられる。

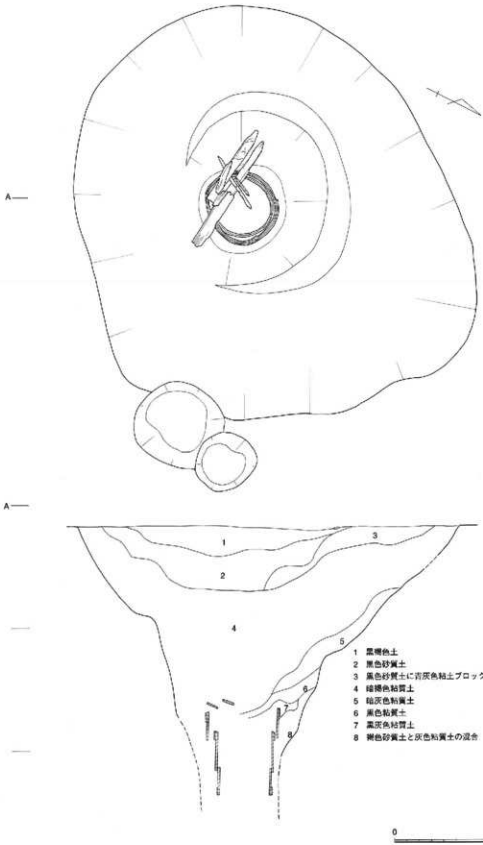
ＳＥ０２（第２３図）

規模・構造　Ａ区中央に位置し、遺構上端で長径3.5ｍ前後の楕円形、底部で８０cmほどの円形の掘方を持つ。深さは確認できたところまでで2.2ｍを測り地山灰褐色粘質土を突き抜け褐色砂質土層に到達していた。調査時には、井戸内底部からは大量の湧水が発生した。埋土上層（第２３図１～３層）は掘方と井側内埋土の区別がなく、井側以上が破壊され廃棄されたものと思われる。井筒は曲物３個が利用されいた。曲物積み上げ型井戸と推測される。

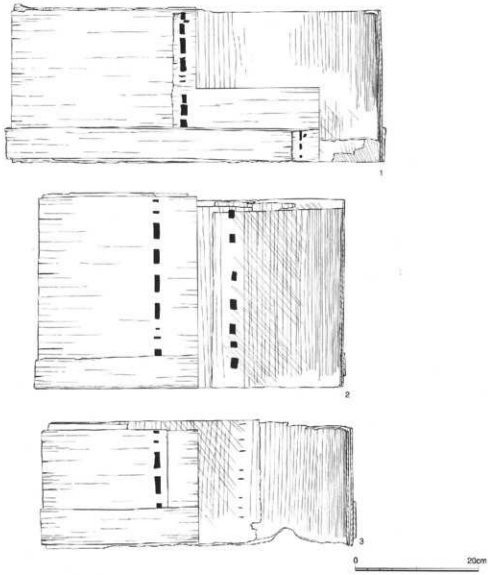
井側の曲物　井側に利用されていた曲物は、いずれも桶などの転用で底板を固定する目釘跡も確認できる。２は径５０cm高さ３３cm、側板は２枚で構成されほぼ対向する２か所を綴じ、内側の綴じ目と外側の綴じ目の間には当て木がされている。１・２は天地逆に設置されていた。

年代・性格　土師質土器小片が出土しており、年代は中世と考えられる。

E、土壙



第23図　古志本郷遺跡SB02実測図　(S=1／60)



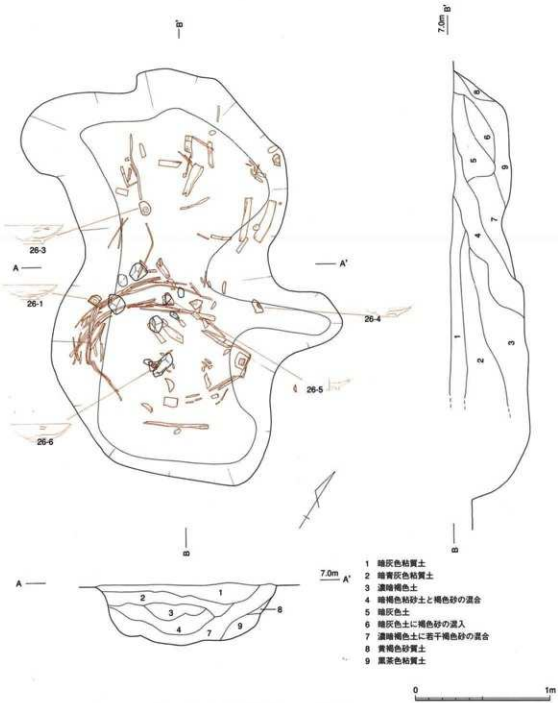
第24図　古志本郷遺跡SE02井筒実測図　(S=1/6)

ＳＫ０１（第２４図）

規模・構造　平面は長径３ｍ短径２ｍの瓢状を呈し、深さ６０cmを測る。断面が丸みを帯びた掘方を持ち、底部は平坦である。

土層堆積状況　北側の径１.５ｍの土壙（５～９層）を１～４層からなる南側部分が再度拡張して掘削したような状況を呈する。また、残る北側部分についても径６０cmあまりの小掘削跡がある。南側第４層は地山褐色砂を多量に含むが第１～３層は黒色土系でこの１～３層から木製品を含む遺物が出土している。

出土遺物（第２４図）　１～６は肥前系磁器の皿でいずれも内外面施釉、青白色を呈する。１・２・４は内面に青色の圏線をめぐらす。５・６は青色の折れ松葉が描かれる。いずれも見込釉ハギで削り出し高台を持ち、２・６はやや三日月高台状をなす。７は肥前陶器で、青緑色釉が施され見込蛇ノ目釉ハギで内面ｎ沈線が施される。いわゆる内野山産か。８は同じく肥前系陶器碗で、京焼



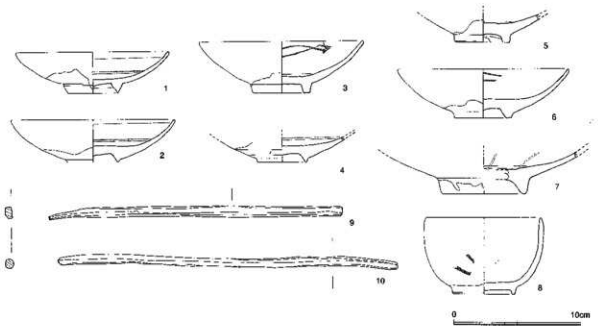
第25図　古志本郷遺跡SK01実測図　(S=1／30)

き風陶器と呼ばれるものである。淡茶褐色の釉が施され、外面には鉄絵が描かれている。底部には「清水」の銘がある。９は箸状の木製品である。このほかに板状木製品、竹が多く出土している。

年代・性格　出土した肥前系陶磁器類はおおむね１７世紀後半代のもので、ＳＫ０１の時期も同じで、比較的短期間に掘り返されたのであろう。性格は明確ではないが、木製品、粗製の肥前系時期などが出土する事から、ある種の廃棄土壙と考えられる。

ＳＫ０２（第２７図）

規模・構造　Ａ区中央東寄りにあり、ＳＢ０３を切る。長さ６ｍ、幅は中央部で４ｍばかりの複雑



第26図　古志本郷遺跡SK01実測図　(S=1/30)

な形を呈する。深さは中央部で５０cmであり、断面は浅い皿状を呈する。

土層堆積状況　平面型が複雑な形状にもかかわらず、西側部分の第８・９層を除いては土壙全体が単一の堆積をなしている。上層（１～３層）と下層（４～７）層に二分できる。下層には円形の痕と思われるねじられた竹が出土しており、桶などが埋設されていた事が考えられる。上層はその抜き取り跡の埋土であろうか。埋土は全体に地山褐色砂質土と暗灰色土の混合からなり、この点は８・９層も同様である。

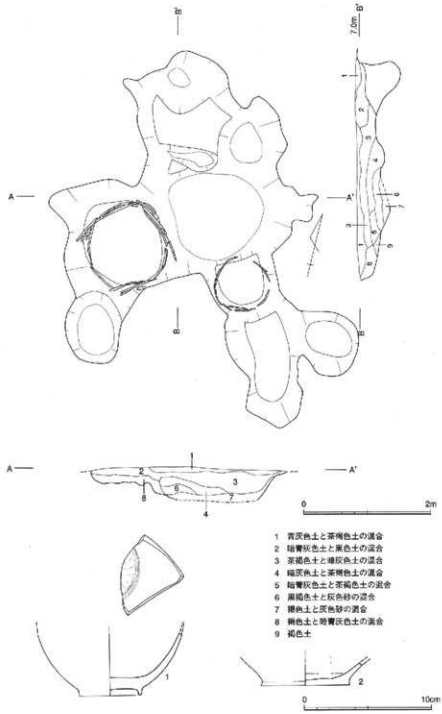
出土遺物（第２５図）　１は肥前系磁器の碗で、内部底面に青色で圏線に囲まれた菊が描かれる。２は土師質の皿で底部回転糸切りである。このほかにも肥前系磁器の皿、広東碗などが出土している。

年代・性格　出土遺物には、最も新しいもので１８世紀後半～１９世紀にかけてのものが含まれ。出土土層が抑えられていないため、これがＳＫ０２の営まれた時期はおおむねの年代となる。ＳＫ０２は底部に竹籠が残存することから、桶などを埋設した施設であった事が知られる。まず西側に埋設が行われ、次いでそれが抜き取られて東側に別な埋設が行われ、最後に東側埋設物も抜き取られたと考えられる。なお、第５図に示したように近代には、本遺構は水田となっている。

ＳＫ０３（第２８図）

規模・構造　A区中央に位置する。一辺約２mの不正方形をなし深さは約８０cmを測る。黒褐色土系の土が堆積する。

年代・性格　出土遺物２点が図化可能であった（第３０図）。１は複合口縁の甕の口縁部で、外反し端部に面を持たないことから草田４期に相当する。２は内外面ともに縦方向のミガキを持つ鉢状の土器である。



第27図　古志本郷遺跡SK02・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

ＳＫ０４（第２８図）

規模・構造　Ａ区中央東に位置する径約２ｍの不正円形で深さ５０cmを測る。茶褐色系の砂質土が堆積していた。

年代・性格　出土遺物には第３０図３～１０がある。４・６を除くと他は複合口縁の甕口縁部である。３・５・７・８・１０は草田５期に当たり、９は草田３期に相当する。なお６は天地逆にして埋められていたものと推測される（図版１０）。これらの遺物からＳＫ０４の年代は草田５期に当たる。

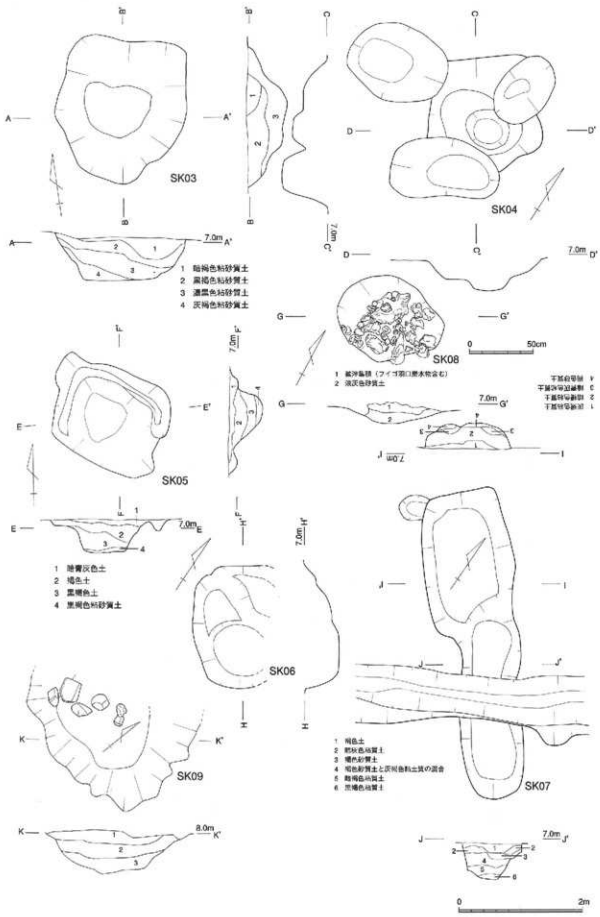
ＳＫ０５（第２８図）

規模・構造　Ａ区中央に位置する。長辺２ｍ短辺１．６ｍの長方形をなし深さは５０cm、北側・西側に段を持つ。出土遺物には図化可能なものはなく、年代、性格とも不明である。

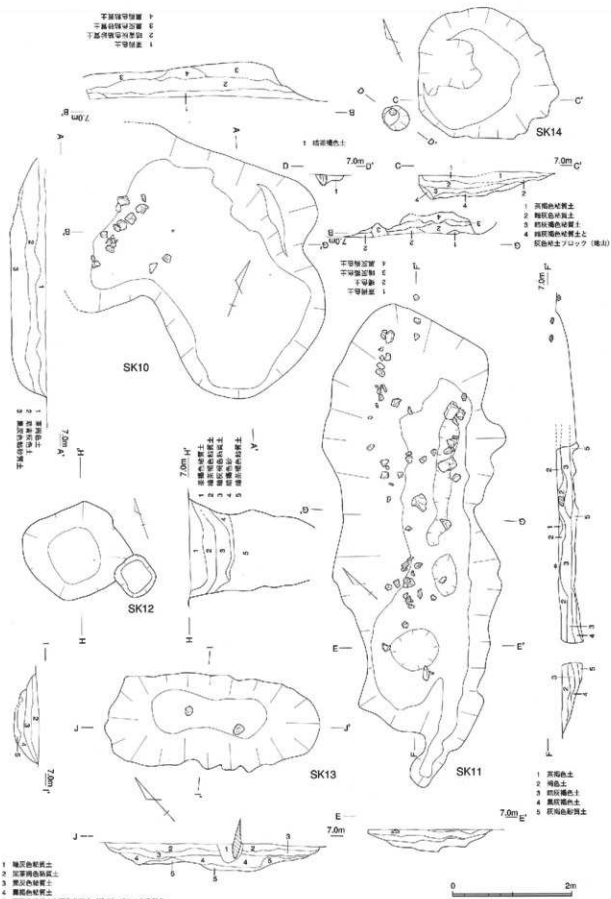
ＳＫ０６（第２８図）

規模・構造　Ａ区中央ＳＫ０５北側に位置する。長辺２ｍの楕円形で深さは６０cm。東側半分はトレンチ調査にかかっている。埋土には黒色土が堆積していた。

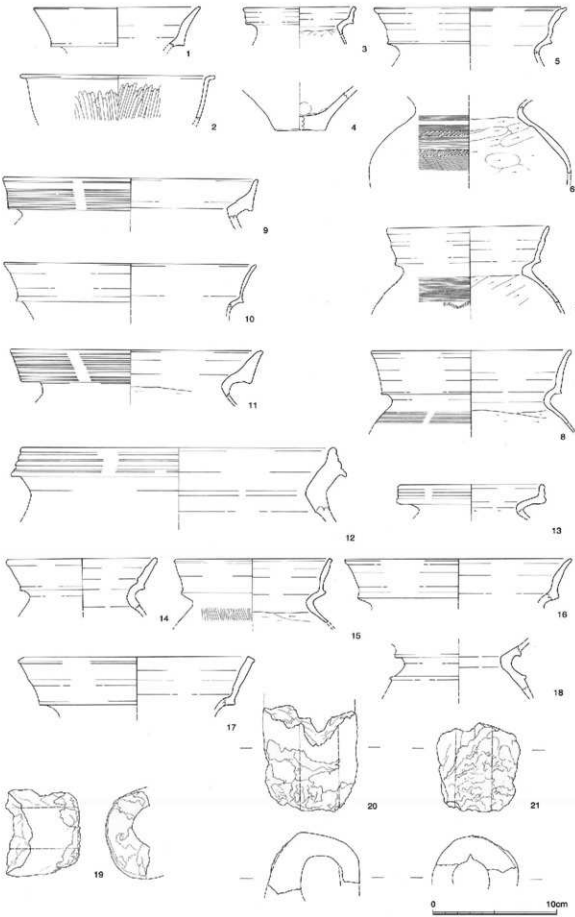
遺物・性格　遺物は第３０図１０～１３が出土した。いずれも複合口縁の甕で、１２は草田１期に当たるが１１・１３は草田３期に相当し、ＳＫ０６の年代は草田３期とすることができる。



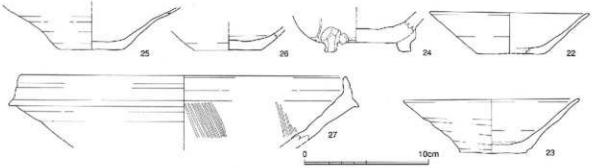
第28図　古志本郷遺跡SK03～14実測図　(S=1／60　SK08のみS=1／30)



第29図　古志本郷遺跡SK03～14実測図2　(S=1/60)



第30図　古志本郷遺跡SK03～14出土遺物実測図1　(S=1／30)



第31図　古志本郷遺跡SK03～14実測図2　(S=1/60)

ＳＫ０７（第２８図）

規模・構造　Ａ区中央北側に位置し、ＳＤ０４・０５に切られる。長さ2.5ｍ幅1.5ｍの北側土壙と長さ3.0ｍ幅1.0ｍの南側土壙が重複している形態なす。断面からは明確な土壙墓状の堆積は確認できなかった。深さはともに５０cmほどである。

遺物・性格　遺物は第３０図１４～１８が出土した。１４～１７は複合口縁の甕、１８は鼓型器台である。いずれも草田５期に相当するものとみて大過ないが、１７のみ口縁端部に面を持ちやや新しい様相を示す。ＳＫ０７の年代は草田５期と考えておきたい。土壙墓の可能性もある。

ＳＫ０８（第２８図）

規模・構造　ＳＫ０２東側に隣接する。長辺９０cm短辺７０cmの楕円形で深さは２０cmを測る。炭化物と鉱滓が充填されていた。

遺物・性格　鉱滓・炭化物に混じって羽口が３点（第３０図１９～２１）出土した。１９は外径９cm、送風管径３cm。２０は外径８cm、送風管は４cmでやや方形を呈している。２１は外径７cm、送風管径３cmである。いずれも外面先端部は溶融している。ＳＫ０８の年代は不明であるが、鍛冶に関わる遺物を廃棄したものと考えられる。

ＳＫ０９（第２８図）

規模・構造　径３m、深さ７０cmを測る。断面は半円状をなし、人頭大の石が多数投げこまれた状態であった。埋土は黒褐色土が堆積しており、遺物には実測図を掲載していないが土師質土器が出土している。ＳＫ０９の年代は中世後期と推測される。

ＳＫ１０（第２９図）

規模と構造　Ａ区北西隅に位置し、近世の溝ＳＤ０４に切られる。長径５m以上を測る不整形をなし、深さは６０cm前後で、底面は平坦である。西側は未検出であるが、底部の立ち上がりが検出されており、規模は現在押さえられていると見てよい。ＳＫ０９同様に法面に人頭大の石、遺物が検出された。

遺物・性格　遺物は小片のほか３点を図化できた（第３１図２２～２４）。２２・２３は土師質土器坏でⅣ期新段階のものである。いずれも底部回転糸切りである。２４は瀬戸・美濃系の香炉で、３

足で底部回転糸切り、外面に緑灰色の釉がかかる。古瀬戸後期のものと推定される。ＳＫ１０は底面が平坦で遺物も法面周辺からしか出土しないことから、いわゆる池である可能性が高い。[(2)]池として機能した年代は土師質土器Ⅳ期の新段階になろう。

ＳＫ１１（第２９図）

規模と構造　Ａ区中央北側に位置し、近世の溝ＳＤ０４に切られる。長径８ｍ、幅２.５ｍを測る長楕円形の平面を持ち、深さは４０cm程度で、浅い皿状を呈する。ＳＫ０９・１０同様、人頭大の石が点在する。埋土は茶褐色土が堆積する。

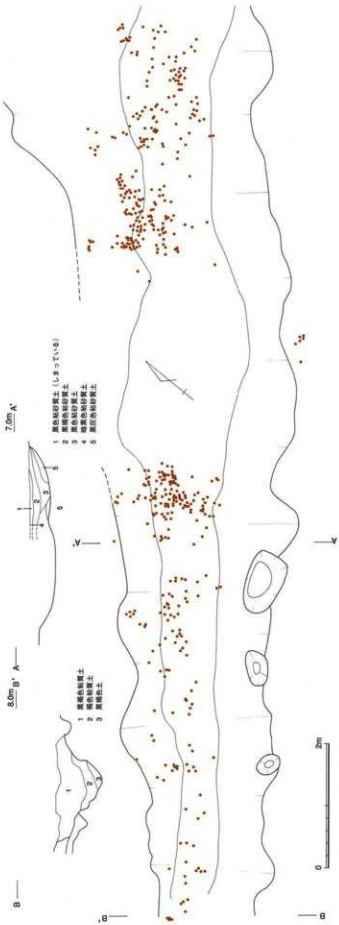
遺物・性格　土師質土器、備前焼が出土し、うち３点を図化した（第３１図２５～２７）。２５・２６は土師質土器坏でいずれも底部回転糸切り、Ⅳ期に当たる。２７は備前焼擂鉢で９条程度の放射状櫛描き状線を持ち、口縁部は下端に広げられる。間壁Ⅲ期に相当する。遺構の年代は土師質土器Ⅳ期としてよいと思われる。

ＳＫ１２（第２９図）

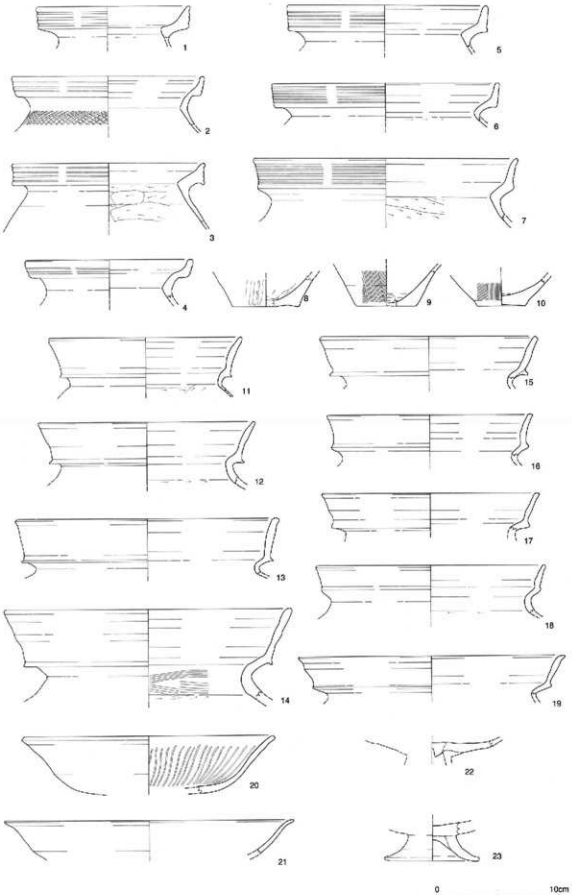
規模・性格　Ａ区中央西よりに位置し一辺１.５ｍの方形で、深さは２ｍ以上になる。灰褐色砂の地山に素掘りで掘られており、内部には茶褐色土と灰色砂が相互に堆積していた。崩落の危険性があり２ｍで掘り下げを停止した。遺物はない。井側等は検出されなかったが井戸と推測される。

ＳＫ１３（第２９図）

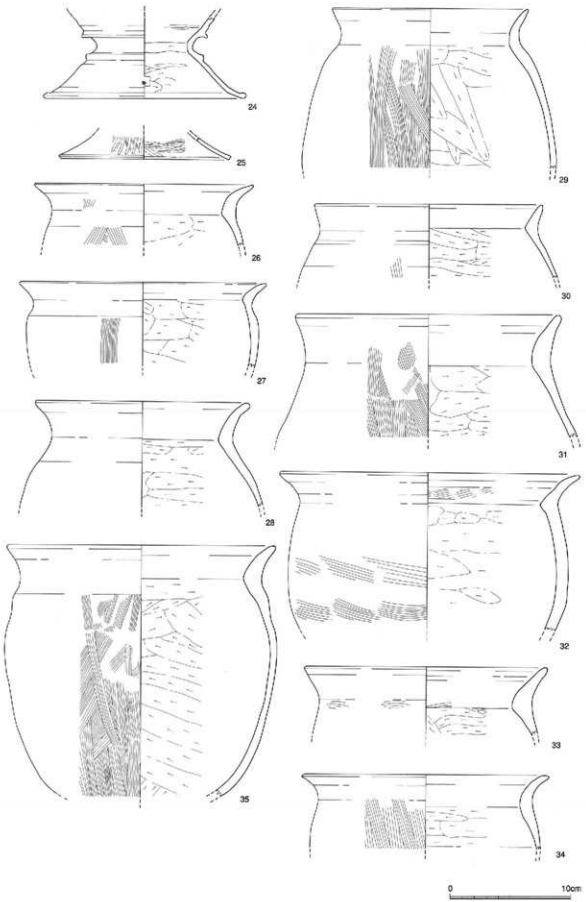
規模・性格　Ａ区南西に位置する。長



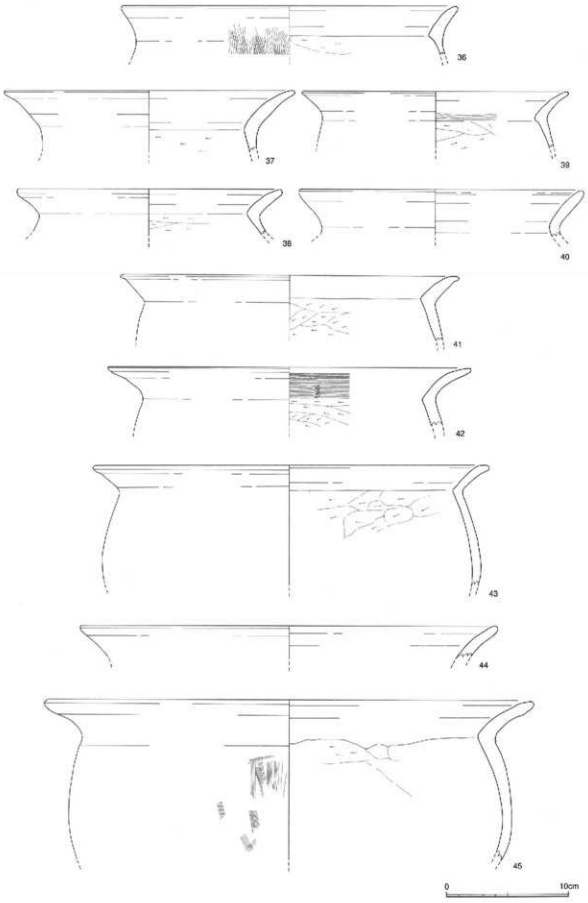
第32図　古志本郷遺跡SD01実測図　(S=1/60)



第33図　古志本郷遺跡SD01出土遺物実測図1　(S=1/3)



第34図　古志本郷遺跡SD01出土遺物実測図2　(S=1/3)



第35図　古志本郷遺跡SD01出土遺物実測図3　(S=1/3)

径３ｍの長楕円形で深さ５０cmである。黒灰色土が堆積する。遺物は出土していない。１層が堆積する柱根を持つピットはＳＢ１０（第１７図）に連続するものである。

ＳＫ１４（第２９図）

規模・性格　Ａ区南西に位置する。直径２ｍの円形をなし深さは４０cmを測る。出土遺物はない。

Ｆ、溝

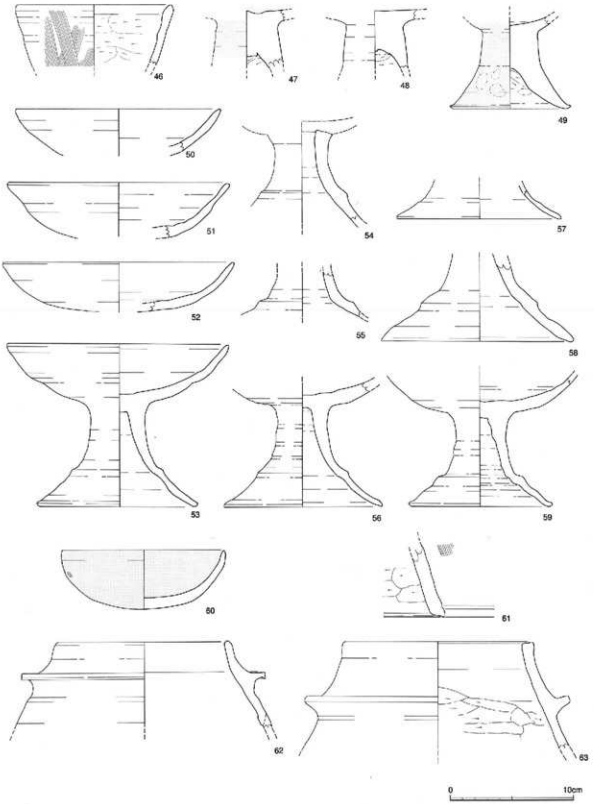
ＳＤ０１（第３２図）

規模・形態　Ａ区北隅を南西から北東に貫流する。上幅２～３ｍ、下幅１ｍ前後で底面の標高は、西側6.6ｍ、東側6.25ｍほどである。堆土には黒褐色系の土が堆積しており、地山灰色砂の流入した砂層等は見当たらず、傾斜が急ではあるが顕著な流水痕跡は確認できなかった。

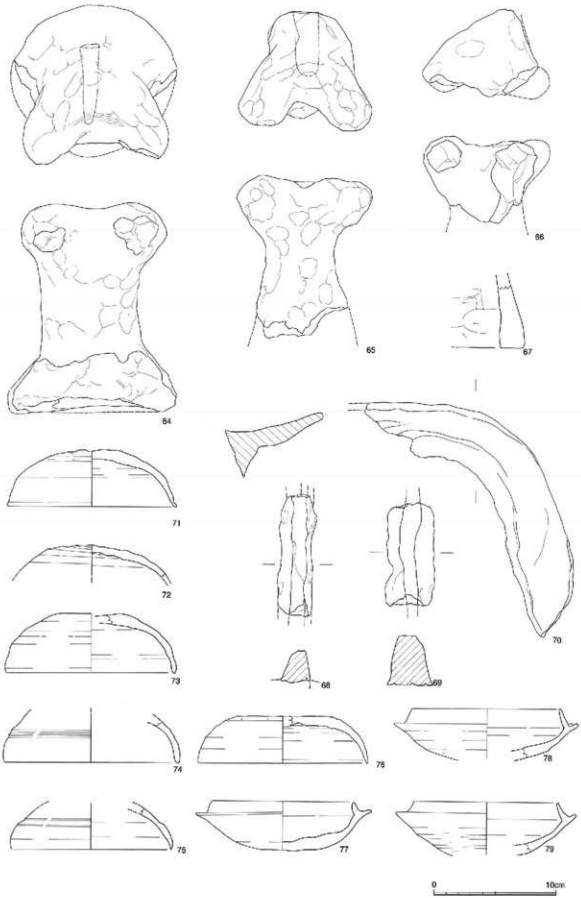
遺物出土状況　出土遺物は全体に分布しており、出土層位と遺物の年代に相関関係は見いだし得なかった。中世遺物の混入を除けば、古墳時代後期（大谷５期）の遺物が最も新しいものになり、この時期に溝は埋没したものと考えられる。なお、中央部の出土遺物のない部分は、トレンチ調査で当たった部分である。溝が埋没した古墳時代後期の遺物についていえば、供膳具・煮炊具共々出土している。

出土遺物（第３３～３７図）　１～１０は弥生土器である。１～７は甕口縁部で、いずれも凹線・擬凹線が施される。３はヘラ描平行沈線文、２・４～６は擬凹線をヨコナデしたものである。７の擬凹線は門生黒谷Ⅳ類[3]。２にはハケ工具による列点文が頸部にめぐらされる。草田１～３期に該当する。

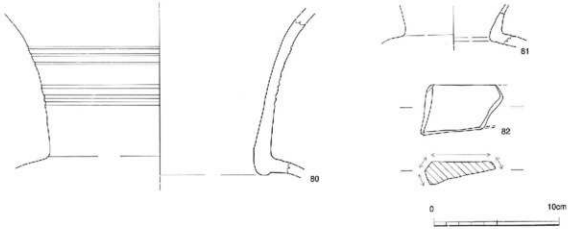
１１～２５は弥生時代終末～古墳時代前期の土器である。１１～１９は複合口縁の甕で、１１・１２・１８は端部が先細りになるもの、１７・１９は端部を外に折り曲げ内傾に面を持つもの、１３１６は端部に面を持つもので、草田５～７期に該当する。２０～２２は高坏で、２０は内面にミガキによる暗文を持つ。２３は低脚坏。２４は鉢型器台で、受部は内面ミガキ、台部は外面に鋭利な螺旋状の繰り込みがあるが、本貫通である。２５は器台・高坏等の脚部か。２６～４５は土師器甕あるいは甑である。２８～３１は口縁部が直立に近く、甕の最大径が体部の肩より下にくる下脹れをなすものである。他は口縁部をくの字に外反させるタイプである。いずれも内面は頸まで横方向のケズリで、３５では底部近くまで横ケズリである。外面は縦方向のハケが主流であるが、横方向のハケを施すもの（３２・３３）もある。４２は口縁内面に右回りのはハケを持つ。４３～４５は大型で、４３・４５は外面にススが付着する。４６は鉢状の土師器である。外面タテハケ、内面ケズリを施す。４７～５９は土師器高坏である。４７～４９は脚部の短いもので、脚部の上半部はけずり込まれておらず、筒状をなさない。内面はケズリで、外面は赤彩される。５０～５９は、脚部に段を持つ（以下、脚部有段とする）高坏である。なお、５３と５６は同一個体であることが判明した。坏部は皿状で、下部に松山脚部接続法[4]γの粘土紐の巻つけによる膨らみが明瞭なものもある。脚部はハの字に開く付近に段を設けており、これら高坏の著しい特徴となっている。調整は内面・外面ともナデで、脚部外面の段に合わせて内面にも段状を呈するものもある（５３・５６・５８）。胎土も特徴的で、いずれも明茶色で、１～２mm大の砂粒を含んでいる。６０は土師器碗で内



第36図　古志本郷遺SD01出土遺物実測図4　(S=1/3)



第37図　古志本郷遺跡SD01出土遺物実測図5　(S=1/3)



第38図　古志本郷遺跡SD01出土遺物実測図6　(S=1/3)

外面赤彩。６１～６３・６７は甕型土器である。６１・６３は内面横方向のケズリで、６２は上に向かって外傾する粘土紐の巻上痕を残す。６４～６６は土製支脚である。すべて突起は２本で６４・６５は背部には穴がうがたれるが、内側まで貫通することはない。指頭圧痕が多数残る。６８～７０は移動式竈の一部である。７１～７６は須恵器壺坏で、７１・７６は頂部外周のみケズリを施し、他はケズリが省略される。なお、７６はいわゆる赤焼きの須恵器である。７７～７９は坏身で、脊底部のケズリは部分的である。８０・８１は須恵器甕である。須恵器の下限はおおむね大谷出雲５期になろう。８２は砥石である。

ＳＤ０２（第７・３９図）

規模・形態　Ａ区西側を南から北に向かって貫流する。底部標高は、土層断面ｍｍ'（ＳＤ１２）地点で6.７５ｍ、１１'で6.６ｍである。幅は６０cm前後を測る。断面では底部は平坦で、箱状をなす。一部とぎれる部分を経てＳＤ１２に連続する。Ｃ区にもＳＤ１２の延長線上に同時期の遺物を含むＳＤ２１があり、連続している可能性が高い（第６２図）。いずれも黒褐色土が堆積する。また底部には小さな黒色土を埋土とする径５cm程度の小孔が無数に存在していた。他の遺構との切り合い関係では、中世のＳＫ１０、近世のＳＤ０４・０５・０７・０８のいずれにも切られている。また、ＳＡ０１にも切られている。

遺物の出土状況　遺物は溝の内外から、土師器・須恵器を中心に多数出土している。なかでも、第３９図周辺は地山の上に黒褐色粘質土が堆積し（第８図第２土層図１４・１５層）、このなかに古墳時代後期の遺物が集中して出土した。また、この部分からほぼ完形に復元できる土師器甕（４０－１）、甑（４０－７）等が出土している。須恵器坏身１１・１２はいずれも溝の底部から浮いた検出面から出土しており、溝の埋没年代を示すものになろう。第３９図中央付近はＳＡ０１に当たり、このＳＡ０１を掘立柱建物の一部とし、これらの遺物を掘立柱建物に伴うと見ることも想定したが、柱列１条しか検出できなかったことから遺物は溝に対応するもと判断した。

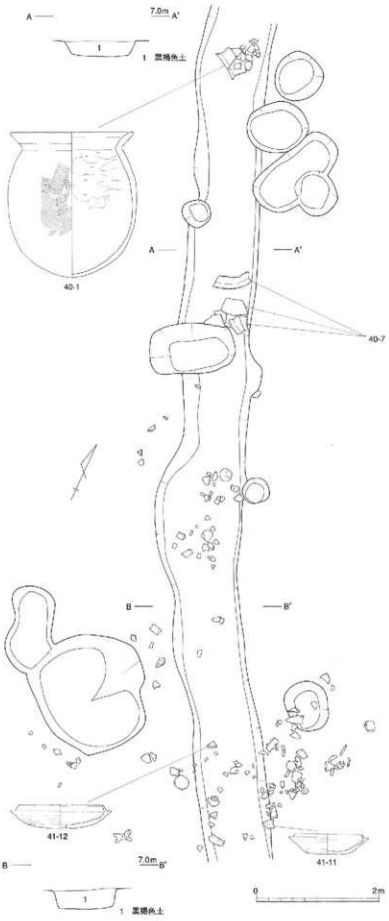
出土遺物（第４０図）　１～５は土師器甕である。２・４は口縁が直立気味で下膨れになるタイプ、他は口縁がくの字になるタイプである。いずれも内面は横方向のケズリが施される。６・７は甑で７の外面に横ハケが見られる以外、摩滅が進んでおり、調整は不明である。８・９は土師器碗で共

に内外面赤彩で、８は外面に横ハケが施される。１０は土製支脚であるが全高１２cm程度とかなり小型である。突起２本を持ち、体部中央に径２cmを上回る穴を貫通させている。実用品でない可能性も想定される。１１～１５は須恵器である。１１・１２は坏身で１１は底部はナデ、１２も周辺部のみケズリが施されている。１３は長脚無蓋高坏で透かしの有無は確認できないが、口縁部がやや外反する。１４は壺で、１５も甕・長頸壺の口縁部であろう。

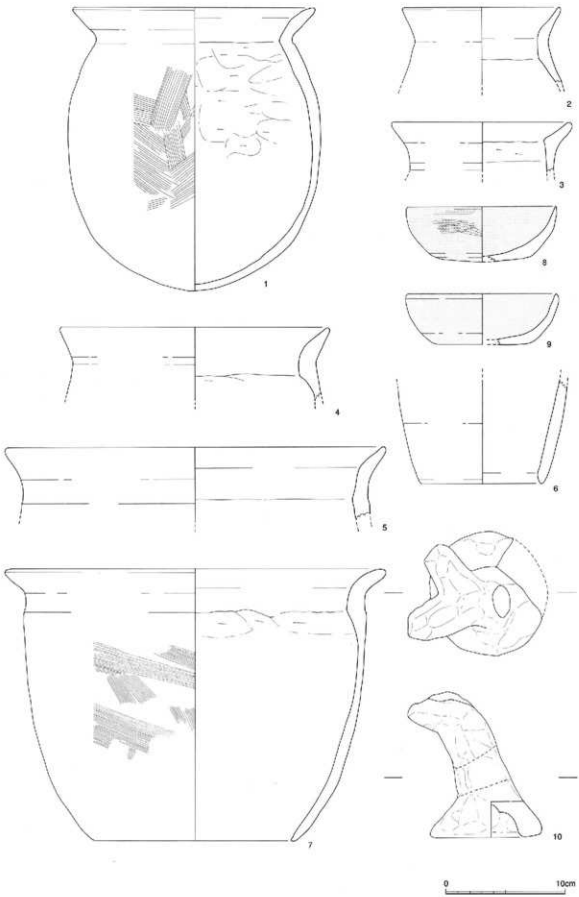
年代・性格　出土した須恵器は、大谷出雲５期に相当し、この時期には溝が埋没していたと考えられる機能したものと考えられる。顕著な流水痕跡がなく、現神戸川にほぼ平行すること等から、何らかの区画溝である可能性を指摘しておく。

ＳＤ０３（第７・４２図）

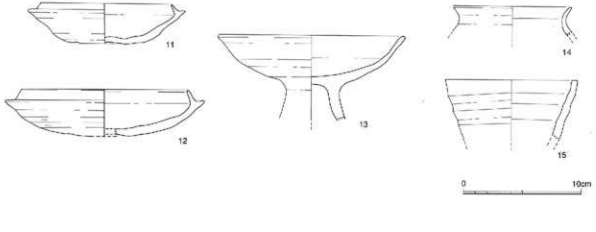
規模・形態　Ａ区北端から発して途中で９０°向きを変え東側落ち込みに貫流する。幅は上端で１．７m前後である。底部標高は断面ａａ'で６．５m、ｂｂ'で６．２mである。



第39図　古志本郷遺跡SD02実測図　(S=1/30)



第40図　古志本郷遺跡SD02出土遺物実測図1　(S=1/3)



第41図　古志本郷遺跡SD02・出土遺物実測図2　(遺物S=1／3)

黒色の砂質土が堆積し、検出状態で他の近世の遺構とは異なる埋土であることが一目瞭然であった(図版１６)。

切り合い関係ではＳＤ０１を切るものと推測される（重なる部分はトレンチ調査区)。

遺物出土状況　遺物は上層からも下層からも出土している。後述のように遺物には年代幅があり、溝の継続期間を表す可能性もあるが、取り上げ時における分別をしていなかったため、遺構の終末年代を知ることしかできない。

出土遺物（第４２図１～１５、第４３図１６～１８）　１～１４は土師質土器である。１は茶褐色の胎土をもつ大味な作りの坏で、口縁端部はやや内傾する。年代は土師質土器Ⅰ期に当たる。２～６は胎土褐色の坏で、やや内向する丸みを持つかあるいは直線的に立ち上がる。土師質土器Ⅲ期あるいはⅣ期古段階に相当する。７・８は立ち上がりが急で口縁部は外反するタイプで、Ⅳ期のものである。９～１３は破片でありるが、１１がⅣ期新段階に相当する以外はおおむねⅢ～Ⅳの古段階に収まるであろう。１５は器種不明の須恵質の土器である。１６は暗灰色の胎土に緑灰色釉が施される。肥前系陶磁器であろうか。混入品と見られる。１７・１８は青磁碗で１７は口縁部が外反し、１８は底部外面無釉である。上田Ｄ類で１５世紀代のものであろう。

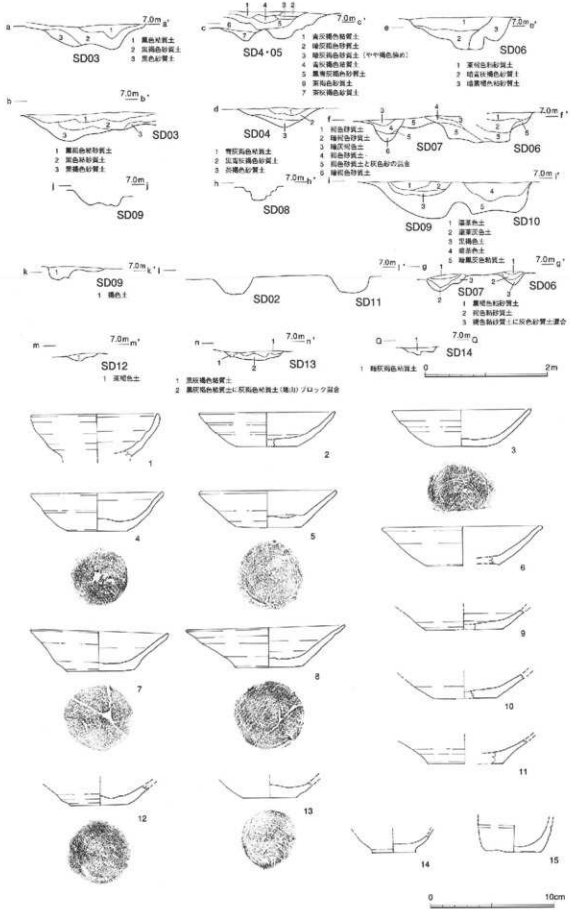
年代　ＳＤ０３の機能した年代は、伝世される可能性のある１７・１８を除いて、土師質土器でⅢ期とⅣ期の古段階と考えられる。

ＳＤ０４（第７・４２図）

規模・形態　Ａ区中央を西から東に貫流する一連の溝（ＳＤ０４～０８）の一番北側に当たる。底部で幅３０cm程度の規模を持ち、底面標高は6.8ｍ前後である。おおむね断面は箱形であるが薬研状の部分もある。埋土には暗灰色系の土が堆積する。ＳＫ０７・１０、ＳＤ０２・０５・０９・１１を切る。

出土遺物（第４３図－１９・２０）　１９は乳黄褐色の釉のかかる肥前系陶器の呉器手碗。２０は弥生土器壺で松本Ｖ－１のものである。

年代・性格　溝の存続時期は、１９から１７世紀後半であろう。暗灰色系の埋土も、近世の遺構に見られるもので矛盾しない。ＳＤ０５・０５はＳＤ０８とほぼ平行しており、道の側溝である可能



第42図　古志本郷遺跡SD03～14土層図・出土遺物実測図1　（土層　S=1／60　遺物S=1／3）

性もある。

ＳＤ０５（第７・４２図）

規模・性格　Ａ区中央を西から東に貫流する。規模は底部で幅２０cm、同標高は６.７m前後である。埋土には茶灰色系の砂質土が堆積する。遺物の出土はないが、埋土等から近世のものとしてよい。ＳＫ０７・１０、ＳＤ０２・０９を切る。ＳＤ０４に切られ、大部分はＳＤ０４の下になってることから、ＳＤ０４に作り替えられた溝であると考えられる。

ＳＤ０６（第７・４２図）

規模・形態　Ａ区中央を西から東に貫流する溝群の中に位置し、東側三分の一程度の所で二又に分かれている。規模は底部で幅４０cm、同二又部分底部幅２０cm程度で、底部標高は西側６.６m、東側で６.５mほどである。ＳＤ０４同様、暗灰色系の土が堆積する。ＳＸ０１、ＳＤ０２・０９・１０、ＳＫ１１を切り、ＳＤ０７に切られる。

出土遺物（第４３図－２４・２５）　２４は陶器の碗である。胎土は灰褐色で、体部外面に緑灰色の釉を施す。内部は施釉しない。底部は回転糸切りである。２５は備前擂鉢である。

年代・性格　遺物の年代観はいまひとつはっきりしないが、ＳＤ０４・０５同様に、ＳＤ０６はＳＤ０７に作り替えられ、ＳＤ０７からは１７世紀後半の遺物が出土しているので、１７世紀以降と見てよいであろう。

ＳＤ０７（第７・４２図）

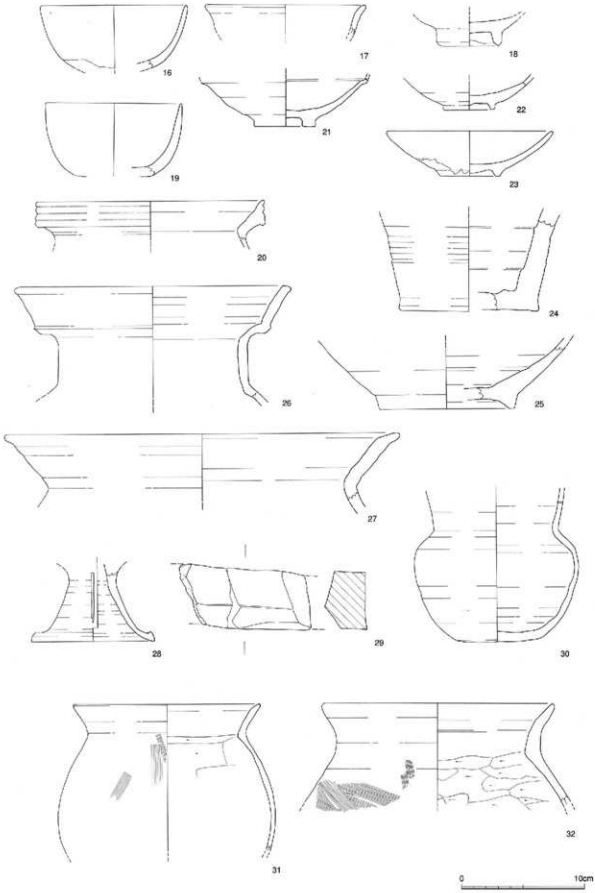
規模・形態　Ａ区中央を西から東に貫流する溝群の中の一条で、規模は底部幅５０cmを測り、溝群の中では最大規模である。断面は逆台形で、埋土には地山褐色砂質土がかなり含まれており、流水を想起させる。底面標高は６.６m程度。ＳＤ０６を切り、大部分が重複する。ＳＸ０１は完全にこの溝の下となっており、このことから、ＳＸ０１の埋没が１７世紀後半以前であることがわかる。ＳＤ０２・０９・１０、ＳＫ１１を切る。

出土遺物（第４３図－２１～２３）　２１～２３はいずれも肥前系陶器皿である。２１は茶灰色の胎土を持ち、砂目積み。２２は緑灰色釉、２３は見込釉ハギで濃青緑色釉が施される。２１・２２は１７世紀前半、２３は１７世紀後半のものと考えられる。このほか、砂目積み、底部糸切りで、茶褐色の釉を施される肥前系陶器の皿も出土している。

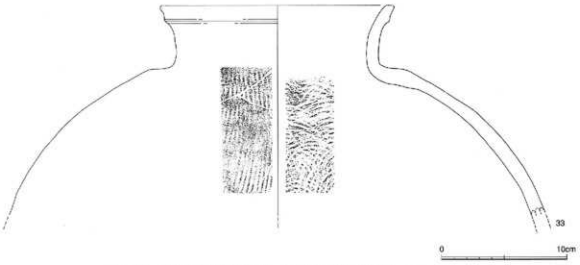
年代・性格　ＳＤ０７の年代は２３から１７世紀後半とすることができる。一方、ＳＸ０１の使用年代は１７世紀の初頭にかかる程度であるので、この間に東側地山の落ち込みが埋められ、ＳＤ０６が作られたことになる。ＳＤ０７は砂層を持つことから流水が想定でき、神戸川への何らかの排水路であったと考えることができる。

ＳＤ０８（第７・４２図）

規模・性格　Ａ区を東西に走る溝で、同様の溝群の一番南に位置する。規模は底部の幅で２０cm程でＳＤ０４・０５と規模がる維持し、ほぼ平行する。底面の標高は６.７mであるが、不連続になる部分があり、西から東に貫流していたわけではない。暗灰色系の土が堆積し、遺物はなかった。



第43図　古志本郷遺跡SD03～14土層図・出土遺物実測図2　(S=1/3)



第44図　古志本郷遺跡SD03～14出土遺物実測図3　(S=1/30)

ＳＤ０４・０５との類似性から道路側溝の可能性を考えたい。

ＳＤ０９（第７・４２図）

規模・構造　Ａ区中央を南東から北西へ貫流する溝で、規模は底部幅８０cm程度である。底面の標高は南側で６．９m、北側で６．８mになる。埋土は暗褐色系の粘質土で、底面にはＳＤ０２同様、径５cmほどの黒色土を持つ小孔が無数に存在した（図版１４）。遺物は埋土から出土している。

出土遺物（第４３図－２６～３０）　２６は複合口縁を持つ壺、２７は土師器甕である。２８・３０は須恵器で、２８は低脚無蓋高坏の脚で大谷６期に位置づけられよう。３０は直口壺。２９は砥石である。

年代・性格　ＳＤ０９の年代は、２８から大谷６期とすることができる。溝の性格は、同じ方向の、同規模の溝であるＳＤ０２と同様、区画溝としての機能を推定できる。

ＳＤ１０（第７・４２図）

規模・性格　ＳＤ０９の東側に存在し、北側長さ１０mと南側長さ５mに別れる。幅はほぼＳＤ０９に同じである。遺物は、図化していないが古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。前後に連続しない、土壙状の溝であるが、時期・性格等はＳＤ０２・０９に準じるものであろう。

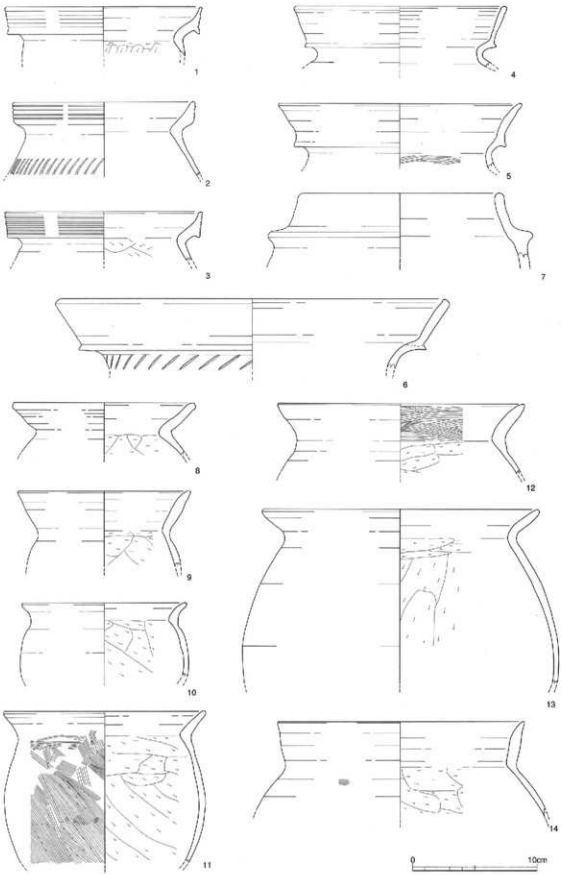
ＳＤ１１（第７・４２図）

規模・構造　東南から北西へ貫流する溝で、規模は底部の幅７０cm程度である。黒褐色系の土が堆積していた。

年代・性格　出土遺物はなく、年代・性格は不明であるが、黒褐色系の堆積土は、古墳時代後期の遺構のそれに類似する。

ＳＤ１２（第７・４２図）

規模・性格　Ａ区南で検出された溝で検出面からの深さは１０cm程度と極めて浅かった。北側はＳ



第45図　古志本郷遺跡A区調査区出土遺物実測図1　(S=1/3)

Ｄ０２に連続し、南側はＣ区ＳＤ２１に連続すると考えられる。ＳＢ１０の西側に連続する柱列に切られている。また、ＳＢ１０付近で東側に丁字に枝状の溝を伸ばしている。この枝溝は、遺構検出面からの深さが浅く、東側４ｍほどしか確認できなかった。

年代・性格　遺物は古墳時代後期の土器小片が出土している。性格もＳＤ０２同様、区画溝を考えることができる。

ＳＤ１３（第７・４２図）

規模・性格　Ａ区西南端で検出された。幅は底部で９０cmあまりを測り、黒灰色系の粘質土が堆積していた。遺物は土器小片が出土している。

ＳＤ１４（第７・４２図）

規模・構造　Ａ区西南端で検出された。南東から北西に貫流する。幅は底部で２０cm。底面の標高は６.７ｍでＣ区ＳＤ２０と連続する可能性がある。遺物は３３の破片が溝全体にわたって分布していた（図版１４）。

出土遺物（第４３図－３１・３２、第４４図３３）　３１・３２は土師器甕で、３２は口縁部が直立し下膨れになるもの。外面に横ハケを施す。３３は須恵器壺である。

年代・性格　出土土器はおおむね古墳時代後期のものとすることができ、溝の存続期間も同様であろう。

Ａ区出土遺物（第４５～５０図）

第４５～５０図に示した遺物は、Ａ区の遺構外から出土した遺物である。遺物の出土土層は表土より下の土層すべてにわたる。土層ごとに分別はせず、一括して示した。なお、図化したのは一部代表的な遺物のみである。

１～３は弥生土器甕である。１は口径１６cmほどの甕で、頸部内面の稜線が鈍く、弥生時代後期でも初頭に属するものと考えられる。２は口径１４cmほどのやや小型の甕で、ハケ状工具によって肩部全周に列点文が施される。全周させられている。いずれも口縁部には擬凹線をめぐらす。３の擬凹線は門生黒谷４類に当たる。草Ⅲ１～３期の土器である。４・５は複合口縁を持つ甕で、５は複合口縁部がやや厚みを持ち外反し、頸部内側にハケを施す点が特徴的である。草田４期の甕である。６は複合口縁を持つ壺で、頸部に綾杉文が描かれる。７は甑型土器。５を除いて、草田６・７期に該当する。

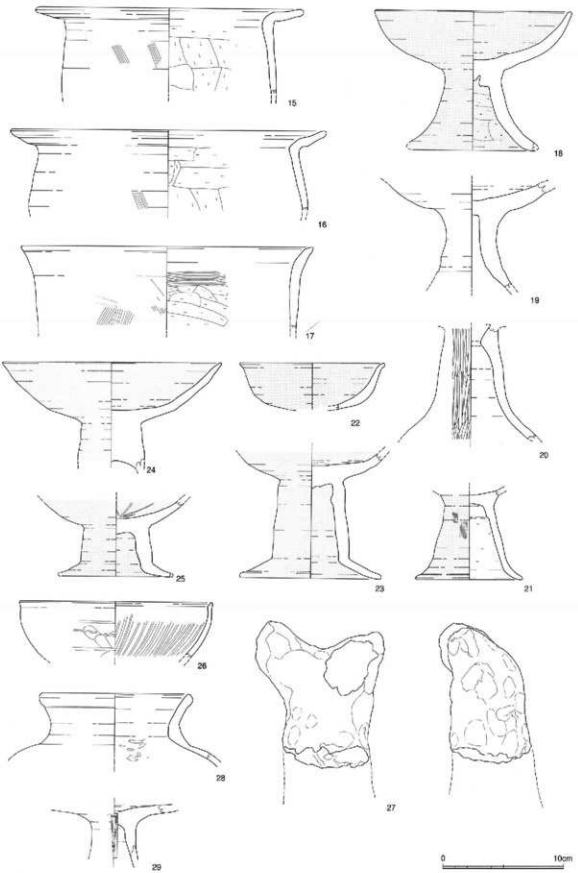
８～１６は土師器甕である。８は口径１５cm程度の単純口縁の甕で、口縁端部がやや肥厚する。９は口径１４cmの甕で、口縁が外反し体部の径に比して口径の大きい壺である。布留系の小型丸底壺、大角山遺跡ＳＩ０２出土の小型丸底鉢等との類似が指摘できる[6]。いずれも古墳時代前期の土器とすることができよう。共に頸部近くの内面は横方向のケズリが施される。外面については横ハケによる調整は見られない。１０～１３はくの字の口縁をもつ土師器甕である。１０・１１が口径１３～１６cmの比較的小型のもので、１２・１３は口径２０cmを越えるものである。１１の外面には縦ハケが、１２の口縁内側には横方向のハケが明瞭に残る。体部内面はいずれもケズリを施すが、１３は頸部が横方向のケズリ、体部が縦方向のケズリとなる。１４は、口縁が直立する甕。１５・

１６は口縁部が外反し水平に近くなるもので、共に体部内面は縦方向のケズリとし、１６は頸部のみ横ケズリである。外面には縦方向のハケが見られる。１１～１４は古墳時代後期、１５・１６は奈良・平安時代のものになろう。１７は甑で、頸部内面に横ハケが施される。

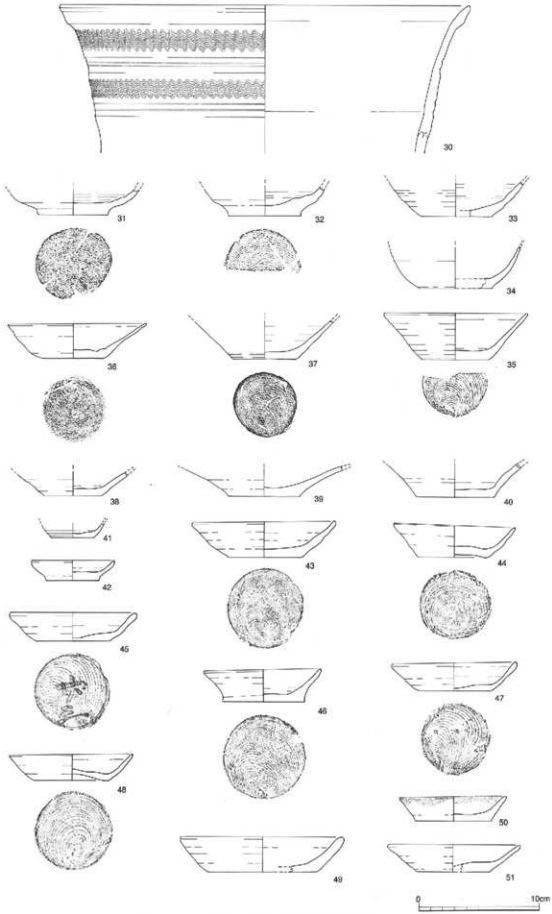
１８～２５は土師器高坏である。１８は内外面赤彩で、松山接続法aが認められる。１９は脚部有段高坏である。２０は円盤充填による接続法が採られ、外面には顕著な縦方向のミガキが施される。２１～２５はいずれも赤彩の高坏で、脚の長いもの（２１・２３・２４）、脚の低いもの（２５）、脚部内面に赤彩するもの（２３・２５）、しないものの別がある（２１・２４）。松山接続法γで接続されている。２６は内面に暗文のある碗で、口縁部内側に段を持つ。外面は横方向にミガキが施される精緻な赤褐色の胎土を持つ。２７は上製支脚で２本の突起を持ち、中央部に貫通する穴の痕跡が確認できる。２８は須恵器甕口縁部である。２９は須恵器長脚高坏で、上段三方向の透かしが残る。３０は須恵器甕で沈線と２条の波状文を口縁部に廻らせる。

３１～５１は土師質土器である。３１・３２は茶褐色の胎土を持ち、強いナデ痕跡を残す。底部も円形をなさず、全体に大味な作りで、体部と底部の間になでによる抉り取りがあり。土師質土器Ⅰ期に当たる。３３・３４は、乳褐色の胎土を持ち、抉り取りが見られず、内湾し立ち上がるものである。土師質土器Ⅲ期に当たる。３５～４０は口縁部が外反するものである。３５・３６は立ち上がり直後にやや内湾を残すもので土師質土器Ⅳ期古段階、３７～４０は上半部が不明であるが、外反が顕著であることから土師質土器Ⅳ期でも新しい段階に位置づけられる。４１・４２は土師質土器皿で、４２は茶褐色の胎土を持ち土師質土器Ⅰ期、４１は内湾する形状から土師質土器Ⅲ期に収まるものと考えられる。４３・４４は土師質土器皿で器壁が厚く、器高は３cm程度と低い。土師質土器Ⅴ期に相当する。４５～５１も土師質土器皿で、いずれもの底径と口径の差が少ない。４６が外反して立ち上がるタイプである。土師質土器Ⅵ期のものと思われる。以上、土師質土器の底部調整は４９・５０が静止糸切りのほかは、すべて回転糸切りである。

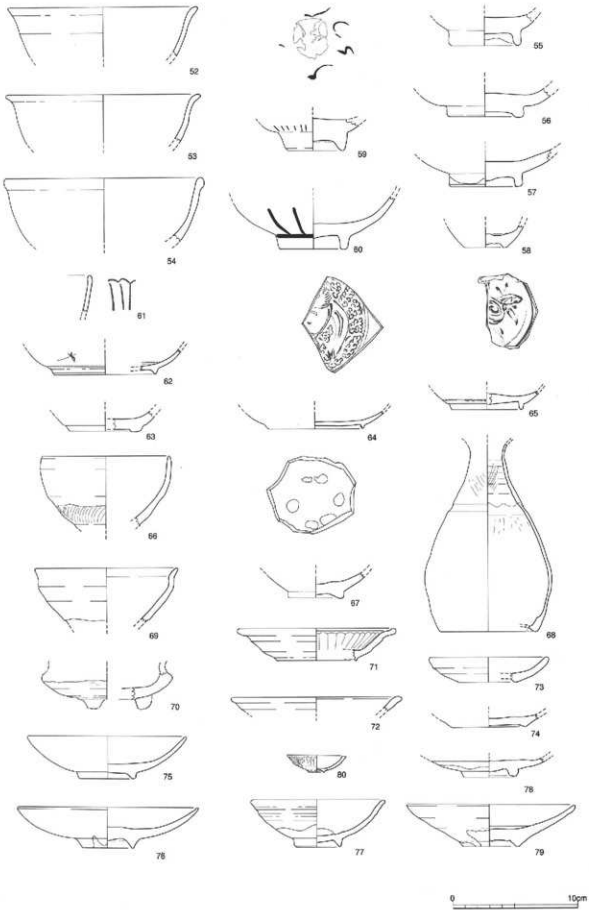
５２～６１は青磁である。５２～５４は端部が外反する碗の口縁部である。いずれも精緻な灰色の胎土を持ち、内外面に淡緑色の釉がかけられている。５５～５７は碗の底部である。いずれも内面施釉、畳付・高台内部は施釉せず露胎とする。５７は内面に印判文があるが薄くて形状不明である。５８は蓑笥底で畳付の釉は剥ぎとられ、砂が付着する。高台内は無釉であるが一部に釉がかかる。５９～６１も青磁碗で、蓮弁文を施すもの。５９は底部中央に印判文、外側にヘラによる雲文を持つ。６１は線描の蓮弁文を持つ。６２・６４・６５は青花の皿である。６２は、内面・外面に界線２条を持ち、体部にも不明の絵が描かれ、底部内面も施釉される。６４は外面に界線１条、見込には竜が描かれる。６５は外面に界線１条、見込には植物を図案化したものが描かれる。８７（第４９図）も青花碗で、内面に界線２条、外面に界線１条と唐草文を配する。６６は天目碗である。灰色の胎土を持ち、内面・外面上半部は黒色にやや茶色みがかった釉が施される。鬼板は露胎である。６７は李朝陶器の碗で、暗灰褐色の釉高台内も含め前面に施釉され、黒斑・白斑が混じる。見込みと畳付には砂目が残る。年代は１６世紀ごろのものか。６８は陶器の徳利型瓶である。外面は暗茶褐色釉が施され、胎土は大変精良緻密で茶褐色を呈している。肩部に沈線を持ち、底部は上げ底、頸部はしぼられて内面に皺が生じている。また、内面には青海波文の叩き痕跡が残っている。いわゆる「南蛮系」の壺といわれるものに当たり、富田川河床遺跡ＳＢ３１・ＳＫ１８４・ＳＫ１９４・ＳＥ０２４等から出土している。[5]



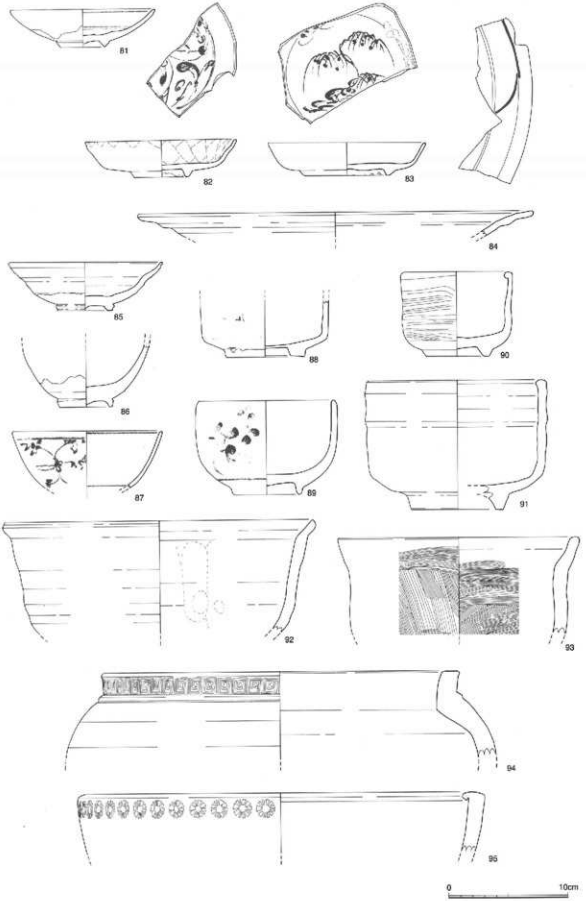
第46図　古志本郷遺跡A区調査区出土遺物実測図2　(S=1/3)



第47図　古志本郷遺跡A区調査区出土遺物実測図3　(S=1／3)



第48図　古志本郷遺跡A区調査区出土遺物実測図4　(S=1/3)



第49図　古志本郷遺跡A区調査区出土遺物実測図5　(S=1/3)

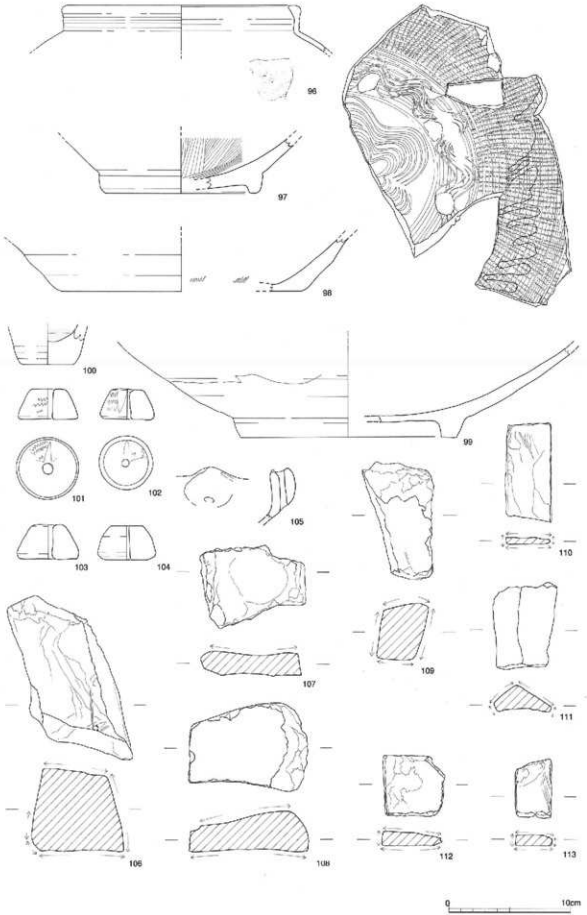
６３・６９～７４は瀬戸・美濃系陶器である。６３は平碗で内面は黒緑色で施釉され、外面は露胎である。６９は天目碗で、口縁部にくびれを持つ。釉は茶褐色で、鬼板部分には鉄化粧が施される。７０は３足の袴腰香炉で底部回転糸切り、外面上半部のみ緑灰色釉が施され、内面には施釉しない。６９は古瀬戸後期のものであろう。７１は折縁の菊皿で、大窯Ⅲ期の新段階に当たる。７２は端反皿、７３・７４は見込みの釉が削られる蛇ノ目釉剥ぎが行われる。８５は縁に段を持ち、外面の一部に淡緑色釉が施される。共に１７世紀後半から１８世紀前半の内野山窯の陶器と推定される。７６・７９は乳清白色が施釉される磁器で波佐見産のものと思われる。７７は暗灰色の胎土を持ち、緑灰色釉が施され、見込みに蛇ノ目を持つ。１７世紀前半に位置づけられよう。８４は茶褐色の釉が施され、黒褐色の鉄絵が描かれるいわゆる絵唐津大皿である。８６は陶器碗で、上部は黒茶色釉が施され、下半は黒赤色釉による化粧が行われる。８２・８３は磁器の皿で、８８・８９は陶胎染付である。９０・９１は陶器碗である。９２・９３は瓦質の鉢で、９２は暗灰色の胎土を持ち、９３は茶褐色の胎土で、内側に ハケ目を持つ。９４・９５は火鉢と考えられる瓦質の鉢で、９４は口縁部に雷文、９５は菊花文のスタンプが押印されている。９６は肥前系陶器甕で体部内面に青海波文の叩き痕がある。このことから９６は１７世紀前半代のものもと考えられる。９７は肥前系の擂鉢で削り出し高台、赤茶褐色の釉が施される。９８は備前の擂鉢である。９９は底径１８cm、口径は３６cmを上回る肥前系陶器の鉢で、いわゆる唐津二彩大鉢である。内面には白色の化粧土が施され、その上に淡緑色、淡茶色の釉が施され、さらにその上に全体に透明釉が施される。１７世紀代の年代観が与えられる。

１００は青灰色の胎土を持ち、内面に鉱滓の付着する土器で、坩堝と推定される。

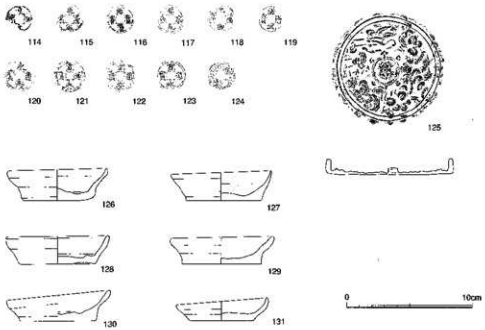
１０１～１０４は石製紡錘車で１０１・１０２は底面に☆と鋸歯文、側面に鋸歯文を持つ。いずれも半分が残存し、重さは１０１が２３ｇ、１０３が２１.３ｇ、１０４が１９.８ｇである。１０５は縄文土器双耳壺である。本報告書で扱う調査区では、Ｃ区で弥生前期の土器が１点出土（第１５５図－１６）しているほか、出土している土器はすべて弥生時代中期以降であり、縄文土器はこの一点しかない。１０５は摩耗しており、神戸川上流部からの流入である可能性もある。

１０５～１１２は砥石である。１０６は現存長１２cm、断面は上幅５cm下幅８cm、高さ７cmの台形をなし、４面の砥面を持つ大型の砥石である。１０７は現存長６cm、幅８cm厚さ２cmを測る幅広の砥石である。ただし、砥面は図上上面１面のみであった。１０８は幅１０cm、長さ５～７cm、厚さ最大３cmを測る大型の砥石で、上下２面が研面として利用されていた。１０９は現存長１０cm、断面方形をなし、４方向に研面を持つ。１１０は現存長７cm厚さ０.７cm程度の薄い砥石で表裏２面が研磨に使用されている。１１１は現存長６cm、断面三角形をなし、３面に研面が認められる。１１２は現存長５cmで方形をなし、厚さは２cmで、表裏２面が利用される。１１３は現存長５cm厚さ１.７cmで、表裏２面のほか欠損しない２面も研磨に利用されている。１１４～１２４は貨幣である。１１４は嘉祐元宝、１１５・１１６は元豊通宝の可能性がある。１１７は聖宋元宝である。１１９は洪武通宝、１２０は永楽通宝、１２１～１２３は新寛永通宝である。

１２５は直角式厚縁を持つ和鏡で、裏面に松と鶴の肉彫がある。鈕の部分は亀をかたどっており、両側から穿孔されていた。また二重の圏線を持つ。同様の鏡は富田川河床遺跡第２遺構面から２面出土しており、１２５も１７世紀のものと思われる。



第50図　古志本郷遺跡A区出土遺物実測図6　(S=1/3)



第51図　古志本郷遺跡A区調査区出土遺物実測図7　(S=1／3)

１２６～１３１[7]は第７図じ地点からまとまって出土した土師質土器である。いずれも回転糸切りで、土師質土器Ⅴ・Ⅵ期に該当すると考えられるが、口縁端部が先細りになるもの（１２７）、口縁の中間で一旦くびれる形態のもの（１２６・１３０）等のバリエーションがある。出土状況から一括して廃棄されたものと思われ、中には寛永通宝を置かれたものもあった（図版２７参照）。

第52図　古志本郷遺跡B区遺構図

第2節　B区の調査

調査区の立地　B区はA区の南側にあたり、現神戸川流路より西側に１００ｍ程はなれた地点である。調査前の状況は水田と宅地で、現表土の標高は水田部で８．２ｍ前後である。

基本層序（第５３図）　表土第１層から第５層まで暗灰色系の土であり、これらの埋土からは、弥生から近世までの遺物が時代の前後なく出土している。すなわち、B区の土層はすべて近世以降のものであり、A区のように部分的に古墳時代の遺物包含層が残るような地点は確認できなかった。したがって、遺構の検出もすべて地山灰褐色砂上で行うことになった。地山灰褐色砂の標高は、北側７．０ｍで、南に行くに従い高くなり、東南隅で７．３ｍであった。また、A区北方で検出した落ち込み部分は、本調査区では検出できなかった検出した遺構は井戸跡２基、土壙５基のほか、溝・ピット多数であった。以下、井戸、土壙、溝の順番で概要を述べる。

A、井戸

ＳＥ０３（第５４図）

規模・構造　Ｂ区東南隅に位置する。掘方は上端で直径２ｍ、底面で井側と同じ直径７０cm程度である。断面は半円形をなすが、途中に段を持つ。花壇はほぼ桶の径と同じであるので、上段までを一端掘削した後、下段を掘り込み井側を埋設したものと思われる。埋土はいずれも砂質土であり、粘質土がみられないことから、井戸廃棄時に埋められた可能性が高い。井側は長さ９０cm、幅１０cm程度の柾目材２２枚で構成され、東側の一枚のみが幅５cm程度と極端に幅が狭い。外側に竹タガ３段を持つ。井筒については桶の転用の可能性もあるが下端内側に底板のアタリ、目釘穴がまったく見られないことから、最初から井側として製作された可能性がある。なお、調査時には井側の板は埋由は不明であるがすべて黄褐色化していた。

出土遺物・年代　遺物は小片のみで、年代を判断できるものはなかった。

ＳＥ０４　（第５５図）

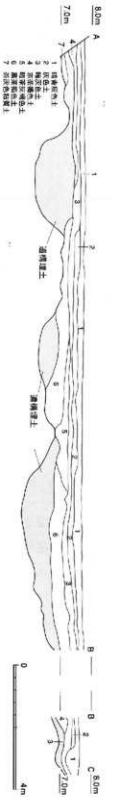
規模・構造　Ｂ区南側に位置する。井戸は井筒をくり抜きとするものから、石組するものに作り替えられたようである。くり抜き井戸の掘り方は、南北５ｍ東西４ｍの大きさで、東北隅がへこむ楕円形をなし、深さは１ｍほどである。井戸底部の標高６.４ｍと高く、調査時にも湧水は人力で汲み出す程度であった。井筒は直径７０cm程度の木材をくり抜いたものであるが、腐食が激しく、全周は残存していなかった。掘り方の平面の大きさに比して、浅く、井筒が小さい。石組井戸は、一旦、くり抜き井戸を埋めた後、ほぼ同じ場所に再度掘られたもので、第５５図４～６層が掘り方埋土、１～３層が同埋土である。石組は南側がよく残存し、北側は石自体が存在しない状態で、おそらく井戸の廃棄時に抜き取られたものと考えられる。なお、井戸の掘り方の北西にそれらの石の一部を集めたと思われる部分がある。

出土遺物・年代　出土遺物には第５６図１・２の土師質土器がある。１はやや内湾する立ち上がりを持ち、２は直線的な立ち上がりである。共に淡褐色の胎土を持ち、土師質土器Ⅲ・Ⅳ期に相当するものと考えられる。いずれも底部は回転糸切りである。遺物の出土地点を正確に押さえなかったためＳＥ０４のおおむねの時期がこの時期に当たろう。

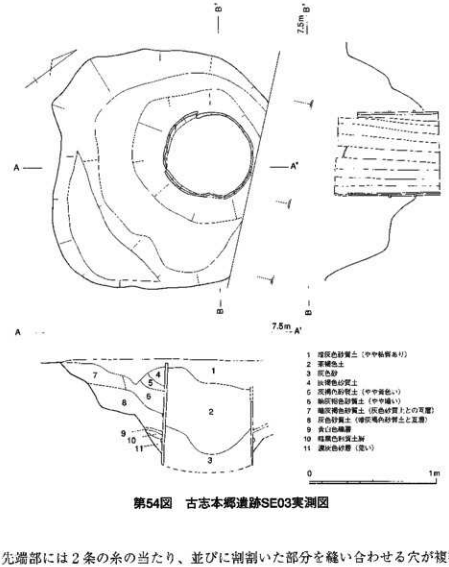
B、土壙

ＳＫ１５（第５６図）

規模・構造　Ｂ区中央に位置する。トレンチ調査によって東側半分が削られており、南側も下水管が埋設されており調査不能であった。長辺１.８ｍ、深さ



第53図　古志本郷遺跡B区調査区域図



第54図　古志本郷遺跡SE03実測図

0.5mの不整形の土壙で、埋土中には板状の木製品が多数存在した。埋土は黒褐色系の土であった。

出土遺物（第57図1・2）　板状の木製品を除き、加工の程度が高い木製品、墨書のある木製品のみを掲載する。1はハケの軸と思われる木製品で、半円状の部分と把手からなる。半円状の部分は把手状の部分のあるのと反対の側（以下先端側）から均等に2つに割られている。また、先端部には2条の糸の当たり、並びに割いた部分を縫い合わせる穴が複数開けられていた。把手部分には紐等を通したと考えられる穿孔が表面から裏面に対して開けられている。全体に黒色顔料が塗布されている。柾目材である。2は、厚さ5mm、柾目材の木片で表面（仮）に刻書で「筆入」、裏面（仮）に墨書で「筆入」と記されていた。表面刻書は一部欠化し左、下は欠損している。

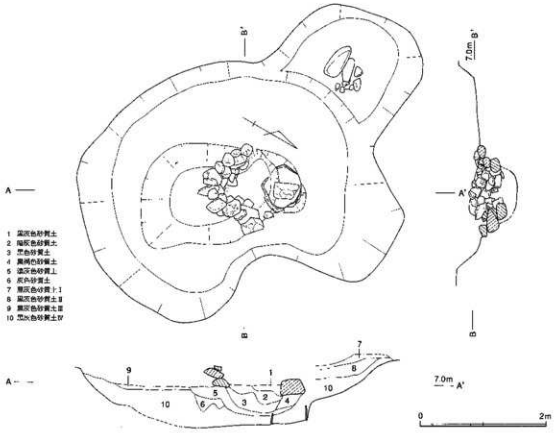
年代・性格　遺物は木製品ばかりで、土器はなく、年代は不明であるが近世より前ということはないであろう。廃棄土壙と考えられる。

SK16（第56図）

規模・構造　B区中央東寄りに位置する。南側は下水管により調査不能であった。上端で直径1.3mほどで深さは40cm程度である。中には底板5枚からなる桶が掘設されており、桶の中には径20cm程度の石が2個置かれていた。埋土は掘り方は砂質土で、埋土は黒色系の粘質土であった。側板は土圧により内傾しており、桶内部が空間として確保されていたか、埋土が押し固められていなかったことが想像される。

年代・性格　遺物はないが埋土から近世以降のものであろう。肥桶と考えられる。

SK17（第56図）



第55図　古志本郷遺跡SE04実測図

規模・構造　B区北西に位置する。南北方向の溝状の形態をなすが、北側は別な新しいピットに切られ、南側は調査区外に続くため、溝であるかは不明で仮に土壙とした。

土層堆積状況　土層はレンズ状に堆積する黒褐色系の土で、他の近世以降の遺構とは一目見て異なっていた。

出土遺物（第５７図３・４）　３は土師器甕で、外面に横ハケが施される。４は土師器甑で、中間は欠落しているている。上部内面は横方向のケズリ、下は縦方向のケズリで、下端部には穿孔がある。外面は横ハケ。口縁部は外反する。出土遺物にはこのほかに須恵器小片、珪化木等がある。

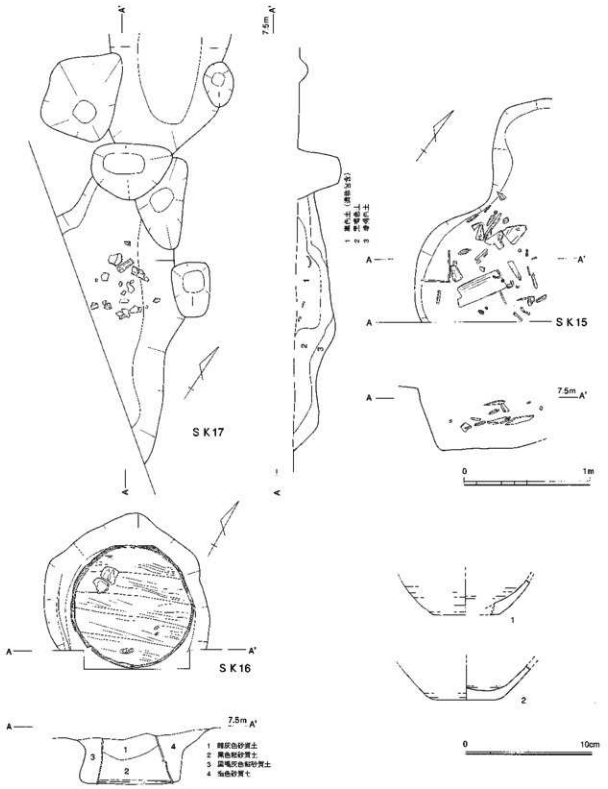
年代・性格　出土遺物から、ＳＫ１７の時期は古墳時代後期になろう。

ＳＫ１８（第５７図）

規模・構造　B区北側中央に位置する。上端の直径約２ｍで底部は径１.４ｍの円形で、深さ７０cmである。壁面は垂直に近い形で立ち上がり、断面は方形をなす。なお、ＳＫ１８のある調査区の地山は褐色のよくしまる砂質土である。

土層堆積状況　埋土は精緻な黒茶褐色系の砂質土で、他のピット群は明らかに異なっていた。断面は上層・下層に別れるのみで、木棺等の痕跡はなかった。

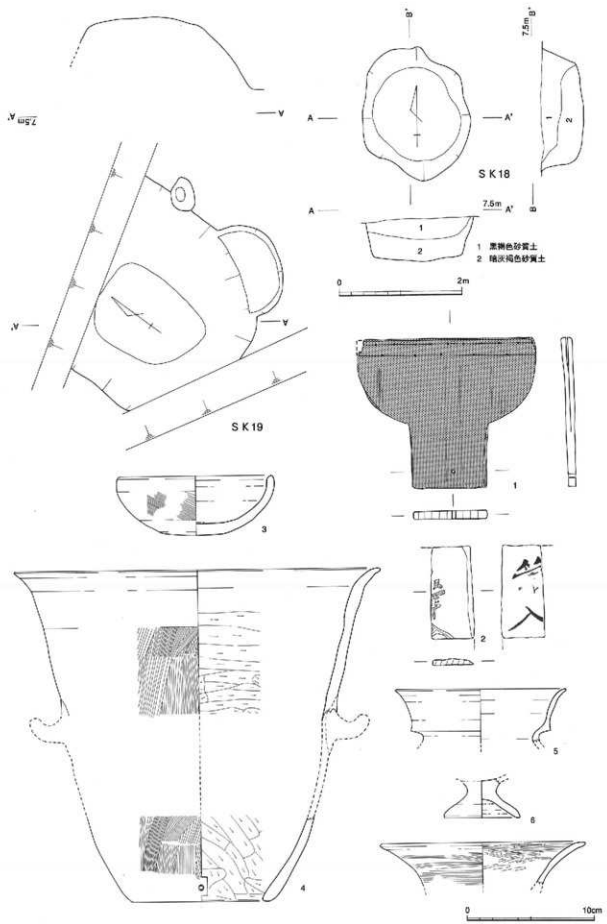
出土遺物（第５７図５～７）　遺物はすべて土壙上面から出土している。５は複合口縁を持つ甕で口径は復元ながら１４cmと小型に属する。口縁部は外反し面を持たない。６は低脚坏の脚部である。



第56図　古志本郷遺跡SK15～19実測図1

比較的高さがある。7は鼓型器台の受部で、端部にむけて強く外反する。内面は端部付近に横ハケ、その下に横方向のミガキを施し、外面は横ハケを施す。5～7はいずれも草田4期に相当するものと思われる。

年代・性格　出土遺物はいずれも草田4期に当たり、土壙を埋めた後に何らかの理由で土壙状に置



第57図　古志本郷遺跡SK15～19実測図2・出土遺物実測図1

かれたとみられる。遺構の性格として土壙墓が想起されるが、土壙の平面形状が円形であること、木棺の痕跡が見られなかったことから、現状では確定は難しい。

ＳＫ１９（第５７図）

規模・構造　Ｂ区北西端部に位置する。両端が調査区外に伸びることから正確な形状は不明であるが、底部は擂鉢状で、直径３ｍ、深さ１.３ｍ前後の円形の土壙と推定される。底部の標高は６.０ｍである。埋土は黒褐色系の粘質土であった。なお、この地点の地山は灰色の粘質土で、ＳＫ１９のような深い遺構も比較的容易に掘ることができる。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明であるがＣ区上層以降に連続する溝（第５２・６４図参照。番号はつけていない）に切られていることから、１８世紀以前であることは間違いなく、おそらく中世のものであろう。素掘りの井戸ではないかと考えられる。

Ｃ、大溝

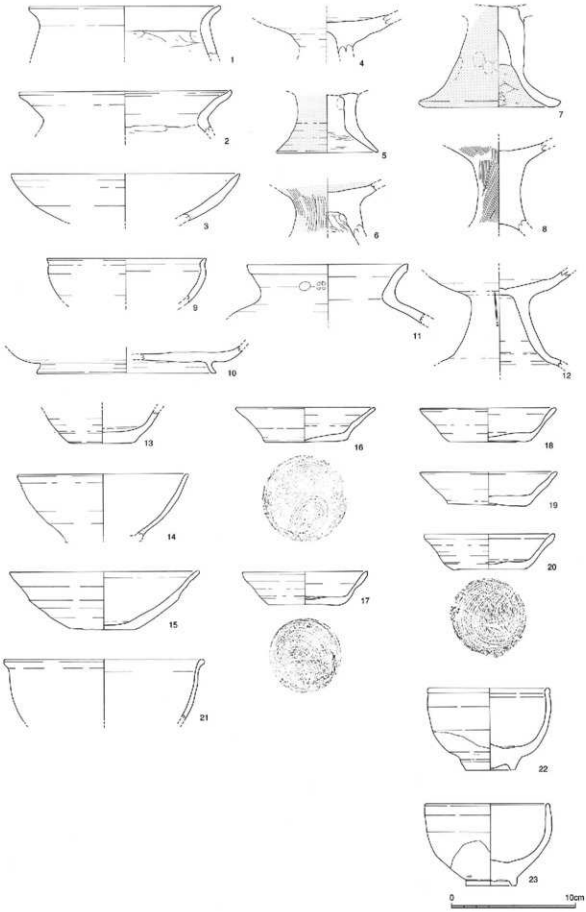
ＳＤ１５（第５２図・５８図）

規模・形態　Ｂ区北側をＣ区に向かって横切る大型の溝であり、Ｃ区でも一部検出している。以下、ＳＤ１５についてはＣ区で検出した部分、そこらの出土遺物をまとめて記述する。ＳＤ１５の規模は上幅約４ｍ、深さ１.２ｍの規模を持ち、南西から北東に向かって貫流する。断面は逆台形に近い逆三角形で、Ｃ区で検出された部分では途中に段を持っている。底部の標高は東側の一番低い部分で、Ａ区東側落ち込み部と同じ５.８ｍほどである。なお、溝の北側には幅２～３ｍにわたって地山が３０cmほど低い部分（北側低地）が存在し、次に述べる第１層が堆積する。

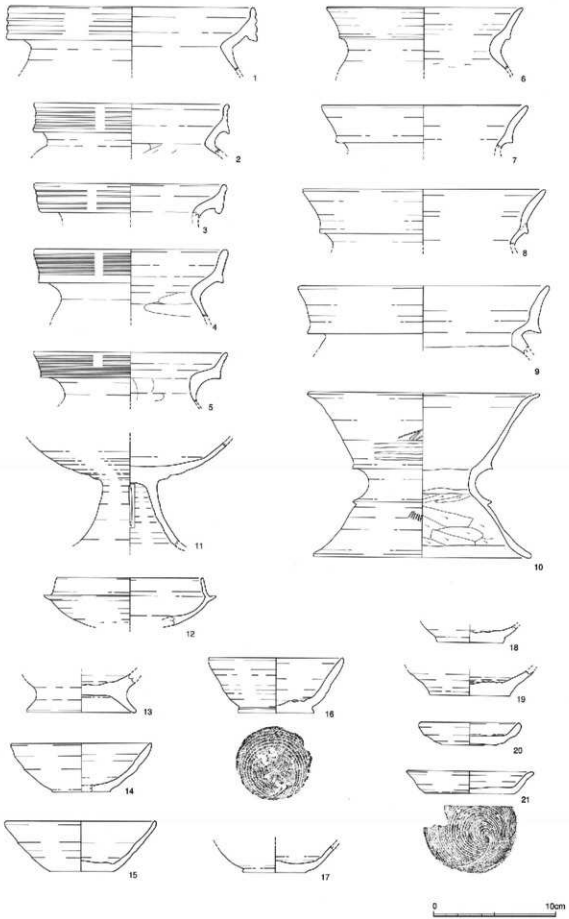
土層堆積状況（第５８図）　上層第１層暗灰褐色粘砂質土は溝だけでなく、北側低地にも堆積しており、溝が埋没し機能を停止した後も、この部分がくぼ地状になりそこに堆積したものと思われる。暗灰色系で、近世の埋土に特徴的にみられる土である。２層は茶褐色粘質土で、この部分が溝が徐々に埋まっていった部分に相当し、分別の困難な細かいラミナをなしていた。３、４層は砂質土で、壁面が崩れたものであろう。５～６層は地山そのものとも言える灰褐色砂を多量に含み、流水によって南北に堆積したものである。全体として、溝が掘削された初期には溝の断面は逆三角形で、流水があり、その過程で底面が上昇、やがて有機物が堆積、その合間に流水があるという状況を経て埋没、浅い溝的状況になったものと思われる。

出土遺物（第５９図）　出土遺物は、大きく第１層からのもの（１６～２０、２２・２３）とそれ以下の土層からのもの（１～１５、２１）に別れる。なお１６・１７・２２・２３は近接して一括的状況で出土している。１～８は土師器である。１・２は甕、２は口縁端部が肥厚する古墳時代前期のものであろう。３～８は高坏で、

第58図　古志本郷遺跡SD15土層図



第59図　古志本郷遺跡SD15出土遺物実測図



第60図　古志本郷遺跡B区調査区出土遺物実測図1

3は立ち上がりや胎土から脚部有段高坏の坏部と推定される。4～7は赤彩の高坏で、松山接続法γで坏と脚を接続する。7の小脚部内面も赤彩する、8は脚部を細くしぼったもので顕著な縦ハケが施される。

9～12は須恵器である。9は口縁部をくびれさせる須恵器坏、10は高台付皿である。高広ⅢB・ⅣA期[8]に相当する。11は甕で頸部に豆粒状の粘土灰が添付され、隣にはスタンプが押される。12は低脚無蓋高坏で脚部が八の字状に広がる。大谷出雲6期以降のものであろう。

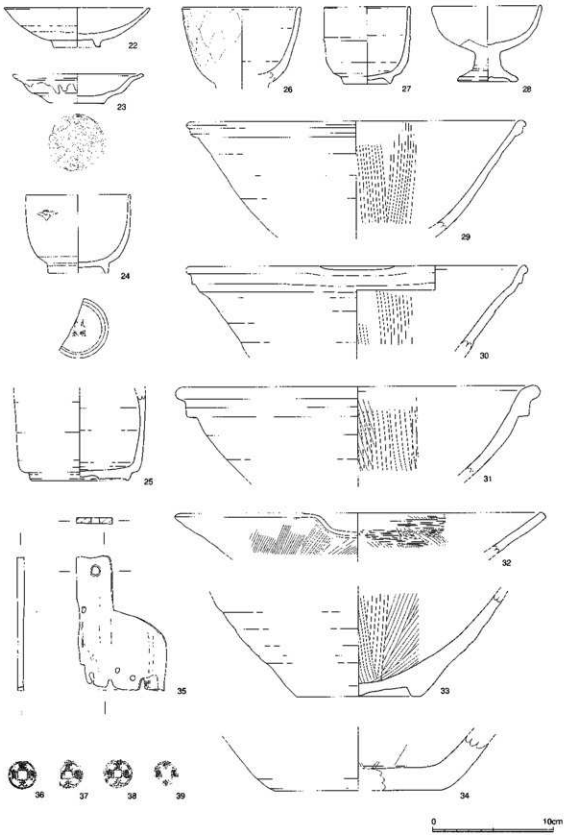
13～20は土師質土器である。14は口径14cm、15は同15.8cmを測る大型の坏で、高さも15で5cmと高く、古志本郷遺跡では他に類例のないものである。14は底部回転糸切りで、法量や体部下部がくびれている点等、西石橋遺跡土壙墓出土の土師質土器坏に類似する。15は陽徳遺跡ＳＫ06出土土師質土器坏に類似する[9][10]。いずれも八峠Ⅱ期に該当する[11]。16～20は褐色の胎土を持ち、底部回転糸切りである。C区部分で出土した（図版53）。土師質土器Ⅴ期に相当する。21は口縁部の外反する青磁碗である。22・23は肥前系陶器碗である。赤褐色の胎土に乳灰色の釉を施す。高台は削り出しで三日月高台である（図版53）。口縁部に溝縁（22）、若干のへこみ（23）を持つ。ともに17世紀前半のものであろう。

年代・性格　下層の遺物は古墳時代～12・13世紀頃までのものを含むが、出土層位と遺物の年代に相関関係は見いだし得なかった。上層の遺物は土師質土器Ⅴ期で、肥前系陶器碗の16世紀末～17初頭とも共通する。ＳＤ15の掘削年代は明らかでないが、当初は流水があり、中世後期まで機能し、近世に入る前に完全に埋没、くぼ地的状況になったのであろう。

Ｂ区出土遺物（第60～61図）

第60～61図に示した遺物は、Ｂ区の遺構外から出土した遺物である。遺物の出土土層は表土より下の土層すべてにわたる。土層ごとに分別はせず、一括して示した。Ａ区同様、図化したのは一部代表的な遺物のみである。

1～5は弥生土器である。いずれも口縁部に擬凹線を廻らす。4・5は門生黒谷4類の擬凹線である。草田1～3期に相当する。6～9は複合口縁をもつ甕である。すべて外反し、口縁部に面を持たないもので、草田4期に相当する。なお、9は10と同所で出土した。10は鼓型器台で、第52図Ⅴ地点から1／2程度残存した状況で出土した（図版18）。受部に若干のミガキが見られ、台部にもわずかばかりの列点文が施される。Ⅴ地点はＳＫ18にも近く、直接と10と関連する遺構はなかったが、ＳＫ18同様の褐色土を埋土とするピットが集中していた。11は須恵器低脚高坏で大谷出雲Ａ5類、12は坏身で同Ａ2ｂ類と考えられる。13～21は土師質土器である。12は高台を持つもので、今回の調査では各所から少量出土するが、遺構に伴う完形のものはない。14・15は褐色の胎土をもつ坏で土師質土器Ⅲ期に属する。16・18～20は茶褐色の胎土を持ち、強くナデられた坏・皿で土師質土器Ⅰ期のものである。22～28は肥前系陶磁器である。22は緑灰色の施釉、蛇ノ目見込釉ハギの皿で、内野山産か。23は砂目溝縁皿で、底部は回転糸切りである。24は磁器碗で、底部に崩れた「大明年製」が染付される。25は高台蛇ノ目釉ハギの青磁香炉である。釉ハギ部は茶色に化粧される。明代青磁模倣の肥前系の青磁である。26は網状の模様を持つ染付碗で17世紀前半ものであろう。27は蓋付き碗、28は白濁した釉が坏部に施される高坏である。29・30・33は黄褐色の胎土に茶褐色の施釉を行う肥前系の擂鉢で、口



第61図　古志本郷遺B区調査区出土遺物実測図2

縁部に縁を持つ。３３は碁笥底で、２３と共に１７世紀前半のものであろう。３１は暗灰色の胎土に暗紫色の釉を施す。３２、３４は瓦質の鉢である。３５は第５７図１同様のハケ状工具である。３６～３９は貨幣で３６が照寧元宝、３７～３９が寛永通宝である。寛永通宝はいずれも新寛永である。このほか、金属製品として煙管、鍔鉄等が出土している（図版９６）。

第3節　C区の調査

調査区の立地（第62図）　C区はB区とD区に挟まれた部分で、長さ90m、最大幅40mの五角形をした調査区である。表土の標高は東側で8.0m、西側で8.5mを測り、西高東低の地形である。調査前には水田への用排水路が存在したが、いずれも南西から北東に流れる水路であった。ただし、B区との境付近は宅地として造成されていたため、周辺より70cm程高く盛土がなされていた。本調査区は民有地と道路に囲まれて居るため、排土を搬出することができず、また、付近の水田への用水路の付け替えが必要であったこと、用地未買収地があったことから足掛け2年、計4回に分けて発掘調査を実施することになった。そのため、一部遺構については連続する部分の調査が不十分に終わっている部分もあることを御了承頂きたい。

基本層序（第63図）　地山は灰褐色砂、灰色粘質土でところによって異なる。現表土同様、西高東低である。中でも、E～F間、H地点付近で変化が激しく、20～30cmの段をなしている。以後、H地点より東をC区東部分、同じく西側をC区西部分とする。なお、第63図では局所的な土層はアルファベットで記している。まず、C区東側の基本層序であるがであるが、A・B区同様に表土の茶褐色土を除くと、暗青灰色系の土であり近世の堆積・撹乱が想定される。実際に表土から地山直上まで遺物包含層であり、古代～近世の遺物が出土している。さらにH地点を見ると、上層遺構の杭（第64図）が上から打たれる部分に黒褐色土の畦畔と推定される土層がみえ（第11層）これが東部分の6層以下の上に堆積する。杭の打ち込まれた位置は確認できないが、第11層はこの杭と何らか関係があったと見るのが妥当である。そして、上層遺構の杭は、第3図明治6年の道、水田畦畔に一致し、19世紀後半前後のもとすると、6層以下が形成された下限は19世紀前半頃までとなる。また、再下層第12層はB区第3層に相当すると考えられ、同第3層は17世紀初頭に埋没したSD15の上に堆積するので、東部分の包含層の大部分第6～12層は17・18世紀を中心に形成されたものと思われる。

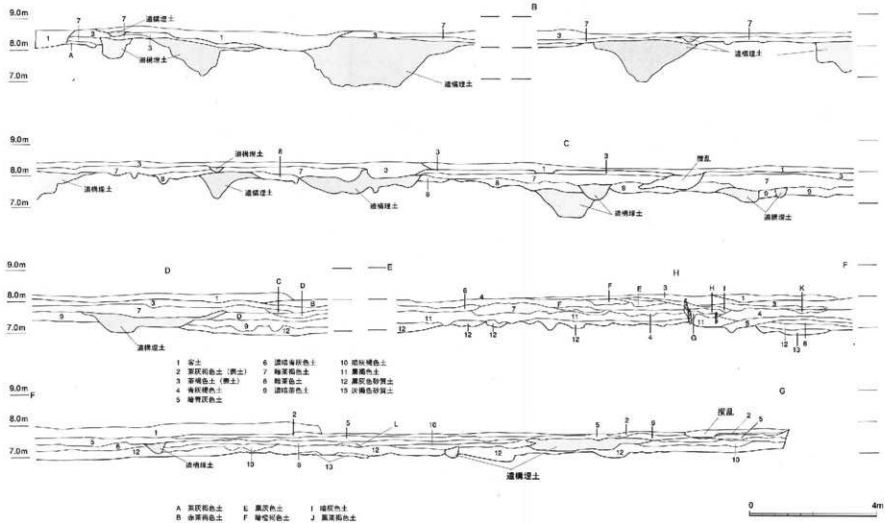
西側部分も表土から地山直上まで古代～近世の遺物が出土するが、堆積状況はやや異なる。すなわち再下層に第8・9層のような茶褐色系の土があり、この部分からは、本報告書では決して多いとは言えない奈良・平安時代の遺物がまとまって出土しており、他の遺構との切り合い関係からも、中世以前の堆積土であることが推定される。

このように、C区では、遺物包含層の浅い西部分に若干古代の包含層が残っているという状況であった。遺構の検出は東西両部分で上層の青灰色系の土（第6・7層）を取り払った時点と、地山面で2回行い、他の調査区との検出状況の整合性から、前者を上層遺構として区別する事とする。以下、上層遺構、掘立柱建物、構列、石組遺構、土師質土器焼成遺構、井戸、土壙、溝の順に概要を述べたい。

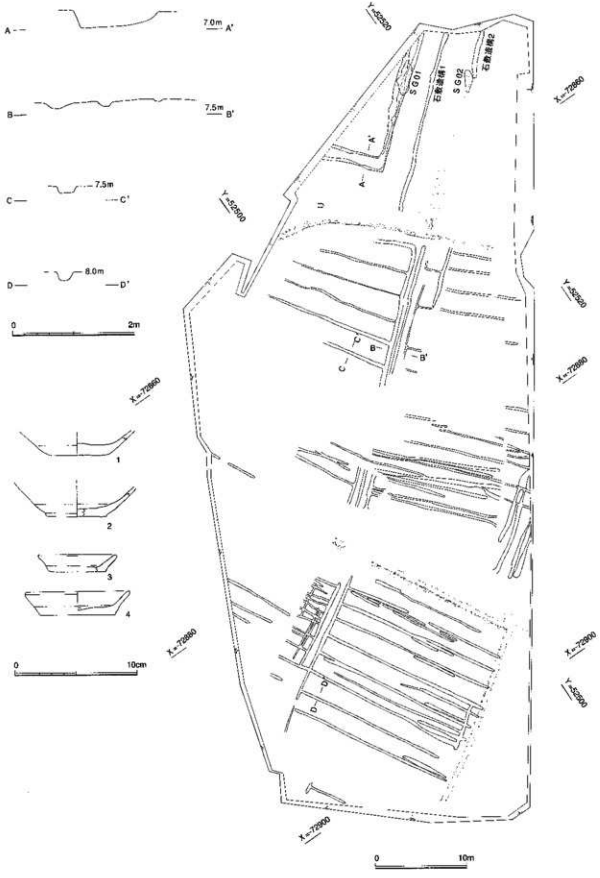
A、C区上層遺構（第64図）

C区上層遺構は、前述のように6・7層を取り払った時点で検出されている。これは、調査前が水田であったこと、遺構面が表土からある程度の深さがあったこと等に起因するであろう。検出した遺構は溝状遺構・杭列状遺構で、石敷状遺構で、杭列状遺構については第64図で点によって図示した。もっとも多い溝状遺構は幅20～30cm、深さ20cmほどの溝が連続する形で検出され、

第62図　古志本郷遺跡C区遺構図　(S=1／300)



第63図　古志本郷遺跡C区調査区土層図（S=1/120）

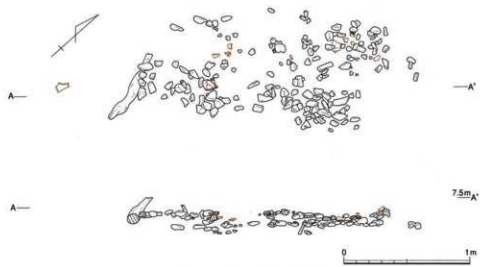


第64図 古志本郷遺跡C区上層遺構図・溝群土層図・出土遺物実測図 (遺構 S=1／400 土層S=1／60 遺物S=1／3)

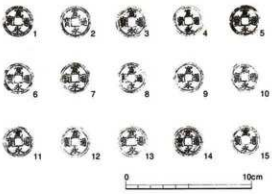
第65図　古志本郷遺跡敷石構1実測図　(S=1／30)

暗青灰色土が堆積していた。杭状遺構は調査前の地割にほぼ添う形で検出されるが、東部分の第６層以下の遺物包含層の堆積が１８世紀頃までと考えられると、これらの溝・杭は１８世紀頃～近代までの土地利用に関わるものではないかと推測される。なお、東寄りには上述の溝群と異なる、幅１.５ｍの溝が南西－北東を指して検出され、西端で北西に曲がっていた。この周辺では石敷遺構２基が検出が検出され、溝状遺構はまったく検出されず、この部分は溝状遺構のある部分と土地利用が異なっていた可能性もある。

出土遺物（第６３図１～４）　溝状遺構からは土師質土器が若干出土した。３・４は大型の皿と小



第66図　古志本郷遺跡敷石遺構2実測図　(S=1/30)



第67図　C区出土曲物に伴う貯蔵　(S=1/3)

型の皿で、土師質土器Ⅵ期以降のものである。

石敷遺構1

規模・構造　南北4m、東西1mに、5cm程度の石が多数散布されていた。石敷の厚さは深い所でも20cm程度で、集積というより石敷というべきものである。ただし、石の中でも大きいものは径20cm前後のものまで含んでおり、まったく均質な石群ではない。集積の位置は第64図で示す幅広の溝の上に当たり、この溝が道路遺構であった可能性の一つの根拠となるであろう。

出土遺物　出土遺物は若干の土師質土器、陶磁器が石敷に混じって出土した。陶磁器には図化していないが肥前系の青磁があり、本遺構を近世のものと認識することができる。

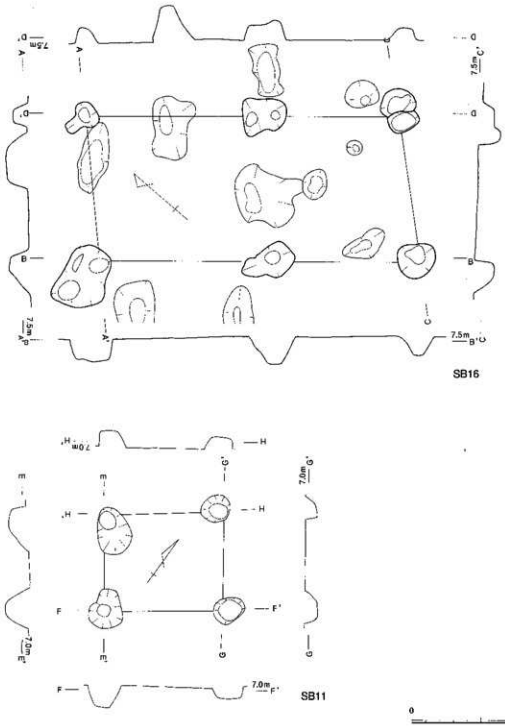
年代・性格　年代は出土遺物から近世であることは明らかで、上層遺構がSD15の上層（土師質土器Ⅴ期）より上層にあることからすると、近世でも17世紀後半以降となろう。

石敷遺構2

規模・構造　南北2.5m、幅1m弱で、厚さは石敷遺構1と同様に20cm程度である。ただし、集石の大きさはは石敷遺構1と異なり、径10cm代のものがややまばらに分布する形態を持つ。

年代・性格　石敷に混じる遺物はいずれも小片で、遺構の年代の決め手とはならないが、検出された層位から石敷1と同様近世のものと見られる。また、石敷の位置は、上層遺構の東に伸びる杭列の真下に当たり、この部分が第3図の道に当たる。石敷1同様、道の一部であった可能性が考えられる。

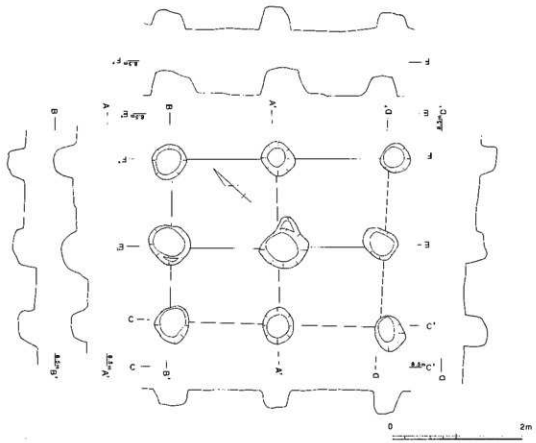
曲物



第68図　古志本郷遺跡SB11・16実測図　(S=1/60)

第６２図W地点から、骨片と寛永通宝１５枚（第６７図）が埋納された曲物が検出された。なお、曲物自体は取り上げ時に損壊し、図化できなかったが、直径おおよそ１５cm前後になるものと思われる。また、埋納されていた骨片も火葬されたものらしく、骨の部位等は判断できなかった。寛永通宝は計１５枚が収められており、１・３・６・７・９・１０・１１・１２・１３・１４がいわゆる古寛永であった。

B、掘立柱建物跡



第69図　古志本郷遺跡SB12実測図　(S=1／60)

ＳＢ１１（第６８図）

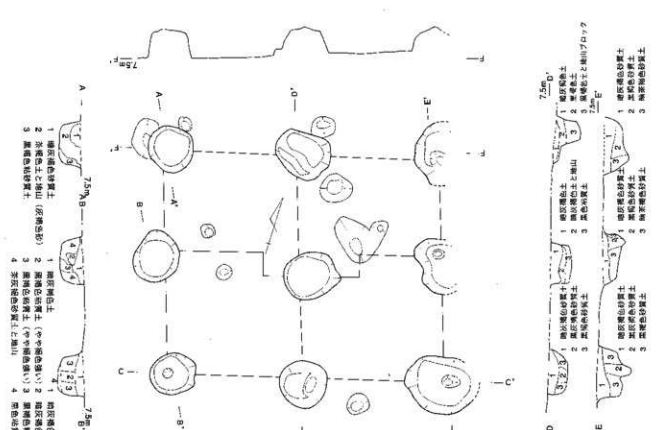
規模・構造　ＳＢ１１はＣ区東端で発見した梁間１間（０.８～１.０ｍ）×桁行１間（１.０ｍ）の掘立柱建物で、他に床束等の柱穴もなく、極めて簡素な作りであるといえる。主軸はＮ－３５°－Ｗを指向する。

柱穴　柱穴はどれもほぼ同じ規模で、上端で直径４０cm程度の不正円形をなし、底部で直径２０～３０cmの円形をなす。深さは２０～４０cmであった。なお、地山は暗灰色の粘質土である。

年代・性格　遺物は出土しておらず、年代、性格等は不明である。ただし、構造的からみても簡素な建物であったろう。

ＳＢ１２（第６９図）

規模・構造　ＳＢ１２はＣ区東やや中央よりにある梁間２間（２.６ｍ）×桁行２間（３.１ｍ）の比較的規模の小さい総柱建物で、ＥＥ’を主軸と想定すると、主軸の方位はＮ－４０°－Ｗとなる。実際、ＥＥ’間の柱穴は他の柱穴に比してやや大きく、これらが棟持柱であった可能性がある。ただし、建物の軸自体は、ＡＡ’ＢＢ’ＤＤ’でそれぞれずれており、全体に不整形な平面形になっている。なお、本建物の西側にも柱穴かと思われるピットがあるが、第６９図で図示した柱穴のような企画性は認められず、ＳＢ１２とは無関係のものとした。本遺構はＳＤ２４に切られている。



第70図　古志本郷遺跡SB13実測図　(S=1/60)

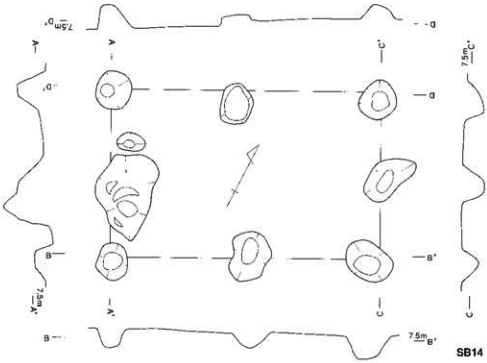
柱穴　おおむね、直径５０cmの円形、底部も４０cmの円形をなし、深さも３０cmで、底面標高もほぼ一定という、全体に企画性が高い柱穴である。なお、地山はＳＢ１１同様固く締まった灰色粘質土であった。

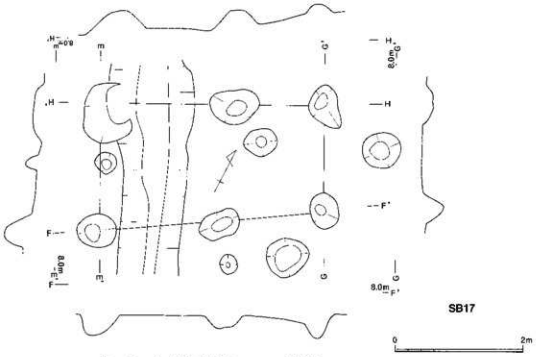
年代・性格　出土遺物は土器小片のみで、時期は不明である。性格は、総柱建物であることから、倉庫が想定される。

ＳＢ１３（第７０図）

規模・構造　ＳＢ１３はＣ区中央に位置する、梁間２間（３.７m）×桁行２間（４.３m）の総柱建物で、ＣＣ'柱列を主軸と見た場合、方位をＮ－７５°－Ｅに指向する。柱間距離も桁方向でで２.１mとなり、間数は少ないものの、相応のしっかりした作りの建物であったことが伺える。なお、中央の柱穴はやや南にずれた位置にあることから、ＤＤ'が棟であった可能性も否定できない。

柱穴　大きいもので長辺約１m、小さいもので直径６０cmほどの不正円形を基本とするが、やや隅丸方形に近いものもある。深さは４０cm前後で、底面標高も一定である。なお東側柱列、南西隅柱穴には柱抜き取り跡、柱の当たりがあり、これらからは直径２０cm程度の柱の存在が推定される。





第71図　古志本郷遺跡SB14・17実測図　(S=1/60)

東側柱列の土層では、この抜き取り痕の上に、さらに暗灰色土が堆積しており、この建物は柱抜き取りが行われた後、放置されたものと考えられる。

年代・性格　出土遺物は土器小片のみで、年代は確定できないが、後述するＳＢ１９と主軸を直交させることから、８世紀後半～９世紀のものと推察される。性格については、倉庫が想定される。

ＳＢ１４（第７１図）

規模・構造　Ｃ区中央、ＳＢ１３の南側に位置する、梁間２間（４.２ｍ）×桁行２間（２.７ｍ）の掘立柱建物である。なお、建物はＳＤ１６の上に完全に載って、これを切っている。主軸はＮ－６３°－Ｅを指向する。本建物で問題となるのは、ＡＡ’、ＣＣ’の中間に位置する柱穴である。いずれも柱列には当てはまるが、特にＡＡ’間の中間柱は柱穴の規模が大きく、本建物と無関係のピットである可能性が高い。そうなるとＣＣ’間の柱穴についても無関係の可能性が出て、梁間１間の建物になることが考えられる。

柱穴　前述の２つの柱穴を除くと、直径５０cm程度の不正円形で、深さは４０cm程度になる。ただし、ＢＢ’ＤＤ’間の柱については、深さが２０cmと浅く、構造を支えないものであった可能性がある。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明であるが、ＳＤ１６を切っていることから、古墳時代前期以前ということはなく、主軸がＳＢ１８と直交することから同じく中世の建物であると考えられる。

ＳＢ１５（第７２図）

規模・構造　Ｃ区中央、ＳＢ１３のさらに南に位置する。梁間１間（３.３ｍ）×桁行３～４間（８.９ｍ）の掘立柱建物で、主軸はＮ－５７°－Ｅを指向する。本建物も、ＳＢ１４同様、ＳＤ１６を切っている。ＳＢ１５を考える上では、まず梁間方向の柱間が３.３ｍにもなることが問題になるが、中間での柱穴はまったく確認されなかった。また、桁行方向は多数のピットを確認できたが、梁間の柱間距離からすると、Ｐ１～Ｐ４のみの３間としてみるのが良いのかもしれない。ただし、Ｐ５・６も位置的には相互に対応する位置にあること、後述する埋土がＰ１～４に類似することから、桁行中央柱間のみ小さい建物も考えられる。

柱穴　いろいろなバリエーションがあるが、Ｐ１～Ｐ６はほぼ一定で、長辺８０cm、短辺６０cm程度の隅丸方形でなし、深さは３０cm程度で揃う。これ以外のものは本建物と無関係ピットとも考えられよう。柱穴埋土はＰ１～Ｐ６で同様の状況を示す。すなわち、柱抜き取りと、その後に砂質土が入り込み、その上に暗灰色土が堆積する状態で、建物の柱が抜き取られて放置されたことを伺わせる。

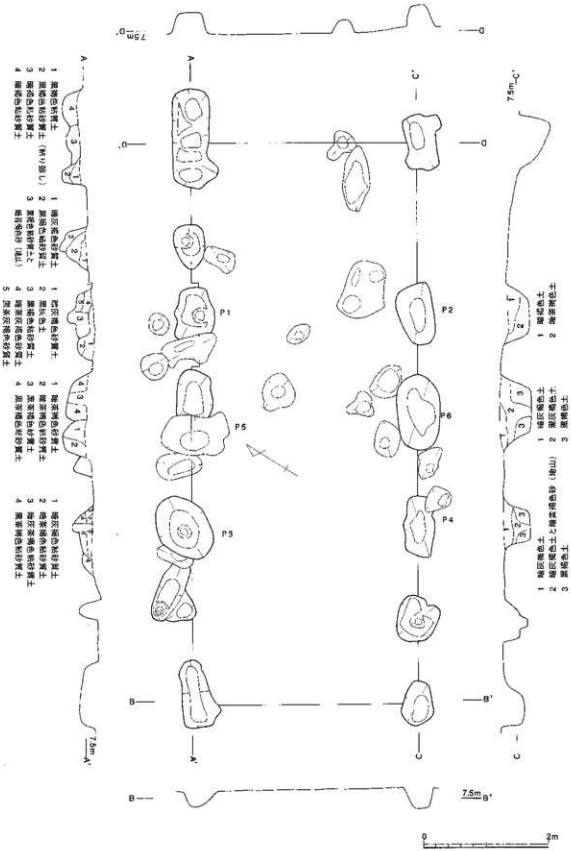
年代・性格　出土遺物は、図化していないが土師質土器の小片が出土している。土師質土器Ⅳ期前後と考えられる。掘立柱建物の性格は不明であるが、Ｃ区の中でもＳＢ２０に次いで大規模であることが指摘できる。

ＳＢ１６（第６８図）

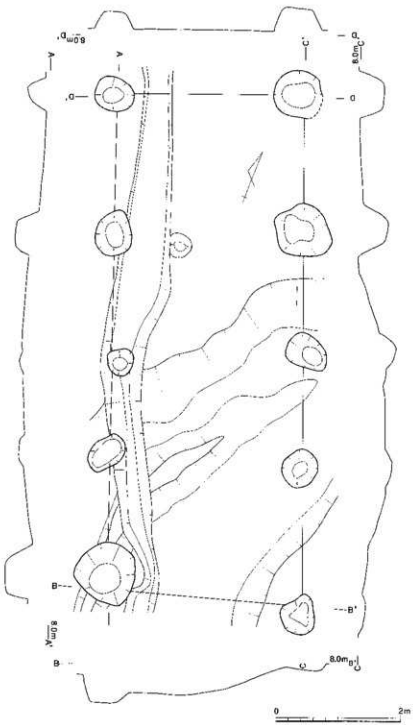
規模・構造　Ｃ区中央南寄りに位置し、ＳＢ１５と重なる。梁間１間（２.２ｍ）×桁行２間（４.８ｍ）で、平面はやや平行四辺形をなす。主軸はＮ－４２°－Ｗを指向する。

柱穴　大きいものは長径７０cm、短径５０cmの不整円形をなし、小さいものは直径３０cmの不整円形をなす等、ばらつきが大きい。柱穴の底面標高も南側柱列の方がやや低めになっている。なお、地山はやや崩れやすい茶褐色砂質土である。

年代　出土遺物はなく、遺構の年代は不明である。



第72図　古志本郷遺跡SB15実測図　(S=1／100)



第73図　古志本郷遺跡SB18実測図　(S=1/60)

ＳＢ１７（第７１図）

規模・構造　ＳＢ１７はＣ区西側南寄りに位置する、梁間１間（１．５～２．０ｍ）ある。主軸はＮ－６３°－Ｅを指向する。なお、本建物はＳＤ３６を切っている。

柱穴　おおむね直径５０cm程度の、不整円形をなすが北西隅柱のみやや大型である。この付近の地山は崩れやすい灰色砂でかなり起伏に富むが、柱穴底面レベルはほぼ一定している。

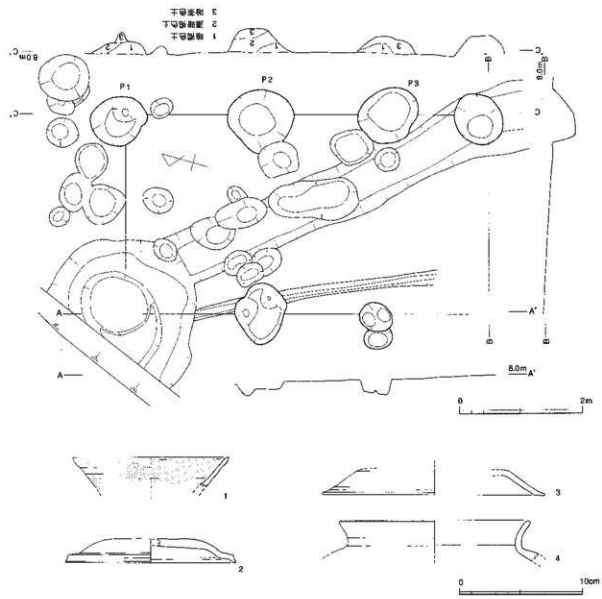
年代・性格　遺物は出土しておらず、正確な年代は不明であるが、ＳＤ３６を切っており、おおむね中世以降の遺物と見ることができる。

ＳＢ１８（第７３図）

規模・構造　Ｃ区西側南寄りに位置すし、ＳＢ１７のすぐ北に当たる。梁間１間（２．８ｍ）×桁行４間（８．０ｍ）の南北に長い建物で、主軸はＮ－２１°－Ｗを指向する。地山は崩れやすい灰褐色砂で、起伏に富んでいる。

柱穴　柱穴は大部分が地山面で検出したためばらつきがあるようにもみえるが、復元すれば南西隅の直径１ｍ程度の不整円形をなす柱穴が本来の形であったろう。底面の標高は７.１ｍほどで一定している。

年代・性格　遺物は土師質土器小片が出土していることから、ＳＢ１８は中世以降のもと考えるこ



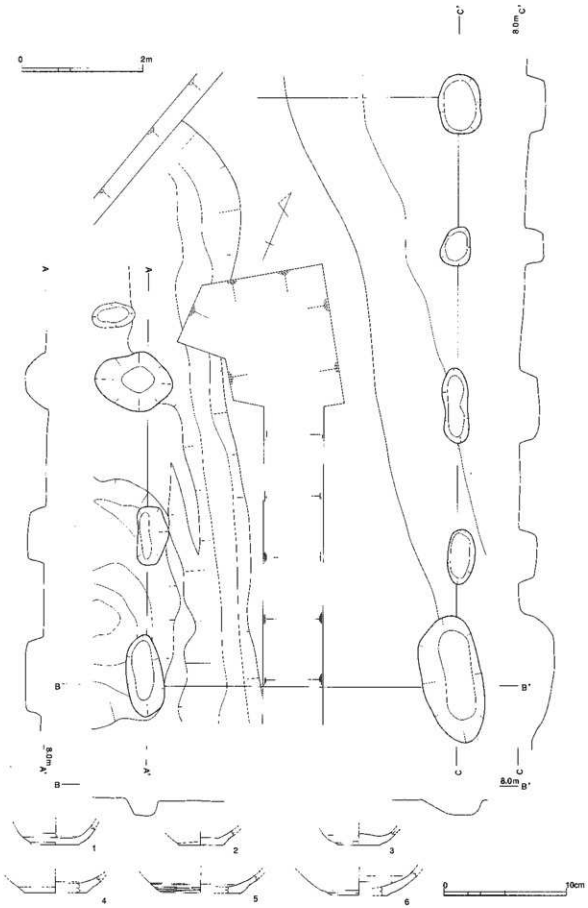
第74図　古志本郷遺跡SB19実測図・出土遺物実測図　(遺構S=1／60　遺物S=1／3)

とができる。なお、ＳＢ１８はＳＤ３８を切っている。

ＳＢ１９（第７４図）

規模・構造　ＳＢ１９はＣ区西側北寄りに位置する、梁間１間（３.２ｍ）×桁行３間（５.９ｍ）の側柱建物である。主軸はＮ－１６°－Ｗを指向する。柱穴は北西隅のものがＳＥ０６に切られて消滅している。また、南東隅の柱穴はまったく検出できなかった。北側柱列にはやや北側にはずれて中間の柱穴があり梁間２間になる可能性もあるが、南側柱列では中間の柱を検出することは出来なかった。なお、ＳＥ０６に切られ、ＳＤ３８を切る。

柱穴　検出できたものはいずれもの直径８０cm、深さ３０cm程度の円形をなしている。柱穴の堆積土はレンズ状をなし、柱根等は確認できないこと、柱Ｐ１の堆積状況から抜き取りが行われた可能性がある。なお、地山は崩れやすい褐色砂質土である。



第75図　古志本郷遺跡SB20実測図・出土遺物実測図　(S=1／60)

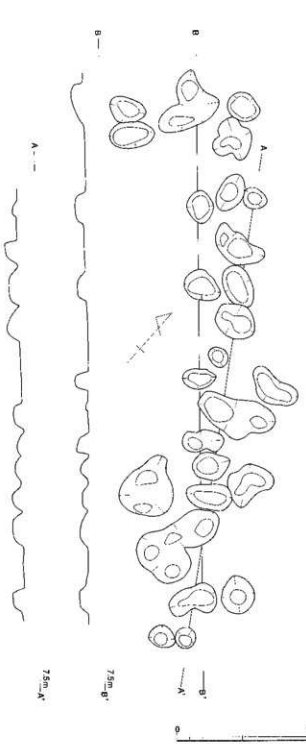
出土遺物　P２・３から１～４が出土した。１は内外面赤彩の土師器坏である。２・３は須恵器の蓋で１は若干の返りを残し、２は返りが消失している。４は須恵器甕である。

年代・性格　出土遺物のうち２・３は高広ⅣB期に該当し、１もほぼ同時期のものであろう。これらの遺物からＳＢ１８の年代は８世紀末～９世紀頃と考えることができる。性格についてはＳＢ１４、ＳＥ０７とセットになる遺構群の中心的建物かと推察される。

ＳＢ２０（第７５図）

規模・構造　ＳＢ２０はＣ区西寄りに位置する、梁間１間（５.０ｍ）×桁行４間（９.６ｍ）の側柱建物で、主軸をＮ－２４°－Ｗに指向する。北西隅は調査区外に出ており、検出できず、中央にはため池跡と思われる撹乱がある。切り合い関係では、ＣＣ’柱列の大部分はＳＤ１８埋土上にあり、ＡＡ’はＳＥ００８を切っている

柱穴　大は長径２ｍ、幅７０cm、小は長径１ｍ幅３０cm小の楕円形をなす等規模の格差が大きいが、これは崩れやすい灰褐色砂の地山に掘られたものが大きいためである。

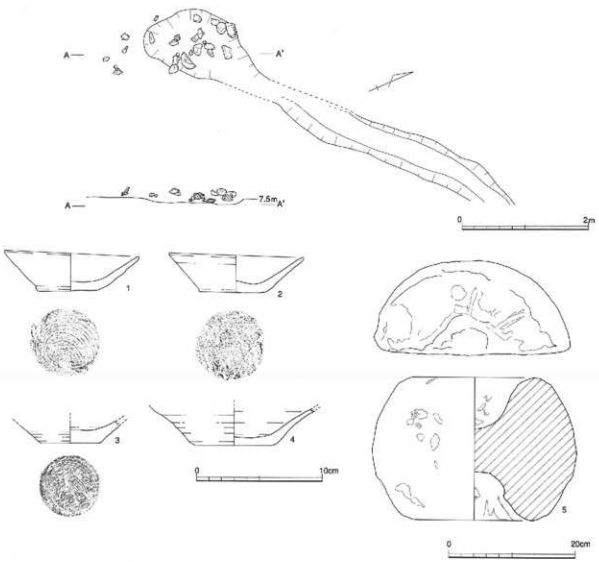


第76図　古志本郷遺跡SA02・03実測図　(S=1/60)

出土遺物　１～６の土師質土器坏が出土した。いずれも完形でなく、時期の判定は困難であるが、丸みを帯びたもの（６）もあるが、やや急に立ち上がるもの（１）等は土師質土器Ⅳ期でも古段階のものかと思われる。

年代・性格　いずれにせよ、ＳＢ２０の年代は中世とみてよいであろう。Ｃ区の中でＳＢ２０は最大の掘立柱建物であるが、概ねの大きさはＳＢ１５に類似し、梁方向に棟持柱をもたない構造を有してる点も共通する。これらの建物が古志本郷遺跡においての基本的形態であった可能性もある。

Ｃ、柵列



第77図　古志本郷遺跡SX02・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

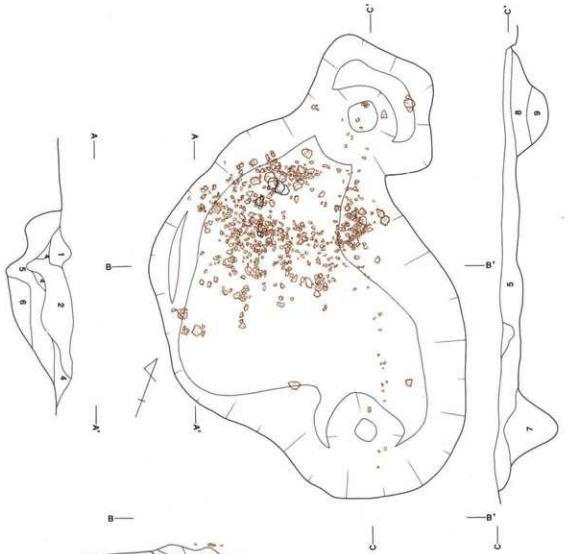
ＳＡ０２・０３（第７６図）

規模・構造　Ｃ区中央に位置する柵列で、ほぼ同じ場所で２回にわたって作り替えられている。ただし、前後関係は不明である。ＳＡ０２（ＡＡ'）は長さ６．８ｍにわたって検出されており、Ｎ－３５°－Ｗを指向する。６～７本の柱から成っていたものと推測される。ＳＡ０３（ＢＢ'）は約７．６ｍの長さが検出され、Ｎ－４２°－Ｗを指向する。柱間距離１．２ｍ平均で７本の柱から成っていたと考えられる。

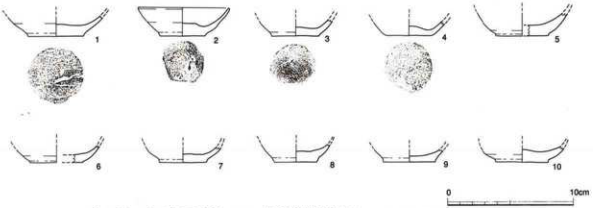
年代・性格　出土遺物はなく年代は不明である。性格については、ＳＡ０２・３の西側には遺構のない地点があること、東側ＳＢ１２とほぼ軸を合わせること等から、ＳＢ１２に関わる区画施設とみたい。

Ｄ、石組遺構

ＳＸ０２（第７８図）



1 茶褐色粘質土（焼土・土器粘土塊片多量混入）
2 黒茶色粘質土（炭混入）
3 暗茶色粘質土（焼土・土器粘土塊少量混入）
4 濃暗茶色粘質土（炭混入）
5 濃褐色砂質土
6 濃灰褐色砂質土
7 暗茶色土（焼土ブロック少量混入）
8 濃褐色砂質土
9 暗褐色砂質土



第78図　古志本郷遺跡SX03・出土遺物実測図1　（遺構S=1／30　遺物S=1／3）

規模・構造　ＳＸ０２はＣ区中央南辺に位置する。五輪塔を含む石が投棄されていた浅い土壙状の施設から、東側に向かって溝が伸びるような構造をなしている。切り合い関係では近世の溝ＳＤ２７に切られている。土壙状の部分は長径１.５ｍ短径１.０ｍの楕円形をなし、深さは２０cm程度と浅い。

出土遺物　主に溝の部分から１～４の土師質土器坏が出土し、５の五輪塔水輪は土壙状の部分から出土した。１・２はやや内湾しながら口縁が線的に伸びる坏で、土師質土器Ⅳ期古段階に位置づけることができる。３も同様のものの破片であろう。４は外反がきつく土師質土器Ⅳ期新段階のものと成るであろう。

年代・性格　出土した遺物か、土師質土器Ⅳ段階の遺構と思われる。性格については不明である。

Ｅ、土師質土器焼成関連遺構

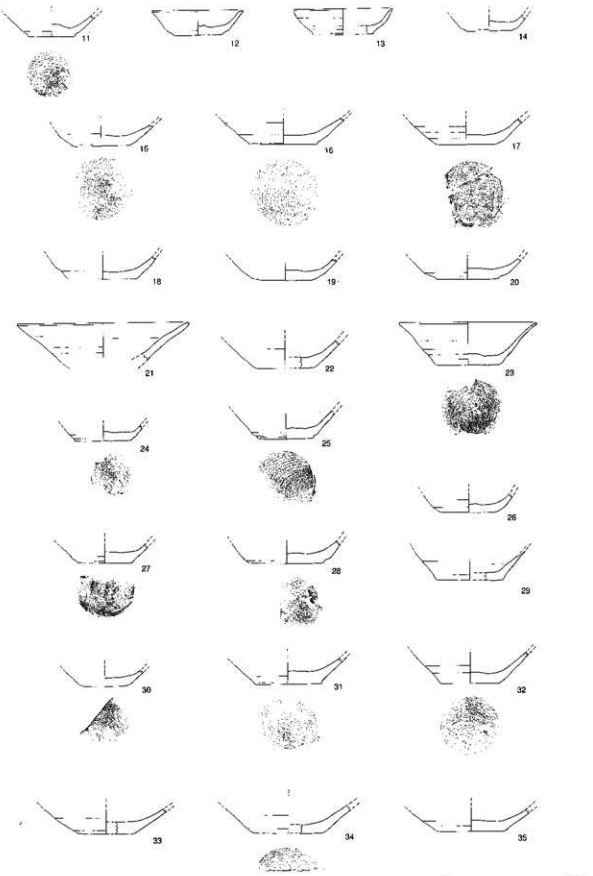
ＳＸ０３（第７８図）

規模と構造　ＳＸ０３はＣ区南西端に位置している。この部分はＣ区の調査時に調査区に下りるための階段をつけるために掘削した部分に当たり、土師質土器が多量に出土した時点で本格的に調査を始めたが、それまでの部分で南側を破壊してしまった。なお、本遺構は他の遺構と異なり第６３図第７層に掘り込まれていた。規模は東西２.４ｍ、南北３.６ｍの三角形をなしており、北東隅と南西隅には直径５０cmの柱穴がある。ただし、後述するようにこの柱は、本遺構の最終的な使用状況以前に使用されなくなったと見るべきである。遺構の断面は丸みを持った逆台形をなしており、確認できる所で最大５０cmの深さを持っていた。

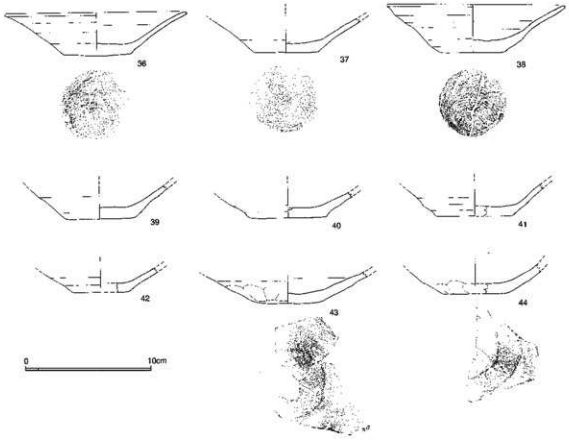
土層堆積状況　土層は上に土器片・粘土ブロック多数を含む茶褐色粘質土、下に炭化物を含む黒褐色粘質土層が位置するセットの土層が２（第１・２層と第３・４層）回堆積しており、その下に地山に酷似した濃褐色砂質土層（第５層）がある。東側の柱穴二つはこの濃褐色砂質土層の下に掘り込まれており、先述のように、土師質土器片を含む１～５層までのが形成された時期には柱が存在したことにはならない。土師質土器は中でも１・３層から、破片が大量に出土した。

出土遺物（第７８図～第８０図）　出土遺物は土師質土器皿・坏等で、このほかに火を受けた直径３cm大の粘土ブロックも出土している。この粘土ブロックには、籾・植物の茎痕等のあるスサ入り状焼粘土塊、焼粘土塊等が含まれる。第７８図１～１０、第７９図１１～１４は土師質土器皿で、底部拓本を載せていないものも含めて、すべて底部は回転糸切りである。口縁端部までの形状を伺えるものは２のみであるが、全体として４cm内外の底径を持ち、口縁部は内湾する器形を持つもの（１～１０）と、器高はやや低く立ち上がりも直線的なもの（１１～１４）に分別される。前者は土師質土器Ⅲ期の皿、後者は土師質土器Ⅳ期の皿と考えられる。なお、胎土はいずれも明褐色で、底部の拓本を提示していないものもすべて底部回転糸切りである。

次いで１５～４４は土師質土器坏である。底径は約５cmと一定しており、胎土は明褐色、底部調整技法は４３・４４を除いていずれも回転糸切りである。１５～２０は立ち上がりの角度が浅く、なおかつ内湾する傾向を持つ。これらは土師質土器Ⅲ期の坏の特徴と見られるが、完形品でない限りⅣ期古段階の坏と分別は困難である。しかし、前述の皿に明らかにⅢ期のものがあるので、対応するものであろう。次いで１６～２３は、口縁が直線的に立ち上がるグループで、Ⅳ期古段階の特



第79図　古志本郷遺跡SX03出土遺物実測図2　(S=1/3)



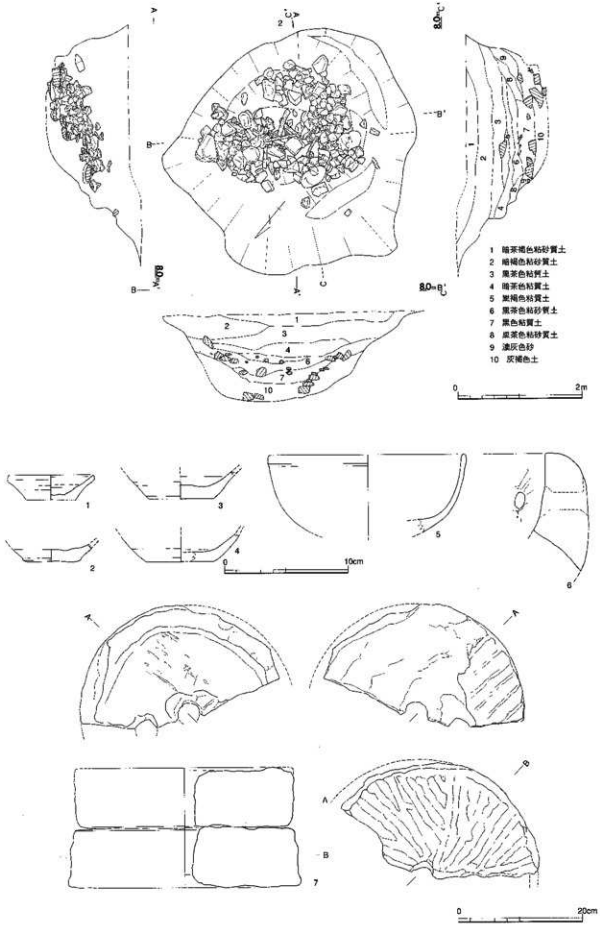
第80図　古志本郷遺跡SX03出土遺物実測図3　(S=1/3)

徴を示している。次の２４～３２は、やや立ち上がりの急なものである。Ⅳ期古段階以降のものに見られる特徴で、完形品であればこの後口縁が外反する。３３～４２までは立ち上がりの角度が浅く、ただちに外反するタイプで、３６などが典型的な器形になる。Ⅳ期新段階のものであろう。４３・４４は、いずれも破片であるが、器形的にはⅣ期新段階の特徴を持つ。ただし、１～４２までの土師質土器すべてと異なり、底部及び底部周辺をヘラによって削っている（坏Ｄ－３類）。本遺跡では類例が少なく、他にＤ区の調査区出土のものに２点見られる（１９１図－１６・１７）。

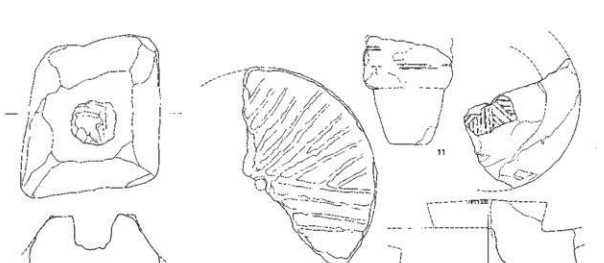
年代・性格　土師質土器片・火を受けた粘土ブロックの混合層と、炭化物を含む層との互層が見られ、土師質土器片が多数出土したが、土壙内に被熱痕跡は見られなかったため、土師質土器焼成に関わる破棄土壙と見られる。土師質土器片の主要な堆積層は２層（第７８図１・３層）あることから、操業時期が２回に別れていたのであろうか。なお、遺構には柱穴２カ所が伴うが、これと土壙の利用法の関係は不明である。遺構の年代は、出土した遺物から土師質土器Ⅲ～Ⅳ期全般にわたっていることが明らかであるが、前述の土師質土器堆積層のうち、上層（第７８図１層）は量的に少なく、両者の時期を区分することは出来なかった。量的にはⅣ期の新段階が一番多く、これが本遺構が機能を停止する直前の時期に当たると考えられる。

Ｆ、井戸

ＳＥ０５（第８１図）



第81図　古志本郷遺跡SE05実測図・出土遺物実測図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／3　遺物7のみS=1／6）



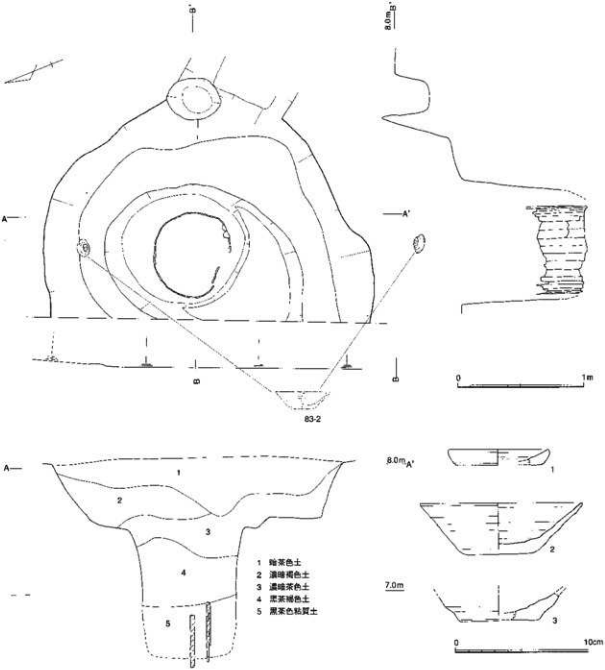
第82図　古志本郷遺跡SE05出土遺物実測図2　(S=1/6)

規模・構造　C区中央南寄りに位置する。上端は直径4mの不整円形をなし、底部は南北1.5m、東西2m前後と東西にやや長い。深さは1.6mほどで、底部標高は6.2mであった。中には径10～40cm大の石が多数存在しており、これらが石組で作られた井側の一部分であると想定される。また、自然木なども投げこまれていた。

土層堆積状況　第81図第8～10層までが井戸掘方の埋土で、5～7層までが井戸の埋土である。1～6層までは、遺構全体に及んでいること、7層以下の石が石組状の状態で出土しているのに対して、1～6層では石が攪拌されたように土層全体から出土することなどから、井戸が廃棄された時点で、石組井側上部を破壊した痕跡の堆積層であると考えられる。

出土遺物　1～4は土師質土器である。1・2は皿で、口縁部まで残存する1は、土師質土器Ⅳ期に相当するものと思われる。3・4は坏である。5は青磁碗で口縁外面が若干肥厚し縁状を呈す。上田E類に当たり、15世紀後半以降のものであろう。6は鉢状の石製品で、口縁部付近に直径3cm程度の穴が開けられている。7は石臼で、雌臼・雄臼とも推定直径36cm、厚さ10cmを測る。雌臼・雄臼とも直径4cmの心棒穴が穿たれて、雌臼には穀物を落とす穴も残っている（直径3cm）。擦り面は雌臼で比較的よく確認でき、6区からなり、それぞれに4～5条の溝が施されている。8は茶臼雄臼片である。高さは13cmで受部は欠損している。心棒穴は2cm程度である。擦り面の直径は20cm程度と推定され、8区から構成されており、4条以上が施条されている。9は雄臼で、直径36cm、高さ11cmを測り心棒穴は直径2cm程度である。擦り面は6区と推定される。10は五輪塔火輪で、上部で一辺13cm、高さ13cmで、空・風輪受けの穿孔がなされる。11は宝篋印塔相輪部で直径13cmである。なお、出土遺物はいずれも1～6層出土である。

年代・性格　SE05は井側を石組とする井戸で、廃棄時に上部が破壊されたものと推測される。出土遺物から、この井戸の上部が破壊されたのは古志本郷Ⅳ期である。

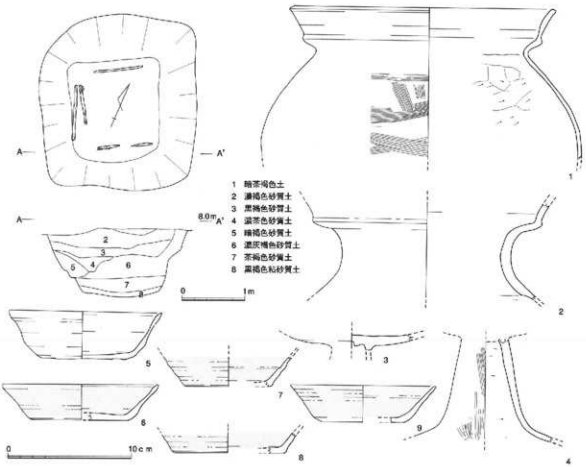


第83図　古志本郷遺跡SE06・出土遺物実測図　(遺構S=1/30　遺物S=1/3)

ＳＥ０６（第８３図）

規模・構造　Ｃ区中央北辺に位置し、　部は調査区外に及ぶ。上下２段からなり、上段は直径２.７ｍ深さ０.５ｍ、下段は直径１.１ｍ、深さ１.２ｍの規模を持つ。底面の標高は６.４ｍ前後である。下段の最下部からは幅１０cm、高さ４０cmほどの板３３枚による（ただし、全周は完存しない）井筒が検出された。この板は大変保存状態が悪く、土壌化しているものもあり、木取りなど不明のものもある。なお、本遺構はＳＤ３８、ＳＢ１９を切っている。

土層堆積状況　茶褐色系の土が堆まっていた。上段の埋土１～３層は井側内外面の区別なく上層に



第84図　古志本郷遺跡SE07・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

堆積している。この部分より上部に井桁などの施設があり、井戸の廃棄時にはそれらが取り払われた痕跡が第１～３層であると考えられる。

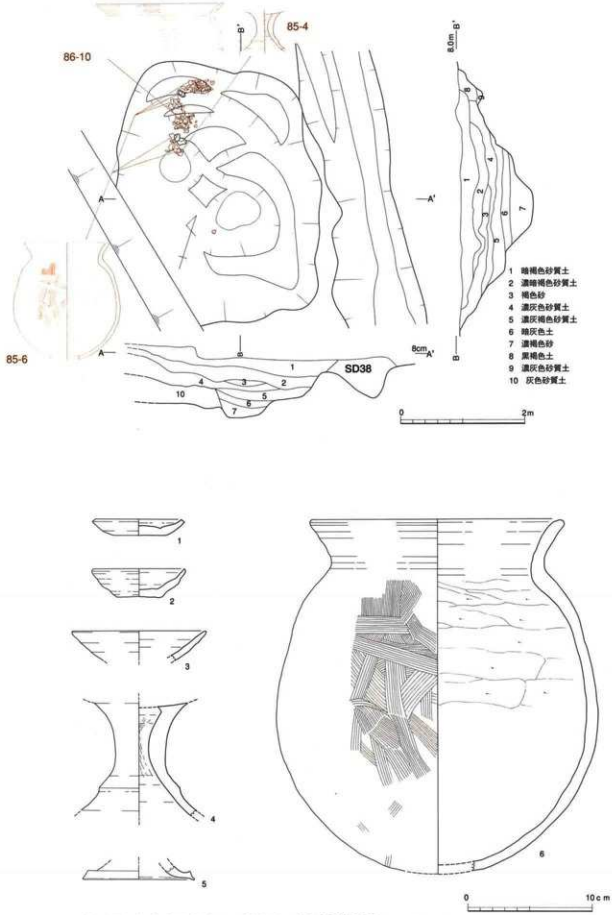
出土遺物　１・２は土師質土器坏である。１は完形品で、上層第２層から出土している。古志本郷Ⅳ期古段階に相当する。

年代・性格　ＳＥ０６は井筒に桶状の板を使い、井側は素掘りで何らかの井桁を持っていたものと推測される井戸で、廃棄時に井桁が取り除かれ埋められたものと推測される。

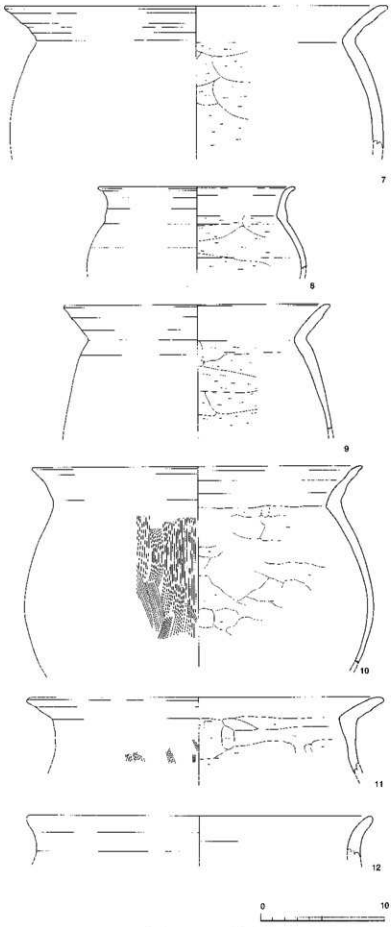
ＳＥ０７（第８４図）

規模・構造　Ｃ区西寄り中央部に位置し、ＳＤ１７を切ってつくられている。一辺２.５ｍほどの隅丸方形をなし、深さは１.１ｍ、底面の標高は６.７ｍ前後である。底部に直径５cm程度が残存する棒状の木製品がコの字状に計４本並べられており、本来は正方形をなしたものと思われる。後述の出土遺物には、ＳＤ１６の遺物があり井戸使用時に混入したと考えられるので、井側部分は素掘りであった可能性がある。この木製品の保存状態は悪く、本来の形状は明らかでないが、井筒に関わる何らかの施設（櫓桟）であったと推定される。

土層堆積状況　埋土は全体として砂質土であるが、１～５層が新たに掘り込まれた印象を受け、あるいは他の井戸同様に井戸廃棄時に行われた井側・井桁の抜き取り・破壊と関係があるのかもしれ



第85図　古志本郷遺跡SE08実測図、出土遺物実測図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第86図　古志本郷遺跡SE08出土遺物実測図2　(S=1/3)

ない。

出土遺物　1～4は弥生時代終末～古墳時代前期にかけての遺物で本遺構に切られるSD17の遺物と考えられる。1は口径21.5cmを測る大型の甕である。2は甕の頸部、3・4は高坏片である。いずれも草田6～7期の遺物であろう。これらの遺物は底部から出土しており、SE07が素掘りであったことを伺わせる。5～9は土師器坏で、5を除いてはすべて底部を除き内外面赤彩である。底部調整は最終的にはナデで、糸切り痕跡は確認できない。平安時代の遺物と考えられる。**年代・性格**　SE07は隅丸方形の素掘り井戸で、井筒には方形の横桟が使用されていたと考えられる。この井戸の周辺は奈良・平安時代の遺物包含層も残り、同時代と考えられる遺構SB19などとセットになる井戸であると思われる。

SE08（第85図）

規模・構造　C区西寄りに位置し、3m×4m程度の不整形をなす。深さは1.2mで、底面の標高は6.8mである。こ

の井戸は、西側の古墳時代後期の井戸（第８～１０層）と中世の井戸（第１～９層）の二つが重複しており、いずれも断面は擂鉢状を呈している。なお、１０層には土壌化した木材が残っており、木製井筒が想定される。

土層堆積状況　東側井戸の埋土第１～７層は黒褐色系の粘質土と砂質土の互層的状況であった。西側井戸の埋土の第１０層は地山に近い褐色砂質土であった。

出土遺物（第８５・８６図）　１～３は土師質土器で、中世の井戸部分から出土した。古志本郷Ⅲ期のものである。４～１２は古墳時代井戸の北側法面から出土した。４は土師器脚部有段高坏で、５は須恵器高坏脚部である。６～１１は土師器甕で、８が直立する口縁を持つタイプで、１１が水平に折れる口縁を持つ他は、くの字状の口縁を持つものである。いずれも内面は横方向のケズリである。１２は甑であろう。

年代・性格　出土遺物の年代からは、東側の井戸が古志本郷Ⅲ期、西側の井戸が古墳時代後期～奈良時代（第８６図１１）と考えられる。構造はいずれも素掘りで、西側のみ木製井筒を持っていたと考えられる。廃棄時の破壊などは明瞭に認められなかった。

G、土壙

ＳＫ２０（第８７図）

規模・構造　Ｃ区東側北辺に位置する。直径６０cm、深さ４０cmほどの掘り方に、直径４０cm、高さ４２cmの木製桶が埋納されていた。桶は、底板並びに蓋板が現存し、蓋板は中に落ち込んでいた。その部分に第１・２層の暗灰色系の土が進入していた。また、側板も一部土圧によって内側に折れていた。このことから、桶が中空のまま埋設されたと考えられる。なお、桶の内部には遺物などは存在しなかった。

埋納桶　桶は底板、側板、蓋板からなり、外側に三段の竹タガが締められていた。底板は２枚の柾目材からなり、竹の目釘で継いでいる。天井板も同様に２枚の柾目材を竹の目釘で継いだものである。側板は合計１６枚で構成されていた。側板は、完形のもので長さ４２cm、幅は桶底部で６.５～７.０cm、桶上部で７.５～８.０cm、厚さ１.０cm前後である。ただし、一枚だけが下幅４.０cm、上幅４.５cmで、他の１４点とは違う規格である。企画されている大きさの板があり、それで側板を組み、最後の一枚だけ、調整のために幅を削るなどの加工を加える、という製造工程を想定できる。次に板の木取りであるが、５枚が柾目、８枚が追い柾目、１枚が追い板目、２枚が不明であった。全体に柾目が中心ではあるが、柾目材だけではなく、板目以外のすべての部位が利用されている感がある。このことは板目の板材からの加工よりも、一つの木材から板材を作り、板目を除いた部分で一つの桶を構成したことを推測させる。

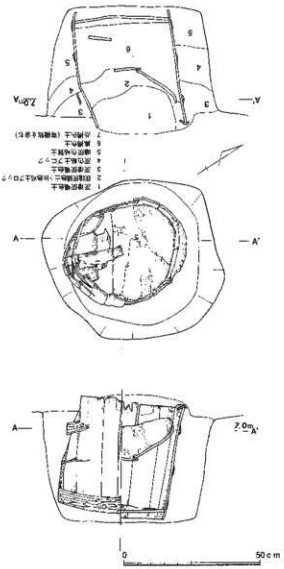
年代・性格　出土遺物はなく、年代・性格は不明であるが、後述するＳＫ２１・２２と構造・埋土も類似することから、小さいながらも近世の木棺墓と考えられる。

ＳＫ２１（第８８図）

規模・構造　Ｃ区東寄り北側、ＳＫ２０のすぐ南側に位置する。直径１.０m、深さ０.６mの掘り方に、直径４０cm、高さ５２cmの桶が埋納されている。蓋板・底板とも現存しており、蓋板は完

全に内部に落ち込んでいた。また側板には、しっかりと底板のアタリがついていることから、桶の内部は中空で埋設され、後に土圧によって蓋が陥没したものと考えられる。桶内部には茶褐色系の土が堆積していたが、中でも桶の底板上部には乳褐色のゼリー状の物質が付着しており、これについては土壌分析を行った（Ⅳ　自然科学的分析参照）。なお、埋土の一部（第１層）は、ＳＫ２２の埋土であり、ＳＫ２２の埋設に当たり、ＳＫ２１の上部も掘り返されたと考えられる。

埋納桶　ＳＫ２０の埋納桶同様、底板、蓋板、側板からなる。底板は３枚の板材からなり、日釘によって継がれていた。蓋板は同じく３枚の柾目板材からなり、日釘によって継がれていた。側板は合計１６枚からなり、外形は縦５０cm、下幅７cm、上幅９cm、厚さ１cmのもの１３枚と、幅が約４．０～４．５cmのもの３枚からなる。幅の狭いもの３枚の組み込まれた場所には特に規則性はないが、２枚は隣り合わせになっていた。側板の木取りは６枚が柾目、８枚が追い柾目、１枚が追い板目で、残る一枚は中心部分を使っていた。この木取りはＳＫ２０同様、板目を除いてかなり多様な木取りであると言うことができ、同一木取りの板材からではなく、同一の木材から木取りを行った板材を元に、この桶が組まれたことを推測させるものである。

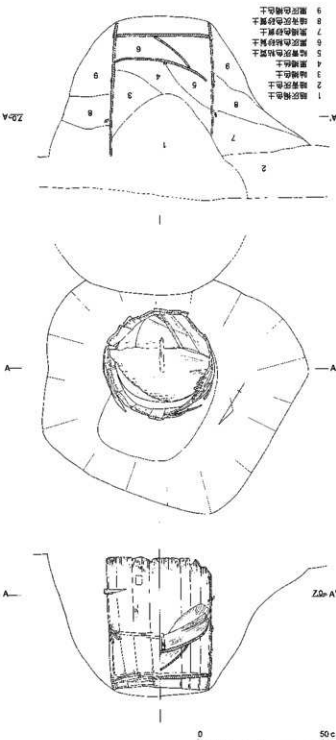


第87図　古志本郷遺跡SK20実測図　(S=1／15)

年代・性格　年代については、次に挙げるＳＫ２２には先行するが、埋土の様子などからほぼ同時期の近世のものであると推測される。性格は、土壌分析の結果、底板の付着物から人間の男性の脂肪酸が検出されたことから、木棺墓であると考えてよかろう（Ⅳ　自然科学的分析参照）。

ＳＫ２２（第８９図）

規模・構造　Ｃ区東側北寄りに位置し、ＳＫ２１と接して、ＳＫ２２の掘り方が、ＳＫ２１の掘り方を切っている。規模は、長辺２．８ｍ、短辺１．６ｍの楕円形で、深さは４５cmを測る。その中に長さ約７０cm、直径６０cmの桶が横倒しにして埋納されていた。ＳＫ２０・２１同様、桶は土圧によって完全につぶれた状態であったが、調査時には一部に空隙部残っており、本来、中空のまま埋設されたと考えられる。堆積土は桶掘り方埋土と、桶の上層の埋土はいずれも暗灰色系の土であり、桶の内部には茶褐色土が堆積していた。また、第６・７層はＳＫ２１同様の淡褐色のゼリー状の土壌で、同じく土壌分析を実施した。また、取り上げ時に損壊したが、桶の底面にはの布製品が敷か



第88図　古志本郷遺跡SK21実測図　(S=1/15)

れていた。

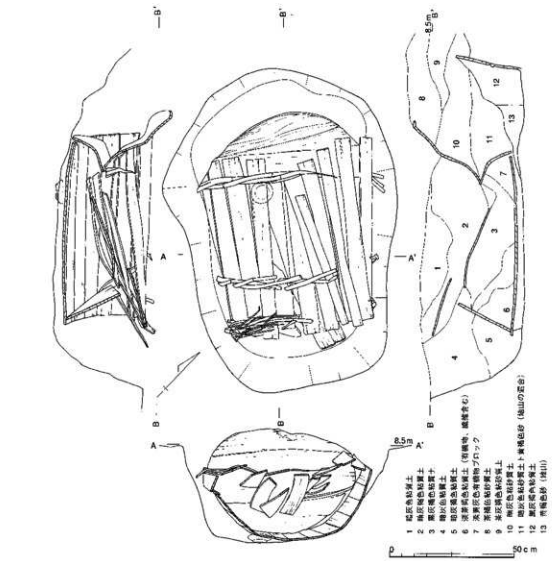
埋納桶　桶は底板、蓋板、側板それぞれ完存しており、上中下3段の竹タガで締められていた。底板・蓋板は2～3枚の板を日釘で継いだものである。側板は、合計26枚からなり、外形は長さ74cm、下幅5.0～6.5cm、上幅6.5cm～8.0cm厚さ0.6～7mmを基本として、幅が4.0～5.0cmのものが2枚だけ存在している。SK20・21の桶に比べるとやや厚さが薄い。また側板の木取りは、若干追い柾目風のものがあるが、ほとんどすべてが柾目といってよく、SK20・21の桶の見られたような木取りの多様性はみられない。これは、柾目板材群からこの桶の側板を作り出す、という作業工程を推測させる。

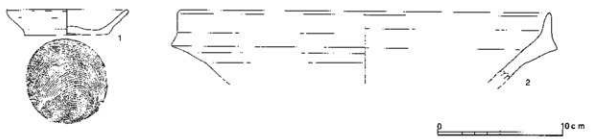
出土遺物　桶の底から、1の完形の土師質土器皿が出土した。また掘り方からは2の備前焼擂鉢が出土している。1は出土状況から本来的にこの桶に伴うものと考えられ、古志本郷Ⅵ期に当たる。

年代・性格　出土遺物からSK22の年代は近世で、土壌分析の結果は人の脂肪酸が検出されることから、木棺墓と推定される。ただし、何ゆえ木棺を横倒しに埋納したかについては、底部の土師質土器埋納と共に、SK20・21と異なる性格によるものであるとも考えられる。

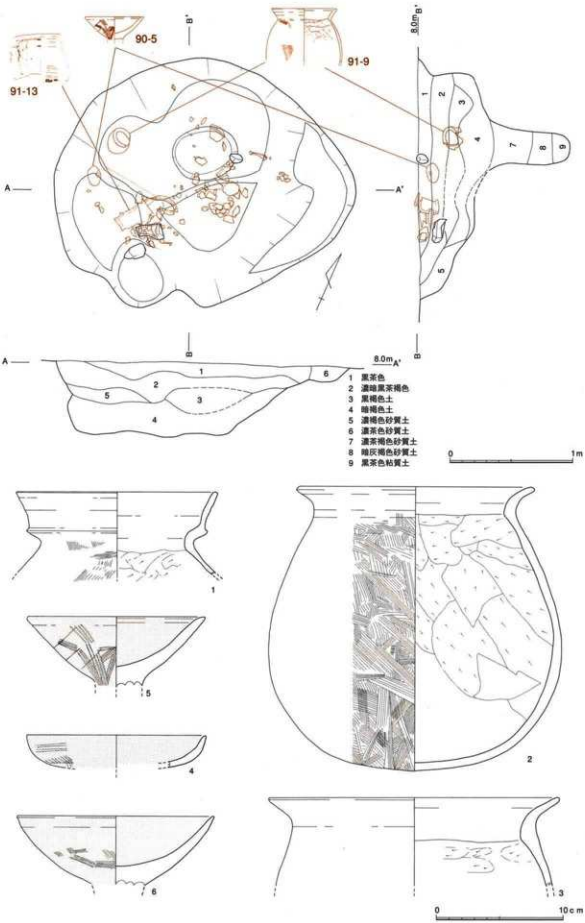
SK23（第90図）

規模・構造　SK23はC区中央やや北寄りに存在し、長辺2.5m、短辺2.0mの楕円形をなし、深さは0.6mであるが、局所的に1.2mの深さに達する穴状の部分がある。堆積土は黒褐色系の土であるが、前述の穴状部分については褐色系の砂質土が堆積していた。穴状の部分を除くと断面は

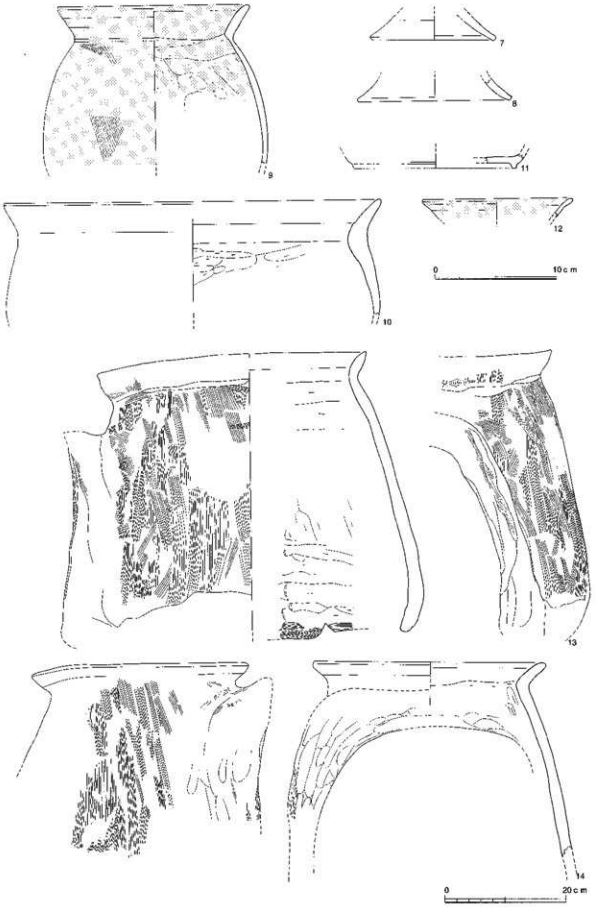




第89図　古志本郷遺跡SK22・出土遺物実測図　(S=1/15)



第90図　古志本郷遺跡SK23実測図・出土遺物実測図1　（遺構S=1／30　遺物S=1／3）



第91図　古志本郷遺跡SK23出土遺物実測図2　(7～12、S=1／3　13・14、S=1／6)

箱型で、このうち第１～３層から遺物が出土した。

出土遺物（第９０～９１図）　１は口径１６cmの複合口縁を持つ中型の甕で、口縁端部に若干の面を持つ。草田６期に相当するか。４は土師器の坏で復元すると口径の割りに深さの少ない低平な器形になる。内外面赤彩で外面には横ハケを施す。５・６は土師器高坏で、いずれも坏部の断面が逆三角形をなすものである。共に内外面赤彩である。７・８は高坏の脚部であろう。

２・３・９は土師器甕である。いずれも口縁部をくの字状にし、特に２・３は外反がきついものである。２は体部下方に最大径がくる下脹れもので、外面は縦ハケ、内面は頸部付近は横方向のケズリ、体部以下は縦方向のケズリを施す。９は口縁の外反がゆるく、外面は縦ハケの後に赤彩、内面も肩部までケズリの後に赤彩してる。ケズリは頸部のみ横方向である。１０は口径３１cmを測る大型品で甑と推定される。１１は須恵器坏あるいは高台付皿の底部である。１２は土師器坏で、回転ナデの後、内外面を赤彩するものである。１３・１４は移動式竈で１３が口径約４０cm、１４がやや小さく３０cm程度のものである。１４は外面に縦ハケを施し、内面は体部上部が縦方向のケズリ、体部下部が横方向のケズリであり、底部は断面が半円状なるように調整が施され、内面に横ハケが施されている。１４は外面は縦ハケが施される。焚き口が大きく底は本体の直径を上回る。

年代・性格　出土遺物は古墳時代前期（１）もあるが、中心は古墳時代後期で、最も新しいもので奈良時代（１１・１２）までと考えられる。中央部の穴が問題だが、廃棄土壙と考えておきたい。

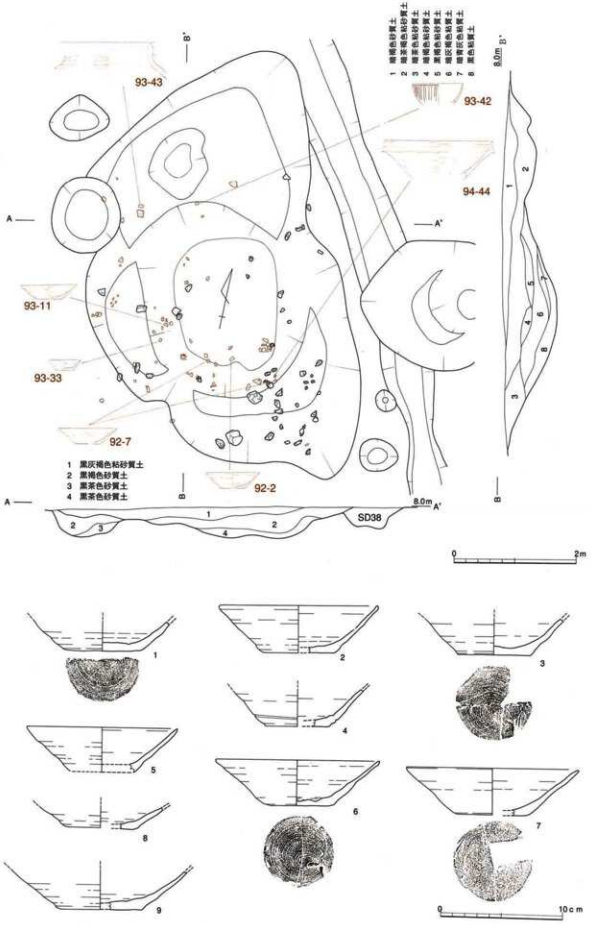
ＳＫ２４（第９２図）

規模・構造　Ｃ区西側の中央に位置する。長辺７m、短辺４mの不整形をなし、深さは最も深い南側の中心部で１.０mを測る。ＳＫ２４の堆積状況を見ると、この土壙が１回の掘り返しを受けていることがわかる。すなわち、第１～３層の上層部と、第４～８層からなる下層部である。また、土壙の平面形を見ると、北側と南側に別れることも明らかで、前述の堆積状況とセットで考えると、上層が北側の浅い部分を中心に広く掘り返された後に堆積したことがわかる。以上のことから、南側の比較的深い擂鉢状の土壙が埋まった後に、広く浅い土壙が再び掘られたと考えられる。遺物は、ほとんどが下層（４～８層）から出土している。なお、本遺構はＳＤ３８を切る。

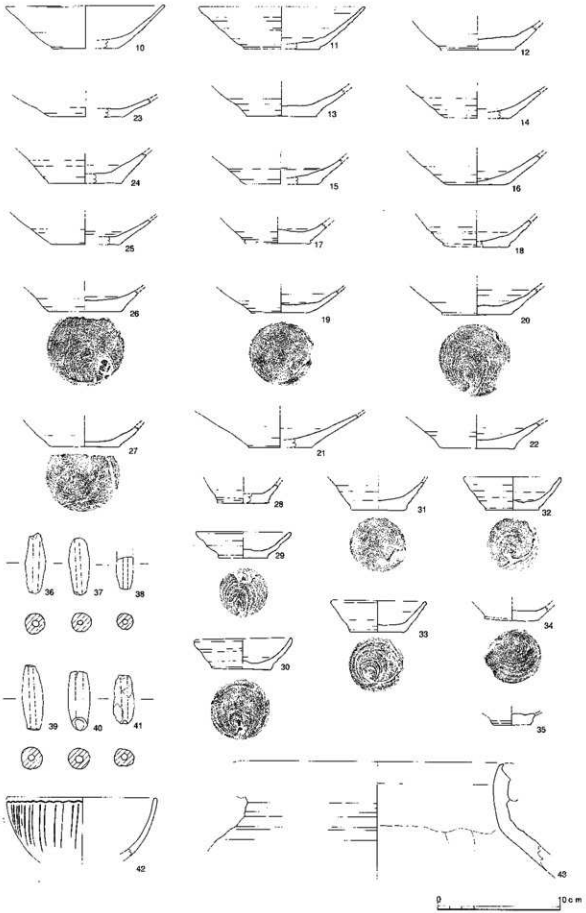
出土遺物（第９２～９４図）　１～２２は土師質土器坏である。このうち、１はやや丸みを持って立ち上がるもので、土師質土器Ⅲ期に相当する。次いで２～５、９・１０は立ち上がりが直線的なもので、土師質土器Ⅲ期から同Ⅳ期の古段階に相当する。６・７は立ち上がりはやや急で、途中から外反するものである。１２～２０、２４も同様のものの破片と考えられる。土師質土器Ⅳ期の中段階に位置づけられる。２１～２３、２５・２６は立ち上がりからすぐに外反する器形で、完形品であれば大変低平になるものである。２８～３５は土師質土器の皿である。いずれも底径４cm程度で、２９・３０がやや丸みを持つ他は、直線的に立ち上がる器形である。坏との対比からこれらが土師質土器Ⅳ期の皿に当る。なお、３５のみは底径が２.８cmと小さく器壁も薄い。以上、土師質土器は、すべて明褐色系の胎土を持ち、底部は回転糸切りである。

３６から４１は管状土錘である。長さ３cm程度のものから５cm程度のものまである。

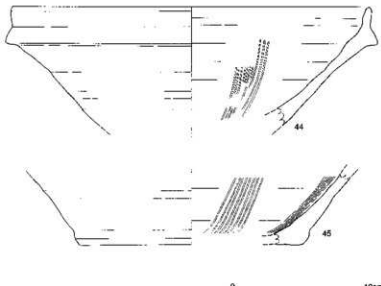
４２は青磁碗で、線描の蓮弁を持つ。器形は丸みを持ち、蓮弁の単位も意識されており上田Ｂ－Ⅳ類に当たる。１５世紀後半から１６世紀のものと考えられる。４３は頸部内径２０cm程度の陶器の甕口縁部である。口縁部は剥離しているが玉縁状をなし、備前焼と思われる。４４・４５は備前



第92図　古志本郷遺跡SK24実測図・出土遺物実測図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第93図　古志本郷遺跡SK24出土遺物実測図2　(S=1/3)



第94図　古志本郷遺跡SK24出土遺物実測図3　(S=1／3)

焼塩鉢で、口縁の形状から岡壁Ⅳ期に該当するか。

年代・性格　遺構の年代は、出土した土器から下層が古志本郷Ⅳ期に当たる。性格は廃棄土壙かと思われる。

ＳＫ２５（第９５図）

規模・構造　ＳＫ２５はＣ区東側、中央に位置する。上端で長径３ｍの楕円形をなし、底部も同様の楕円形の平坦部を持つ。断面形は逆台形で、底部の標高は６.３ｍである。

土層堆積状況　土層はレンズ状に堆積し、上層は茶褐色土、下層は黒灰色土と灰色砂（地山）の混合層が占めている。全体として、下層が形成には帯水が考えられ、上層は腐植土化している。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明である。性格は、底部が平坦なことや土層の堆積状況から、池や素掘り井戸などが考えられる。

ＳＫ２６（第９５図）

規模・性格　ＳＫ２６はＣ区東側北寄りに位置する。規模は直径１ｍの楕円形で、深さは３０cmばかりである。中に直径３０cm大の石が置かれていた。出土遺物はなく、年代・性格は不明である。

ＳＫ２７（第９５図）

規模・構造　Ｃ区中央北寄りに位置する。規模は直径２ｍの円形をなし、その中央に、１段下がって、直径１ｍ底径０.５ｍの穴が掘られる２段の構造をなしている。深さは全体で０.８ｍほどであり、底部の標高はＳＥ０５などと同様に６.３ｍ前後である。また、西南に伸びる溝も存在する（第６２図）。

土層堆積状況　土層は、第１・２層が上段に対応し、第３～５層が下段に対応している。もとより２段の構造を持っていたとも考えられるが、何らかの理由で上部を再掘削された可能性もある。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明である。性格としては、底部標高などから、素掘り井戸